

音 無瀬 I

—新潟県柏崎市・音無瀬遺跡発掘調査報告書 I —

2012

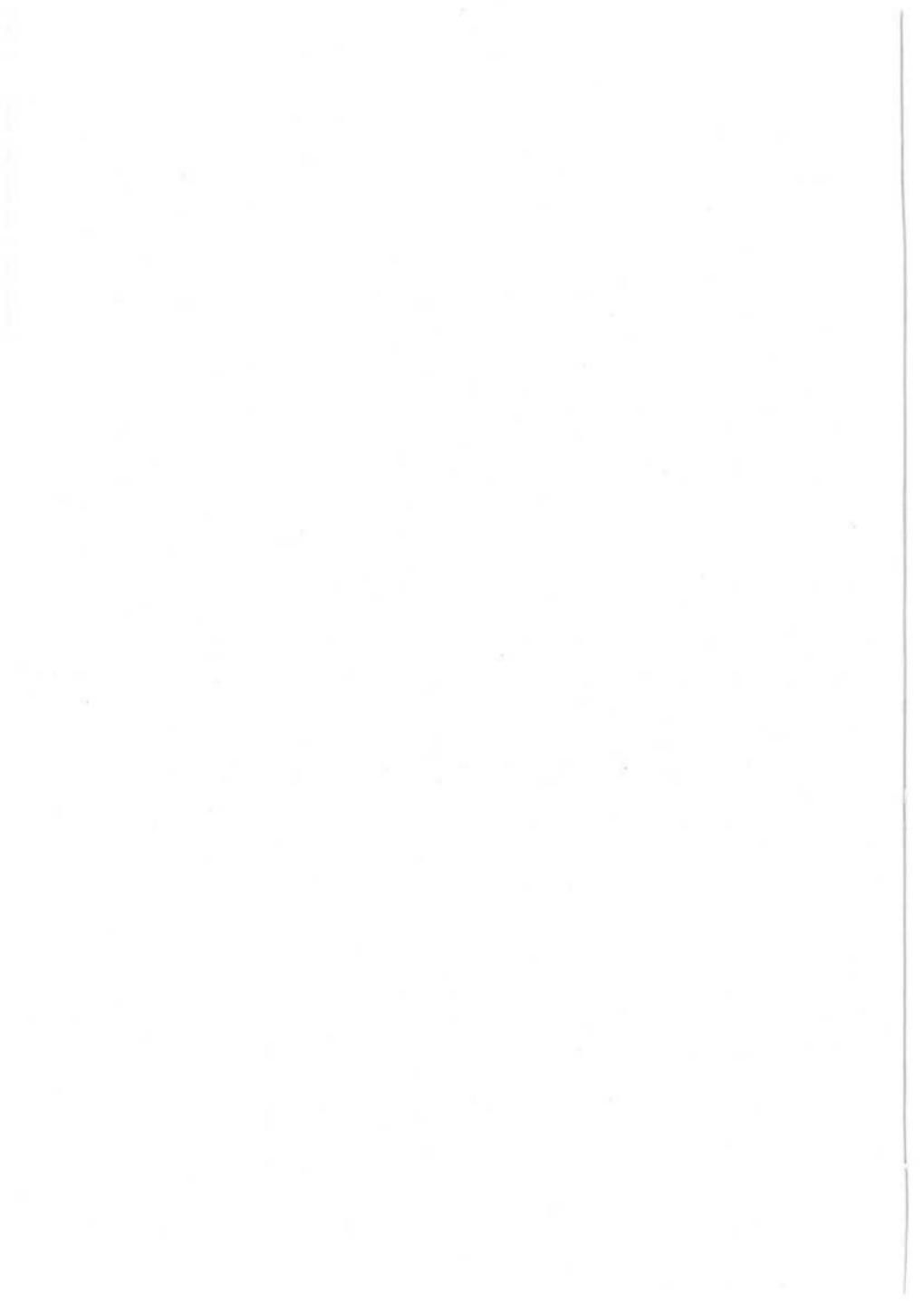
柏崎市教育委員会

音 無瀬 I

—新潟県柏崎市・音無瀬遺跡発掘調査報告書 I —

2012

柏崎市教育委員会





a.遠景(八石山から)

(南から)



b.調査区全景

(西から)



a. 造橋群完備状況と国光尾根

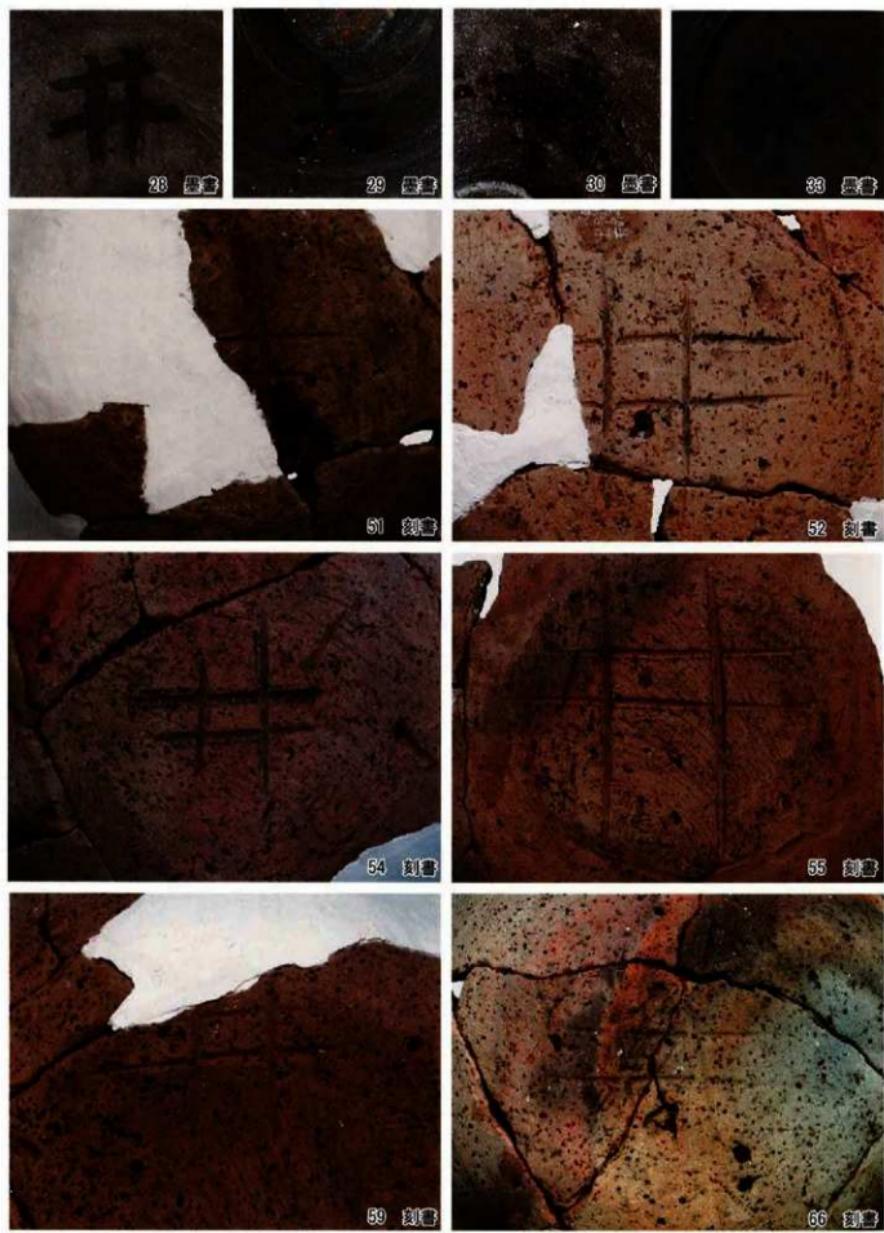
(南東から)



b. 造橋群完備状況

(南東から)





(約 1 : 1)

序

「古代へのロマン」、市民の皆さんも、多くの方が思い抱くことかもしれません。しかし、柏崎市域などでは、古代の史料や文化財がほとんど残されておらず、身近な地域で古代に触れる機会は、極めて少ないというのが実情でしょう。

ところで、音無瀬遺跡は、柏崎市立北条中学校の移転新築事業を契機に発見されましたが、発掘調査は、学校周辺整備事業の一環であった市道改良工事を原因として、平成8年（1966）の晩秋に行われました。

遺跡の時代は、9世紀前半の平安時代前期を主体としており、その時代の建物跡や水が流れている幾筋もの流路が、溝の跡として発見されました。そして、最も古い一本の溝からは、たくさんの割れていない杯や杯蓋などが出土し、それらの多くに「井」という文字が、黒い墨や線で書かれていました。これらは、水に関連した何らかの儀式に使われ、その後、水路内に捨てられたと考えられますが、埋もれて溝跡となった水路には、重要な意味が込められていたことを強く感じさせます。

実は、江戸時代後期の『白川風土記』を紐解くと、音無瀬遺跡が所在する地に、「オトナセ川」という用水があったことが記されています。この用水路は、現在、深沢頭首工の中堰から取水され、市道に沿うよう整備されており、今も現役として水田を潤していました。

遺跡から発見された溝跡群は、少しずつ流路を変えていましたが、その位置や立地はほぼ同じであることから、オトナセ川の前身的な存在であった可能性が高いといえるでしょう。これら用水路が、現在地にて1200年もの長きにわたり、同じ水田を潤し続けていたとすれば、それはすなわち水路を維持管理し、田を耕していた人々の歴史を物語ることになります。

このたびの発掘調査は、このような地域史の一端を知る端緒となったことは間違ひありませんが、この成果を報告する本書が、地域の歴史を理解し、地域を知る一助になるとすれば、これ以上の喜びはありません。

最後に、今回の発掘調査に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会と工事関係者、そして発掘調査に参加された（社）柏崎市シルバー人材センターの会員の皆さんに對し、深く感謝し、御礼申し上げます。

平成24年7月

柏崎市教育委員会

教育長 大倉政洋

例 言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字北条字音無瀬地内に所在する音無瀬遺跡の発掘調査記録である。
2. 本事業は、柏崎市立北条中学校の移転に伴う周辺整備事業として計画された市道柏崎22-18号線の道路改良工事に伴う事前調査であり、柏崎市教育委員会が主体となって発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査事業に係る現場作業は、平成8年11月6日に着手、同年12月18日まで実施した。整理作業および報告書作成作業については、現場作業終了後に遺物の水洗・注記等の基礎整理作業を行ったが、その後は平成15年度～16年度、平成20年度～平成23年度等断続的に整理作業や報告書作成作業を実施した。
4. 発掘調査現場作業は、(社)柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受け、柏崎市遺跡調査室(現遺跡考古館)の職員等を調査担当・調査員等として実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市遺跡考古館(柏崎市小倉町)において、調査担当を中心に、同館のスタッフで行った。
5. 発掘調査によって出土した遺物は、註記に際し、遺跡名を「オトナセ」とし、グリッド・造構名および層序等を併記した。
6. 本報告書の執筆・編集については、調査担当の品田が行ったが、遺物の写真撮影や図版作成については、徳間香代子(遺跡考古館埋蔵文化財調査員)と吉浦啓子(遺跡考古館非常勤職員)の協力を得た。
7. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会(柏崎市遺跡考古館)が保管・管理している。
8. 本書掲載の図面類の方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 図面図版については、図版1以外はすべて㈱セビアス・㈲不二出版によるデジタル・トレースで作成したものであり、挿図もこれらデータから作成したものが含まれる。
10. 発掘調査から本書作成に至るまで、それぞれの事業主体者および関係者等から様々なご協力とご理解を賜った。本書では個々に芳名を記さないが、厚く御礼を申し上げる次第である。

調査体制(平成8年度)

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

總括 西川辰二(社会教育課長)

監理 坂口達也(社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱)

庶務 宮山 均(社会教育課社会教育係主査)

調査担当 品田高志(社会教育課文化振興係主査・学芸員)

調査員 伊藤啓雄(社会教育課文化振興係学芸員)

帆刈敏子(社会教育課文化振興係嘱託)

調査補助員 竹井 一・黒崎和子(社会教育課文化振興係遺跡調査室)

現場作業スタッフ

大園信一・木村勝治・小林辰雄・閔 孝之・閔 ミツ・高橋義昭・野沢知之

吉田雄二・渡辺洋之助(社団法人柏崎市シルバー人材センター:五十音順)

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 歴史的な環境と周辺の遺跡	5
1) 柏崎平野の古代・中世概観／5	
2) 長鳥川下流域の古代・中世の遺跡／9	
III 遺跡と遺構	14
1 遺跡概観と調査区	14
1) 音無瀬遺跡概観／14	
2) 調査区とグリッドの設定／16	
3) 層序／16	
2 調査の経過	17
3 遺構の分布と配置	20
4 遺構各説	21
1) 溝跡／21	
a. 溝A群／21	
b. 溝B群／22	
c. 溝C群／25	
d. 溝D群／25	
2) 建物跡・柱穴・ピット類／26	
a. SB-20建物跡／26	
b. ピット類／26	
IV 出土遺物	27
1 遺物の概要	27
2 土器・陶磁器類	27
1) 古代の土器・陶器類（音無瀬第Ⅱ群土器）／28	
a. 出土状況と傾向／28	
b. 種別と器種構成／28	
c. 食膳具の法量／34	
d. 胎土と混和材／36	
2) 古代以外の土器・陶磁器類／40	
a. 音無瀬第Ⅰ群土器（縄文土器）／40	
b. 音無瀬第Ⅲ群・第Ⅳ群土器／40	
3) 遺構出土の土器・陶磁器類の概要／41	
3 漆器・木製品・金属製品・石製品	43
V 総括	44
1 音無瀬遺跡における古代土器の様相	44
1) 音無瀬第Ⅱ群土器の様相／44	
a. 第Ⅱ群土器の概要／44	
b. 音無瀬第Ⅱa群土器／45	

2) 音無瀬第Ⅱ群土器の編年的な位置付け／47	
a. 柏崎平野の古代土器編年／47	b. 柏崎平野の古代前期の土器群／47
c. 柏崎平野の前期古代土器の変遷／51	
d. 音無瀬第Ⅱ群土器の編年的位置付け／53	e. まとめと今後の課題／54
2 音無瀬遺跡からみた地域史と課題 一調査のまとめにかえて—	55
引用・参考文献	57
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 柏崎平野の地形分類図と音無瀬遺跡の位置／3	
第2図 刈羽郡城の莊・保と主要城館／7	
第3図 音無瀬遺跡周辺の遺跡／10	
第4図 亀ノ倉遺跡出土遺物／13	
第5図 音無瀬遺跡概要図／15	
第6図 音無瀬遺跡確認調査出土遺物／15	
第7図 グリッド別遺物分布図／29	
第8図 音無瀬第Ⅱ群土器の器種・器形分類図（1）／30	
第9図 音無瀬第Ⅱ群土器の器種・器形分類図（2）／31	
第10図 土師器無台杯・無台椀の法量分布図／34	
第11図 須恵器の法量分布図／35	
第12図 須恵器の胎土分類図（1）／38	
第13図 須恵器の胎土分類図（2）／39	
第14図 柏崎平野の前期古代土器群（食膳具）／48	
第15図 柏崎平野の前期古代土器群（煮炊具・貯蔵具）／49	

表 目 次

第1表 音無瀬遺跡周辺の遺跡地名一覧表／11	
第2表 音無瀬遺跡遺構属性表／23	
第3表 土器・陶磁器・漆器類の大別と細別／27	
第4表 遺構別グリッド別遺物出土集計表／29	
第5表 音無瀬遺跡出土須恵器の胎土分類表／37	

附表

附表1 土器・陶磁器・石器(石器)観察表/59

附表2 木製品・金属製品(帶飾り金具)観察表/63

図版目次

巻頭写真図版

- | | | |
|-------|-----------------|----------------|
| 巻頭図版1 | a. 遠景(八石山から) | b. 調査区全景 |
| 巻頭図版2 | a. 遺構群完掘状況と国光尾根 | b. 遺構群完掘状況 |
| 巻頭図版3 | a. 中央部溝群 | b. 中央部溝群覆土土層断面 |
| 巻頭図版4 | 墨書き・刻書 | |

図面図版

- | | |
|------|--|
| 図版1 | 音無瀬遺跡の位置と周辺の地形 |
| 図版2 | 調査区とグリッド配置図 |
| 図版3 | 全体図と平面図割付図 |
| 図版4 | 分割図1 |
| 図版5 | 分割図2 |
| 図版6 | 基本層序断面図 |
| 図版7 | 溝群断面図1 C断面・D断面・E断面・F断面 |
| 図版8 | 溝群断面図2・遺構個別図 SD-01溝・SD-10溝・SB-20建物跡 |
| 図版9 | 遺物取上区画区分図 |
| 図版10 | SD-10溝跡遺物分布図 |
| 図版11 | 主要部遺構配置図 |
| 図版12 | 出土遺物 1 SD-01・SD-12・SD-13・SD-12-13 |
| 図版13 | 出土遺物 2 SD-10 |
| 図版14 | 出土遺物 3 SD-10 |
| 図版15 | 出土遺物 4 SD-10・SD-11・SD-18・SD-08・包含層(古代) |
| 図版16 | 出土遺物 5 包含層(古代・中世) |
| 図版17 | 出土遺物 6 包含層(縄文時代・近世)・木製品(SD-12・14 SKp-04・05・06・07)・金属製品 |
| 図版18 | 出土遺物 7 木製品(SD-08・10・包含層) |

写真図版

- 図版19 音無瀬遺跡1 a.遠景（八石山から） b.調査区全景
- 図版20 音無瀬遺跡2 a.調査前現況 b.調査前現況と八石山
- 図版21 調査1 a.表土剥ぎ着手 b.表土剥ぎと残土処理 c.表土剥ぎと遺構確認
d.遺構確認 e.遺構確認とマーキング f.遺構発掘 g.溝群セクションベルト発掘
h.溝群セクションベルト発掘と完掘作業
- 図版22 調査2 a.初雪の調査区 b.積雪状況と八石山 c.除雪 d.降雪後の復旧作業
e.調査参加者
- 図版23 層序 a.調査区東壁土層堆積状況 b.調査区東壁主要溝群の土層断面
- 図版24 遺構1 a～b.遺構検出状況
- 図版25 遺構2 a～b.遺構群完掘
- 図版26 遺構3 a～b.調査区主要部遺構完掘
- 図版27 遺構4 a.遺構群完掘状況と国光尾根 b.遺構群完掘状況
- 図版28 遺構5 a～b.SB-20建物跡とSD-14溝
- 図版29 遺構6 SB-20建物跡 a.SKp-04柱穴 b.SKp-05柱穴 c.SKp-06柱穴
- 図版30 遺構7 a～b.SD-01溝
- 図版31 遺構8 SD-01溝 a.発掘作業 b～g.覆土土層断面 h.西ベルト土層断面
- 図版32 遺構9 a.中央部溝群覆土土層断面全景 b.中央部溝群覆土土層断面
- 図版33 遺構10 a.中央部溝群覆土土層断面全景 b.中央部溝群覆土土層断面
- 図版34 遺構11 a.中央部溝群（全体） b.中央部溝群（SD-08・18溝）
- 図版35 遺構12 a.中央部溝群（SD-12・13溝） b.中央部溝群（SD-11・13溝）
- 図版36 遺構13 a～b.SD-10溝
- 図版37 遺構14 SD-10溝 a～d.3区 e～g.3～4区 f.4区 h.覆土G・H断面
- 図版38 遺構15 a～b.SD-08溝
- 図版39 遺物1 SD-10・12溝
- 図版40 遺物2 SD-10溝
- 図版41 遺物3 SD-01・12・13・12,13溝
- 図版42 遺物4 SD-10・11・18溝
- 図版43 遺物5 包含層（古代）
- 図版44 遺物6 包含層（古代）
- 図版45 遺物7 包含層（中世・縄文時代・近世）
- 図版46 遺物8 石製品・金属製品・漆器・木製品

I 調査に至る経緯

音無瀬遺跡の発見は、柏崎市立北条中学校の移転新築事業を契機としている。建設予定地は、北条中学校建設委員会によるさまざまな検討を経て、平成5年（1993）12月24日における市教育委員会において決定された。当時、建設地として決定された柏崎市大字北条字音無瀬の地に遺跡は確認されていなかったが、平成6年6月13日に実施した現地踏査によって、須恵器、土師器の小破片少量のほか、六道鏡と考えられる寛永通宝4枚の塊などが採集されたことにより、はじめて遺跡である可能性が生じることとなった。しかし、当該用地一帯は、大規模なほ場整備がすでに実施済みであり、旧地形等から遺跡の有無や範囲を判断することはできず、採集された遺物もわずかであったことから、学校用地33,857.24m²を対象に確認調査を実施することとなったのである。

中学校用地にかかる試掘・確認調査は、用地確保等諸般の事情により翌年に実施が延期され、平成7年4月25日から27日までの3日間で実施された。その結果、ほ場整備により大きく削平された区域を挟みながら、東西2地点に分かれて遺構・遺物が検出された。各地点は、国光尾根に近い東側をB地点、西側にあって沖積地中央の長鳥川に近い区域をA地点と便宜的に呼称した。出土遺物からみた遺跡の形成時期は、縄文時代、平安時代、南北朝時代、江戸時代に及び、意外に時期幅を持つ遺跡であることが判明した〔柏崎市教委1996b〕。遺跡の取り扱いについては、確認調査のデータをもとに協議した結果、B地点は地表面を砂と盛土で保護し、テニスコートや駐車場・駐輪場などとすること、またA地点も盛土後、グランドとして整備し、永久構築物の建設や地下を痛める掘削等の工事を行わないこととするなど、すべて現状のまま保存処置を講ずることとなり、本発掘調査の実施は不要とされたのである。

しかし、新中学校の建設事業には、学校周辺整備事業も計画されており、通学路の確保を意図した市道の改良工事も盛り込まれていた。周辺整備事業にかかる市道改良工事は、22-18号、22-63号、22-64号の3路線であり、確認調査結果からすれば、22-18号が対象となることが明らかであった。当該道路改良工事にかかる文化財保護法第57条の3第1項（現行第94条）に規定された土木工事等の通知は、平成8年2月6日付け、道第430号により柏崎市長（担当建設部道路河川課：当時）から提出され、柏崎市教委社会教育課（当時）は、平成8年2月14日付け、教社第538号の2により、これを新潟県教育委員会へ進達した。進達文に記載された取り扱いに関する意見は、音無瀬遺跡B地点に隣接することから、本発掘調査が必要としつつも、発掘調査範囲とすべき延長については、確認調査を実施し、把握したいとするものであった。

本発掘調査は、平成7年11月6日付でなされた建設部道路河川課長の要望書にあるとおり、平成9年度の道路改良工事実施のため、平成8年度中に実施するとして計画され、平成8年6月から8月頃に実施する計画であった。ところが、調査用地となる水田には、すでに稲が作付けられており、稲刈り終了後以降へ変更を余儀なくされる事態となった。しかし、稲刈り終了後という時期は、すでに別事業が予定されていたことから、音無瀬遺跡の発掘調査は、それらの事業の終了後の実施とならざるを得なくなった。また、このような事情から、確認調査の実施も日程的に困難となり、本発掘調査を実施しながら確定することとした。文化財保護法の手続きとしては、法第98条の2第1項（当時）にかかる発掘調査の通知を平成8年9月6日付けで提出、調査の着手は、秋も押し迫った平成8年11月6日からとなった。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

音無瀬遺跡の位置と現況 音無瀬遺跡は、新潟県柏崎市大字北条字音無瀬1981番地ほかに所在し、柏崎市の市街地から東南東におよそ8kmのところに位置する。遺跡の西側にはJR信越線、南側に国道291号が通る。JR信越線から見ると、遺跡は柏崎駅—長岡駅間にあり、JR信越線北条駅が最寄の駅である。北条駅からは、国道291号に沿って北北東に向かうところ約1kmに遺跡が所在することになる。

遺跡の現況としては、一部が水田として耕作されているが、遺跡の大半は柏崎市立北条中学校の敷地であり、遺跡本体はグランドやテニスコートの地下に盛土保存されている。今回報告する調査は、北条中学校の東側を通る市道の改良工事に伴うものである。

柏崎平野概観 音無瀬遺跡は、柏崎平野南東の山間部にある。柏崎平野には、柏崎市のほか、かつては刈羽郡の3町村（西山町・刈羽村・高柳町）が所在した。しかし、西山町と高柳町は、平成17年5月に柏崎市と合併し、別山川流域の一部に刈羽村域を残すのみで、柏崎平野の大半を柏崎市域が占めることになった。この柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置する人口およそ9.5万人の小都市であり、行政的な地域区分では中越に属している。一般に中越地方と呼ばれる地域は、信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める魚沼郡域と、長岡市などが所在する信濃川中流域から柏崎平野にかけての北部に大別することが可能で、柏崎平野は北部でも西半部に位置することになる。

柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持っている。そして、信濃川水系の越後平野や関川水系による頸城平野とは、丘陵や山塊による分水嶺によって隔されており、一つの独立した平野を形成するものである。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鯖石川によって西部・中央部・東部に三分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がっている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続いているとされている。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸にまで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の景観は、沿岸部に低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著であり、沖積地は少なく、海辺は漂石海岸で、砂浜もほとんど見られないことが特徴となっている。

また、柏崎の中央部に広がる沖積平野は、その北正面部を日本海に洗われ、海岸に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわっているが、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

長鳥川中下流域とその地形 柏崎平野東部を北流する鯖石川は、その源を東頸城丘陵の山中・十日町市松代町から発している。鯖石川は、鶴川とともに柏崎平野の二大河川の一つとされるが、総延長およそ36kmは鶴川の二倍にあたり、文字通り柏崎平野唯一の河川である。



沖積地



砂丘



沖積段丘



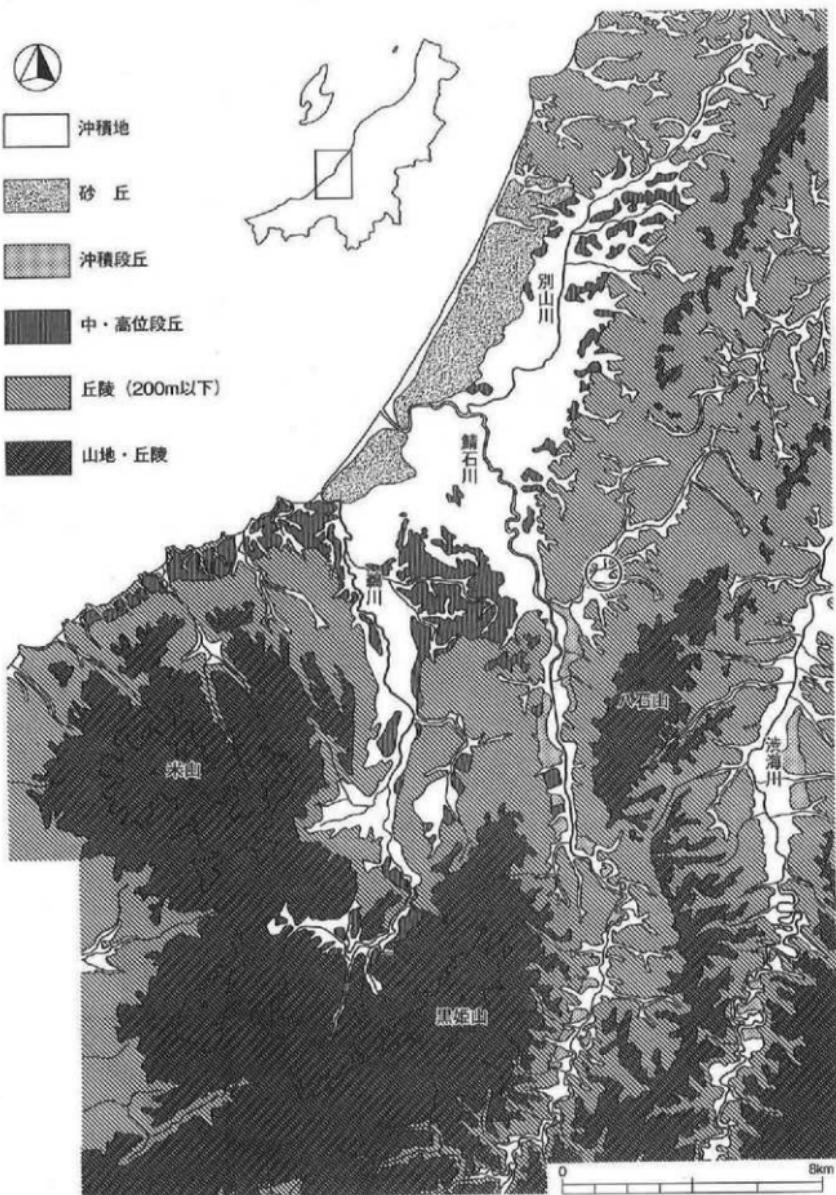
中・高位段丘



丘陵（200m以下）



山地・丘陵



第1図 柏崎平野の地形分類図と音無瀬遺跡の位置

長鳥川は、鯖石川最大の支流別山川と同じく、向斜軸に沿って南南西に流れる第二の支流である。地形的には、曾地丘陵と八石丘陵に挟まれ、東長鳥の夏渡一鷹巣間には、同じ向斜軸を流れる黒川との分水嶺が造っている。周囲の丘陵は、南東に位置する標高513mの八石山が横たわり、その他は標高が200mによるやく達する程度の低丘陵となっている。長鳥川流域における河岸段丘は、狭小で明瞭な地形としては形成されていない。

長鳥川は、柏崎市大字東長鳥の大角間地内を源流とし、延長は10.7kmの二級河川である。長鳥川の流域区分は、これを明確にした基準がないことから、便宜的に三分して概観したい。まず、上流域は、源流付近から北西に流路を取り、夏渡方面からの小流と合流し、南西に流路を変える地点までの約1.5~2kmの区間、つまり大角間地内から杉平地内に至る間である。中流域は、杉平付近から高津川が長鳥川に合流する山澗の入口付近までのおおよそ4kmである。中流域は、幅200mほどの冲積地が南西~北東に直線的に延び、南部において若干北へ流路を変え、高津川と合流する。この間、大広田地内にて広田川が合流している。下流域は、山澗の入口付近から鯖石川との合流点までの約3.5m~4kmである。この下流域には、佐野入川・深沢川・赤尾川といった多くの小流が合流しており、これらが形成した冲積地と、長鳥川本流が形成した冲積地の広がりがある。長鳥川本流の水量はそれほど多くなく、河川の規模そのものも小さいが、本流を含めたそれぞれの小流は、治水するには比較的容易であり、新田開発に際しても有利な地理的な環境にあったとができる。

音無瀬遺跡周辺の微地形 音無瀬遺跡の位置は、長鳥川下流左岸にあって佐野入川と深沢川に挟まれた冲積地に位置し、深沢川の右岸側に立地する。遺跡の東部には、国光の塚群やニッ塚などが構築された国光尾根が西へ突き出ている。本遺跡は、その先端部、丘陵尾根線の延長上に位置しており、尾根付近の遺構確認面とは、更新世の地山層である。1995年に実施した確認調査では、A・Bの2地点が確認され、その中間域は過去のは場整備によって深く削平されていたが、遺構・遺物が検出された区域とは、この国光尾根の延長線上にあることは明白である。

音無瀬遺跡周辺に広がる冲積地の標高は、遺跡範囲内で約23~24m前後、冲積地の規模は、概して広く平坦であり、東西500mは国光の尾根先端部から長鳥川まで、南北は佐野入川から深沢川間約500mを計り、形状はおおむね方形で、区画としてはまとまりがある。各水田の区画は、は場整備以前においても大半が方形に区切られ定型化しているが、これらの区画は、比較的早い段階から整備されていたと考えられる。

ただし、水利については、佐野入川と深沢川の両小流が、ともに長鳥川に合流する位置に近接しており、直接取水することができない。このため、水田を潤す用水は、主に深沢川上流で取水され、深沢川右岸の国光尾根沿いに通水した用水にて賄われていた。この用水は、「白川風土記」に「深沢川ノ分流ニテ養水ニ用ル所ノ小川ナリ」と記された「オトナセ川」であることがほぼ間違いなく、音無瀬を灌漑するための人工的な用水路とすることができます。白川風土記において「オトナセ川」とされる用水路は、現在、深沢川中流において、深沢頭首工の中堰において取水されている。この地点には、かつて上・中・下の三堰があつたところで、取水地点として重要な位置にあるが、深沢川の河床は、この地点を境にかなりの高低差をもつていて。

「オトナセ川」とされる用水は、中堰で取水された後、国光尾根の麓の地形変換線にそって、深沢川右岸域を潤しながら東へと流れる。音無瀬遺跡の位置を見ると、西へ突き出た国光尾根とその延長線上の突き出しによって、用水路の通水が可能な冲積地が狭まるポイントを占めていることが窺われ、本遺跡立地点の特徴の一つとができる。

2 歴史的な環境と周辺の遺跡

音無瀬遺跡は、1995年の確認調査以来、縄文時代、平安時代、南北朝時代、江戸時代の各時代にまたがる遺跡として周知されてきた。今回の発掘調査では、新たに奈良末～平安初期の遺構・遺物が確認され、しかも出土土器類の大半が、当該期に属するものであり、中世では室町～戦国時代の遺構・遺物も確認されるなど、主に古代・中世が主体であった。このような時期的関係から、本遺跡における歴史的な環境としては、出土遺物が摩滅し細片が多かった縄文時代と、遺構が不確かであった近世を割愛し、主に古代から中世について概観することとした。

1) 柏崎平野の古代・中世概観

古代 越後国など古代北陸道の諸国は、それまでの越國を分割することにより成立したが、それは持統4年(690)の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている〔坂井1983〕。成立当初の越後国とは、現在の阿賀野川以北の地であり、現柏崎市域等は、越中国に属していた。現在のような越後国の国域が確定したのは、大宝2年(702)における越中国四郡(蒲原郡・古志郡・魚沼郡・頸城郡)〔米沢1980〕の越後国への分割と、和銅5年(712)に出羽国が分置・独立して以後のことである。

奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頸城郡域や魚沼郡域であった小国町域(現長岡市)などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、三島郡和鳥村(現長岡市)の八幡林遺跡の調査成果から、島崎川流域でも八幡林遺跡付近に郡衙等の中核部が想定できるため〔和鳥村教委1994〕、柏崎平野の各地域とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的にはやや隔たりを感じさせる関係にあった。このような地理的な側面のみとは言い難いが、柏崎平野一帯は平安時代を迎えた9世紀に、三鷲郡として分置・独立することになったとされている〔米沢1976〕。

三鷲郡における郷名としては、10世紀に成立したとされる『倭名類聚鈔』に「三嶋」「高家」「多岐」の三郷が記され、また『延喜式』には北陸道の駅として「三嶋駅」と「多太駅」があったとされている。これら二史料に記された記載順や、地名、あるいは式内社などの分布からすれば、三嶋駅は三鷲郷に、多太駅は多々神社などがある別山川流域で、多岐郷内にあったと推定され、後の莊園分布などを参考とすれば、三鷲郡の各郷は、鶴川流域：三鷲郷、鯖石川中流域・長鳥川流域：高家郷、別山川流域：多岐郷といった郷域をおおまかに想定できる。高家郷は、駅が設けられていないことから、北陸道本道から外れていたことが窺われ、長鳥川と鯖石川が合流する付近が郷域の中核であったと考えられる。以上の想定が妥当とすれば、長鳥川下流域に位置する音無瀬遺跡は、高家郷を形成する一地区であったとることができよう。

柏崎平野における主な古代遺跡としては、三鷲郷域にあって、北陸道三嶋駅に近いと推定される箕輪遺跡〔相沢他2000〕がまず掲げられ、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群や流水路などが発見されている。特に奈良時代では、南北方位に整合した複数の建物跡が確認されており、官衙的な意味合いを持つ遺跡とすることができる。また、箕輪遺跡の北東約1.5kmに所在する小峯遺跡では、平安時代の屋敷跡が確認され、施釉陶器が多く出土している。また、箕輪遺跡東部でも、多量の土師器とともにかなり多くの施釉陶器等が出土しており、この付近は、古代遺跡の密度が濃く、政治的な意味合いが高い区域とすることができる。鶴川中流域では、この他に前掛り遺跡が調査され、平安時代の建物跡数棟などが確認されている。

多岐郷域と考えられる別山川流域では、吉井遺跡群の諸遺跡のほか〔柏崎市教委1985a・柏崎市教委

1990)、刈羽村域の枯木A遺跡〔刈羽村教委1995〕や払川遺跡〔刈羽村教委1999〕など、また西山町域の井ノ町遺跡〔西山町教委2001 b〕と宮ノ前遺跡〔西山町教委2003〕などで、平安時代の遺跡が調査されている。吉井遺跡群の萱場遺跡は、竪穴住居と考えられる方形状の竪穴遺構が検出され、遺構内から8世紀中葉の土師器・須恵器などが出土し、萱場遺跡よりも若干丘陵に近い戸口遺跡でも、8世紀後半頃を主体とする土師器・須恵器が比較的多く出土している。しかし、両遺跡の調査は、用水路工事に伴うもので、調査範囲が狭いことなどから、遺跡の性格等は、余り明らかにされていない。

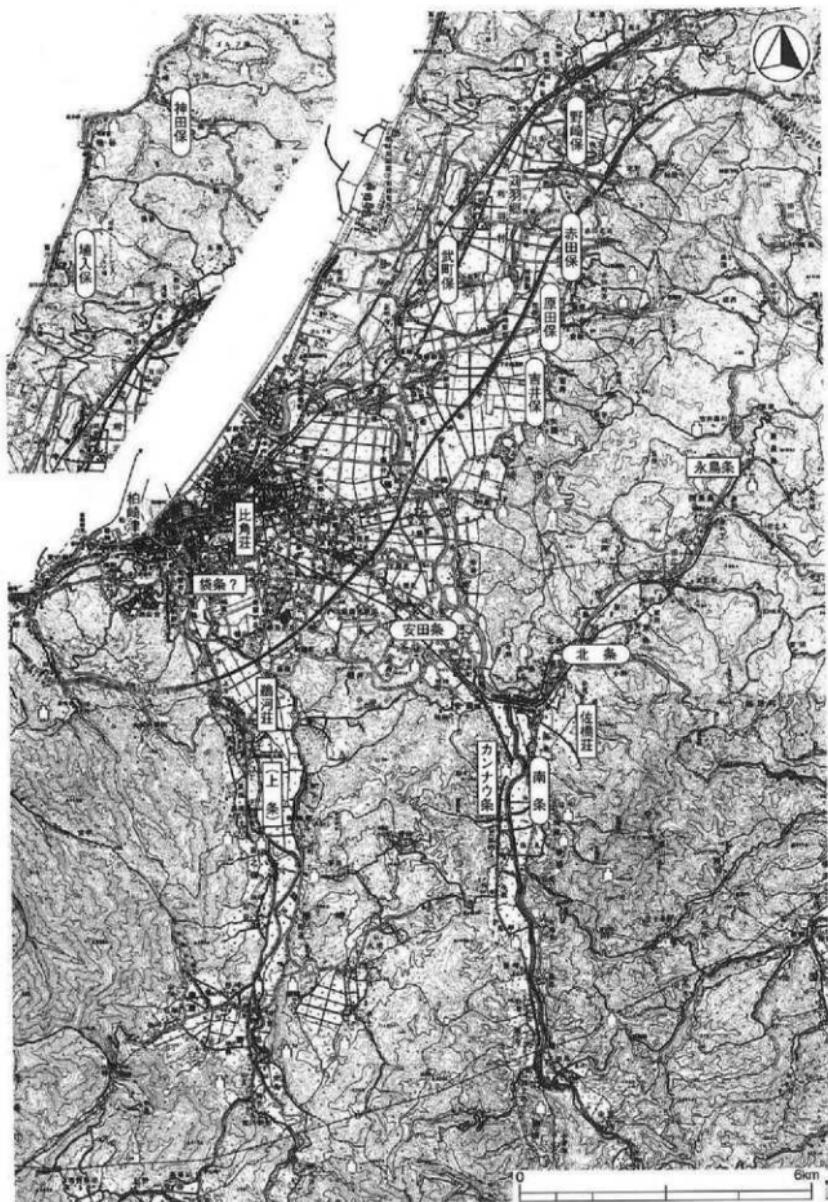
高家郷域に所在する古代遺跡としては、蜻蛉川中流域南部となる南蜻蛉地区の宮ノ下遺跡群〔柏崎市教委2001〕において、深町遺跡や宮田遺跡で平安時代の集落が調査されている。長鳥川流域では亀ノ倉遺跡〔坂井・宇佐美1987・柏崎市教委2011 b〕や馬場・天神腰遺跡〔柏崎市教委2011 b〕などが知られているが、中枢部が発掘調査されたことがなく、古代の実態は不明な点が多い地域であった。

これら柏崎平野における古代遺跡は、その多くが平安時代の遺跡であり、別山川流域の諸遺跡で古墳時代中・後期の遺跡が複合したとしても、奈良時代の遺跡は発見例が少なく、奈良時代の遺構・遺物が確認されているのは、吉井遺跡群の萱場遺跡・戸口遺跡のほか箕輪遺跡が知られている程度である。奈良時代の主な4遺跡の分布は、三鶴郡3郷の各比定地に分散し、かつ中枢城と思われるところに位置している点は、示唆的であり、周辺諸遺跡とともに今後さらに注意していただきたい。

中世『吾妻鏡』文治2年(1186)3月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される莊園として、「宇河(鵜川)莊」「佐橋(鯖石)莊」「比角莊」の3莊園が記されている。これら3莊園は、寄進地系莊園として11世紀末から12世紀中葉頃には成立したと考えられ〔荻野1986〕、これ以後倭名類聚鈔の郡郷名は廃れて、莊園名で呼ばれることになる。

上記3莊園の四至は明確にされていないが、宇河莊の場合、鵜川という河川名と一致すること、史料に記された地名等から安田付近まで確實に及ぶこと、そして鏡ヶ沖という湖沼により比角莊域と推定されている現柏崎市街地とは地形的に隔たっていることなどから、鵜川河口付近を除く鵜川流域一帯とその水系内に属する南部(安田)丘陵一帯等が、その莊域として推定できよう。鵜川莊については、現在上条という地名が残されていることから、中流域の上条に対して下流域に下条に該当する条があったことが想定できる。また、安田や田尻地区となる東半部は、鵜川莊安田条と記された史料が多くあり、鵜川莊内は、大きく3条に分かれていたものと考えられる。

比角莊は、現在の地名からすれば、現市街地西部に比角地区があること、また觀応元年(1350)の「室町將軍家足利義詮御教書」〔柏崎市史編さん委1987 b (No.33文書)〕に記された「越後國比角庄袋条」が、市街地南西部の元城町字袋田付近に比定されていることから〔村山1990〕、現市街地におおむね重なってくるものと考えられる。この比角莊は、『吾妻鏡』によれば文治2(1186)年当時穀倉院領であり〔柏崎市史編さん委1987 b (No.15文書)〕、中原家と清原家が別当を家職化していた。別当の一人、中原師元は、保元元年(1156)に越後介であったことを勘案すれば、その立莊期は鳥羽院政期に想定されるとのことである〔荻野1983〕。比角莊は、『師守記』貞治3年(1364)6月18日条にも穀倉院領と記されており〔柏崎市史編さん委1987 b (No.40文書)〕、14世紀中葉までは穀倉院領であったことが確かめられ、中原家によって知行されていたことがわかる。また、觀応元年(1350)の「室町將軍家足利義詮御教書」に、「越後國比角庄袋条地頭職者可為女子東御方分」との裁許が見られるように〔柏崎市史編さん委1987 b (No.33文書)〕、14世紀中葉段階における比角莊の地頭職は、莊内にて分割されていた〔村山1990〕。比角莊は、前記『師守記』の貞治3年(1364)を最後に、史料の上では確認されなくなる。このことは、南北朝の動乱の最中、



第2図 刈羽郡域の荘・保と主要城館

莊園領主側の支配が衰減し、地頭等の在地勢力の台頭が背景にあったことは間違いないさうである。

佐橋莊については、その莊名から鯖石川との関わりが強いことが明らかであり、また長鳥条という地名が史料に残されており、鯖石川中流域と長鳥川流域が莊城の基本と考えられる。莊園の中核は、柏崎市北条と南条、それに加納や善根などであろうが、長鳥地区や北鯖石地区、および石曾根などを含む南鯖石地区までの範囲を、大まかに想定することができそうである。

佐橋莊の内部については、現在の地名等から類推すると、南北両条に大きく分かれていたと考えられる。「毛利元春自筆事書案」に「(前略) 越後國佐橋庄南条七ヶ条土貢二千余貫、内五ヶ条、了禪讓庶子等畢、残庄屋カソナウニケ条親父宝乗分也、土貢八百余貫(後略)」と記載されているとおり、南条はさらに七ヶ条に分かれていたことが知られる。北条については、南条と同様、小さな条に分かれていたと考えられるが史料がなく、また長鳥条の位置付けも明確にできない。

さて、柏崎平野に所在した鶴川・比角・佐橋の各莊園によって、鶴川筋と鯖石川筋、そして長鳥川流域といった地域の大半を網羅することができる。しかし、鯖石川最大の支流であり、古代の官道北陸道が通っていた別山川流域についてはカバーするに至っていない。この別山川流域については、中世後期において、原田保や赤田保など7件の保名が、わずかではあるが史料に残されており、国衙領としての伝統が強く残存していた可能性が高い。その場合、「明月記」正治元年(1199)正月廿二日条[柏崎市史編さん委1987 b (No.18文書)]、および正和2年(1313)の「源光広与状写」[柏崎市史編さん委1987 b (No.29文書)]に記載されているとおり、中世前期では莊園が成立せず、「刈羽郷」と称されていたと考えられる。

次に、中世後期、特に室町期から戦国期における在地の支配関係について、大まかな勢力地図を述べておきたい。まず、佐橋莊と鶴川莊安田条を本貫地として領する毛利氏は、時期によっては別俣郷までを領域としていた可能性があるなど、柏崎・刈羽地域では最大の勢力を誇っていた。毛利氏は、南北朝の動乱期において、安芸の領地へ移った西国毛利氏に対し、越後に在国した主勢力を越後毛利氏と呼ぶ。毛利氏の領域は、数多くの要害(山城)で守られていた。毛利氏に対する在地勢力としては、刈羽の赤田城を根拠地とし、別山川流域の大半を領する赤田藤氏、鶴川莊上条には、上条城を館とし黒滝城を要害とした上条上杉氏、また鶴川莊下条と推定される琵琶島城には、上杉氏の被官宇佐美氏がこれを守ったとされ、北や西から毛利氏を牽制していた。越後毛利氏は、いくつかの庶子を分出するが、その主勢力である北条毛利氏と安田毛利氏は、戦国末期の御館の乱(1578年)に際し、安田毛利氏は景勝方に組し、影虎方の主勢力として活躍した北条毛利氏は、本拠地北条城が落城、佐橋莊を主とする領地のすべてが上杉景勝方の武将に細分して分け与えられ、在地の勢力図は一変した。

柏崎平野の主な中世遺跡については、佐橋莊の中核に所在する馬場・天神腰遺跡がまず掲げられる。集落の時期は、12世紀から16世紀初頭まで及び、両側に側溝を備えた道路跡とともに、これと直交する溝と道路によって集落全体が区画整理されており、都市的な性格を帯びた集落として特記される遺跡である。この馬場・天神腰遺跡は、鯖石川と長鳥川の合流点に位置するが、鯖石川と別山川の合流点には、13世紀後半を最盛期とする角田遺跡があり、対岸となる鯖石川左岸には東原町遺跡や上原遺跡が近年調査されている。また、鶴川下流右岸の沖積地には、方形に巡る堀に囲まれた13世紀代の館跡が下沖北遺跡で確認され、琵琶島城跡北辺でも15世紀を主体とする館跡と考えられる遺構・遺物が調査されている。

しかし、柏崎地域全体の中世史については、莊園や国衙領などの存在から、支配関係等の地域的な展開の一部を垣間見ることはできても、ほとんどは名称の羅列に過ぎず、具体的な実情や中世人の生活は不明とせざるを得ない。当該地における中世史も、県内各地と同様に残された古文書や記録類などの史料が乏

しいという現実があり、中世全般を叙述することは困難である。今後は、新資料が期待される考古学的な遺跡調査が重要であり、資料の蓄積を元とする新たな展開に期待したい。

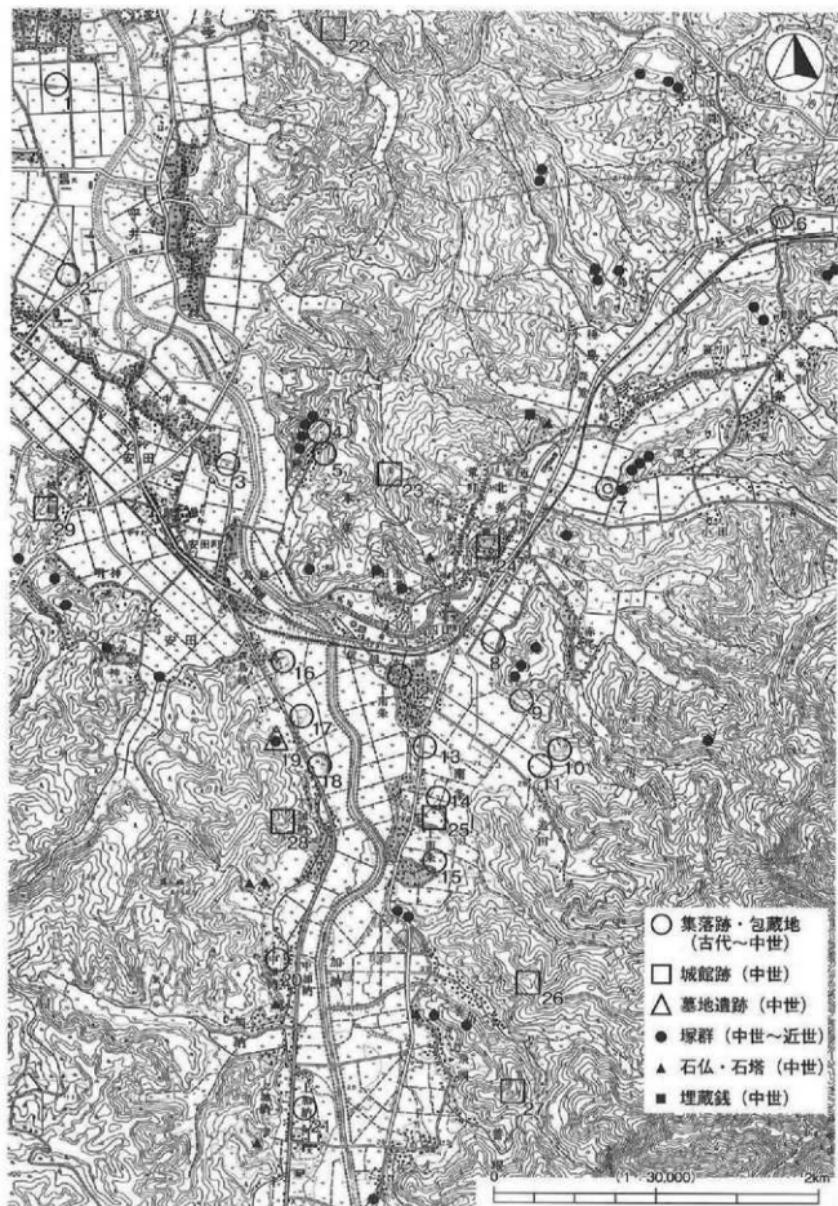
2) 長鳥川下流域の古代・中世の遺跡

音無瀬遺跡では、奈良時代末以降平安時代の遺物を中心に、中世後期の土器・陶磁器等が出土している。このため、本項では古代～中世を対象とするが、奈良時代遺跡については、柏崎平野全体でも遺物が確認された事例そのものが意外に少なく、箕輪遺跡のほか、吉井遺跡群の萱場遺跡など数例にとどまる。長鳥川流域では、亀ノ倉遺跡における古墳時代後期以降、土器類が出土しない空白的な時期が続いており、このような状況からすれば、音無瀬遺跡は空白期の一部を捕ってくれる貴重な遺跡とすることができます。平安時代については、全国的な傾向として、9世紀中葉から後半以降に遺跡数が急増するが、本地域の動向も基本的に同じである。

古代・中世の遺跡 長鳥川流域における「古代～中世」とされる遺跡は、清八遺跡、追田長者屋敷遺跡、岳ノ下遺跡、亀ノ倉遺跡、引地A遺跡、下南条遺跡（馬場・天神腰遺跡）〔柏崎市史編さん委1987a〕を掲げることができる。また、性格は不詳ながら、丘陵の尾根筋に築造された塚の調査によって、須恵器片がわずかに出土した国光の塚群遺跡〔柏崎市教委1983〕の存在なども知られている。しかし、遺跡の絶対数は、流域面積が狭い山間部という地理的な条件もあって少ない。また、発掘調査された事例は、塚関連の調査を除けば、馬場・天神腰遺跡の本発掘調査（平成2年～3年）や南条遺跡群（平成17年～19年）に対する確認調査と、それに関連した小規模な本発掘調査〔柏崎市教委2011b〕が実施された程度に過ぎない。しかも、これらはすべて南条地区に集中しており〔柏崎市教委2008d〕、音無瀬遺跡が位置する北条地区や、長鳥川上・中流域となる長鳥地区・広田地区の事例を欠くことから、本地域における考古学的な低迷観は否めない。本項では、音無瀬遺跡と位置を若干異なるが、近接する調査事例として、発掘調査された馬場・天神腰遺跡を含む南条遺跡群について概観し、本地域の様子を垣間見ることとした。

南条遺跡群 南条遺跡群は、柏崎市大字南条に所在する遺跡の総称であり、便宜的な意味合いを持つものであるが、本地域における歴史を物語る遺跡の集合体でもある。現在把握されている遺跡は、主に沖積地とそれに隣接する丘陵に営まれた遺跡を対象としており、馬場・天神腰遺跡、亀ノ倉遺跡、小浦遺跡、追田長者屋敷遺跡、六角遺跡、城ノ腰遺跡、南条館跡、古屋敷遺跡の8遺跡となっている。本遺跡群の時期的な展開は、弥生後期後半の土器が出土した小浦遺跡に始まり、古墳時代前期には、亀ノ倉遺跡（A地点）を中心に多くの土器が出土するようになる。そして、中期は古屋敷遺跡、後期には再び亀ノ倉遺跡（A地点）で土器類の出土が知られている。その後、土器類が確認されない空白期を経た9世紀後半以降になると、馬場・天神腰遺跡（東部）、六角遺跡、城ノ腰遺跡、小浦遺跡、亀ノ倉遺跡（A地点）と大きく面的に展開することが明らかにされた〔柏崎市教委2008d〕。中世では、主に馬場・天神腰遺跡を中心とするが、本遺跡は、都市的構造を持った集落となるのである。

以上は、時間軸に沿った遺跡の展開であるが、本遺跡群の端緒は、鯖石川の支流である長鳥川の、さらに支流となる追田川に注ぐ仮称小浦川とした小流が形成する沖積地から始まった。弥生後期後半はその一画を占有するのみであったが、古墳時代前期初頭に小浦川流域一帯に拡大し、状況が不明な空白期を経た9世紀後半には追田川下流一帯に大きく展開することになる。したがって、南条遺跡群で最も重要な点とは、治水が容易な小浦川流域の地理的・地形的な属性を極めて有効に活用して水利を確保し、水田等耕地の開発が推進されたことにある。また、南条遺跡群において、最も遺跡が密集する北半部には、かつては



第3図 音無瀬遺跡周辺の遺跡

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
1 前田遺跡	B 遺物包蔵地	平安～中世	16 下川原遺跡	B 遺物包蔵地	平安～中世
2 大新田遺跡	B 遺物包蔵地	室町	17 下加納遺跡	D 叢群・墳墓群	中世
3 中道遺跡	B 遺物包蔵地	平安～中世	18 山谷遺跡	B 遺物包蔵地	中世
4 堂の浦遺跡	B 遺物包蔵地	中世	19 住吉遺跡	B 遺物包蔵地	中世
5 今熊茶師堂遺跡	B 遺物包蔵地	中世	20 山王おばたけ遺跡	B 遺物包蔵地	中世
6 引地A遺跡	B 遺物包蔵地	中世	21 上加納遺跡	B 遺物包蔵地	平安～中世
7 音無瀬遺跡	A 集落跡	奈良・平安・中世	22 鮎屋城跡	C 城館跡	中世
8 亀ノ倉遺跡(B地点)	B 遺物包蔵地	古墳前～後期・平安・中世	23 北条城跡	C 城館跡	中世
9 亀ノ倉遺跡(A地点)	B 遺物包蔵地	古墳前～後期・平安・中世	24 北条館跡	C 城館跡	南北朝～室町
10 追田長者屋敷遺跡	B 遺物包蔵地	中世	25 南条毛利館跡	C 城館跡	中世
11 小浦遺跡	B 遺物包蔵地	弥生後期・平安・中世	26 加納城跡	C 城館跡	中世
12 馬場・天神腰遺跡	A 集落跡	中世(鎌倉～戦国)	27 小番城跡	C 城館跡	中世
13 六角遺跡	B 遺物包蔵地	古代	28 莲根冬城跡	C 城館跡	中世
14 城ノ腰遺跡	A 集落跡	古代(～中世)	29 安田城跡	C 城館跡	中世
15 古塚敷遺跡	B 遺物包蔵地	古墳中期			

第1表 音無瀬遺跡周辺の遺跡地名一覧表

笠島川も流れ込んでいたことが明らかであり、本来的に水利に富む極めて有利な土地柄がうまく利活用されることによって、経済的基盤の優位性が確保され、中世における都市形成へ大きく作用したと考えることができるであろう。このような南条遺跡群における遺跡群の展開を参考とすれば、音無瀬遺跡は深沢川を水利として活用したことは明らかである。しかし、南条遺跡群と異なる点は、用水の開削が必要とされたことであり、必然的に経済力のみならず政治的な前提なくしては、実現が困難であったことである。つまり、遺跡周辺の開発には、オトナセ川とされる用水を開削しなければならなかった不利な地理的属性が示されているとともに、このような土木工事を行い得た背景を示唆するものであり、当該地区の重要性、特に音無瀬遺跡形成の意義が秘められているといえるだろう。

亀ノ倉遺跡 亀ノ倉遺跡は、柏崎市大字北条が所在地であり、佐橋莊北条の内にあったと推定される。遺跡は、馬場・天神腰遺跡の東側約500mのところに位置し、両遺跡の中間に追田川が流れ、これが北条と南条の大字界ともなっている。立地としては、丘陵尾根下に沿う沖積地である。

これまで知られていた遺跡の実態は、第4図に示したほ場整備工事に伴う出土遺物〔宇佐美・坂井1987〕から、平安時代を主体に、古墳時代前期と後期、および鎌倉時代におよぶものとされていた。しかし、平成19年実施の確認調査〔柏崎市教委2008 d〕や平成20年に実施された本発掘調査〔柏崎市教委2011 b〕のデータでは、古墳時代前期初頭が主体で、平安時代の造構・遺物や中世の遺物は僅かであり、地点によって様相が異なっていることは明らかのようである。古代以降に限定した場合でも、ほ場整備工事出土遺物の詳細な地点などが不明で、遺跡の性格も明らかでない。ただし、9世紀後半と10世紀後葉頃のものが認められることから、後述する馬場・天神腰遺跡と一部重複しつつ連続する形で遺跡が営まれて、相対的には亀ノ倉遺跡から馬場・天神腰遺跡へと継続した可能性が高い。

馬場・天神腰遺跡 さて、本遺跡は、北条地区において、初めて本発掘調査された集落跡であるが、鎌倉時代前期から戦国時代まで、おおむね中世全般にわたる集落が発掘された。明らかにされた集落とは、幹線道路と考えられる東西道路、そしてこれと直交する数本の南北道が交差する町並みの形成であり、ム

ラではない都市的性格を有する集落跡として注目されたのである。また、鯖石川段丘崖に接する幹線道路西端部には、道路北辺沿いに幅およそ5m、延長約90mにわたって造構が構築されない空間が確認されており、市が立てられた可能性が高いとされていることも重要である〔品田1993 a・2004〕。この幹線道路は、鯖石川の段丘崖で途切れるが、その延長線上の対岸には下川原遺跡が存在し、その一部が調査されている〔柏崎市教委2003〕。両遺跡の中間に流れる鯖石川の渡河は、かつてここにあった渡し場でなされたが、都市的な性格を有する馬場・天神腰遺跡は、河川の合流点に立地することなどから見ても、物流等交通のルート上、もしくはその集積地として、経済的に重要な意味を持っていたと考えられる。

15世紀になると、やや規模の大きな堀を巡らせた方形館が形成される。調査区内では、館の存在を示すと考えられる堀跡が、東側と西側の2カ所で確認され、さらに調査区外ではあるが、遺跡中央部の寺院跡地にも土壘と堀の痕跡が確認されている。つまり、現段階で3つの館の存在が確認されるに至っており、政治的にも重要であったことを示唆している。本遺跡の所在地は、柏崎市大字南条であり、中世においても佐橋莊南条の内にあったことはほぼ間違いない。しかも、調査された集落の様相は、都市的な性格を帶びていることから、莊内の中枢であったことが明らかであり、南条7か条で条名が知られる2か条の中でも、莊園の中枢と考えられる「庄屋条」であった可能性が高いのである。

このように、馬場・天神腰遺跡では、中世の都市的な集落として注目されたが、平安時代以前については、遺物がほとんど皆無で中世に至る経緯が不明であった。ところが、平成19年度に実施された南条遺跡群第4次確認調査は、馬場・天神腰遺跡の範囲外と想定された東側水田域も対象とされ、各試掘坑から古代を含む中世までの造構・遺物を検出したことから、広範囲の広がりを確認することができたのである〔柏崎市教委2008 d〕。南条遺跡群における確認調査は、僅かな試掘坑を発掘しただけであり、具体的な遺跡の状況、詳細な造構配置などを把握することは難しく、詳細な検討等は今後も必要である。しかし、本遺跡が予想を越える大規模遺跡であるとともに、9世紀以降から継続的に展開していたという事実は、中世に都市的な集落へと発展する前提が、すでに存在していたことを明らかにされたのである。

佐橋莊城の中世城館跡 越後国佐橋莊は、13世紀中頃に大江広元が孫に当たる毛利経光が、宝治合戦の後に在莊して以降、毛利氏の本拠地となった。毛利氏はその後、嫡流で惣領職を有する北条毛利氏と、庶流の南条毛利氏に分かれ、後者はさらに善根毛利氏や石曾根毛利氏を分出、また鶴川莊安田条に進出したのち、14世紀後半には安田毛利氏が創設されることになる。

中世における城館跡の分布は、第3図に示したように、柏崎平野一帯に数多く分布するが、その分布傾向を見ると、毛利氏の本拠地である北条城を中心に、毛利氏の支配領域を取り囲むような配置を看取ることができる。主城的存在である北条城は、遠方から見るとそれほど目立たない丘陵頂部に立地するが、実城北側の高低差は大きく、尾根を断ち切る空堀の規模も大きい。この要害の東麓は、未だ詳細な調査がなされていないが、寺院が多いことなどから見て、城下の町並みとして発展していたものとみられる。

北条城の北方には、赤田斎藤氏が赤田城を構え、その一帯を知行していたが、支配領域の南端となる吉井地区には、吉井砦が築かれている。一方、毛利方最北端の矢田地区には、北条毛利家の重臣石口采女正広宗が守る矢田城が位置する。両城はわずか600mと指呼の距離にあり、しかも吉井砦の標高は約90m、矢田城は80mで、その間には標高60m余りの尾根を挟むだけで、互いに目視できる位置にあった。このためか、毛利氏の本拠地である北条城の北方には、丘陵の稜線上に山洞城と八方口城を配置し、丘陵の支尾根には畦屋城を備えとしている。また、長鳥川上流域では、鳥谷城が築かれているが、斎藤方は吉井黒川城を築いて対峙しており、毛利氏と赤田斎藤氏はかなり厳しい環境にあったことがうかがわれる。

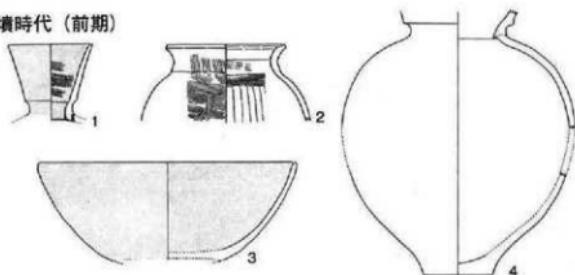
また、鯖石川上流域の備えは、大沢城や石曾根城などがあり、それぞれを苗字とする毛利氏系の諸氏がいたとされる。

また、鶴川上流域となる別俣郷や野田地区には、流域最大の要害細越城など数城が築かれ、下流域を占める上条上杉氏の上条城や琵琶島城と対峙する。佐橋荘中心部をみると、北条城の要害では、北条毛利氏の本城である北条城のほか、

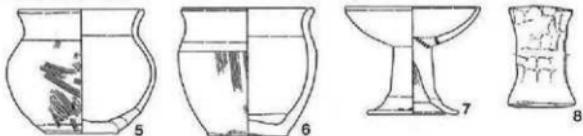
長島川上流の鳥谷城があるだけであるが、南条城では、小畠城、善根城、八石山城、宮平城、加納城と、かなり多くの要害が分布し北条城とは対照的である。この相違は、佐橋荘北条の長島川流域部が、毛利惣領家に一元的に領有されたのに対し、南条は庶子に分割されたことが、背景にあったのかもしれない。

なお、この他に館とされる地点が2ヶ所存在し、北条城では源助神社境内に北条館跡が、また南条城では佐橋神社の鎮座する小丘に南条館跡があり、それぞれ遺跡として周知化されているが、遺構や遺物は不分明である。

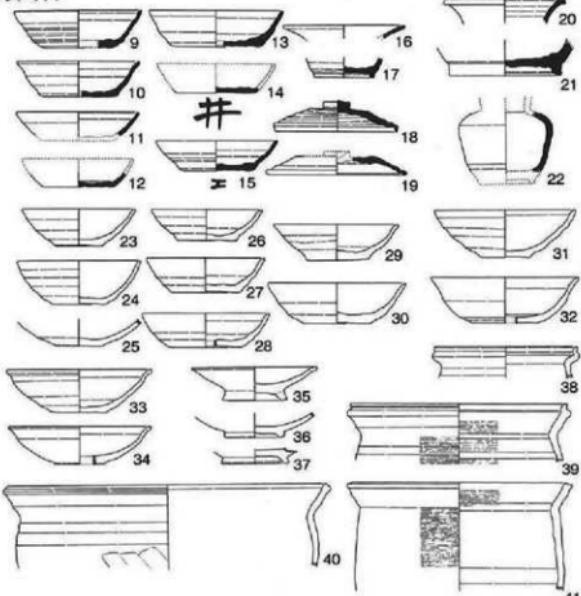
古墳時代（前期）



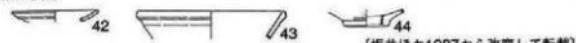
古墳時代（後期）



平安時代



鎌倉時代



〔坂井ほか1987から改変して転載〕

第4図 龜ノ倉遺跡出土遺物

III 遺跡と遺構

1 遺跡概観と調査区

1) 音無瀬遺跡概観

音無瀬遺跡は、新潟県柏崎市大字北条字音無瀬1981番地他を中心に、大字東条字国光3649番地他に広がる遺跡である。今回の発掘調査は、遺跡の中央を通る市道22-18号の道路改良工事に伴うもので、柏崎市大字北条字音無瀬5400～5402番地の公道等および拡幅される水田などの隣接地に対して実施された。

音無瀬遺跡の発見は、平成7年（1995）4月に実施した試掘・確認調査（以下「確認調査」と略記）による。この確認調査は、柏崎市立北条中学校の校舎移転新築事業を原因としており、学校建設用地37,814m²を対象に延べ1,003.9m²を調査し、遺跡の存在を確認したものである〔柏崎市教委1996b〕。遺跡に係る情報については、平成23年度実施の発掘調査の成果が追加されるが、本書では、確認調査と第一次となる発掘調査の結果に限定して、本遺跡の概要をまとめることとする。

遺跡は、長鳥川の支流である深沢川右岸の沖積地に立地する。この一帯は、東から突出する国光尾根が沖積地に没したその延長線の先端に位置し、南側の深沢川、北側の佐野入川、西側を長鳥川で区切られた中に、比較的まとまった沖積地が形成されている。また、この沖積面の東側への延長は、深沢川右岸沿いに小田橋付近まで広がりを見せるが、国光の二ツ塚が造営されていた丘陵尾根先端部により、比較的平坦な沖積面の幅が、やや絞られ狭くなる地形を呈している。

平成7年に実施した確認調査によれば、遺構や遺物が確認された地点は、東西に分断された形で二つの地点に分かれていた。これは、昭和50年代に実施されたほ場整備によって遺跡の一部が削平されたためと考えられ、本来は連続する一つの遺跡であった可能性が高く、その場合、国光尾根の延長に沿って伸びていたものと考えられる。東西の両地点は、便宜的にA地点とB地点と呼称したが、市道改良工事にともない本調査した地点は、B地点の東側隣接地である。

本調査で確認された遺構は、建物跡のほかは溝跡であり、上流となる東側への延長が確実である。したがって、本遺跡の範囲としてみた場合、B地点はさらに東側への広がりを想定することになる。また、A地点については、A-5トレンチにおいて、ピットとともに定量の遺物が出土しており、確認調査の対象地である中学校の敷地外へ広がっていることは間違いない。

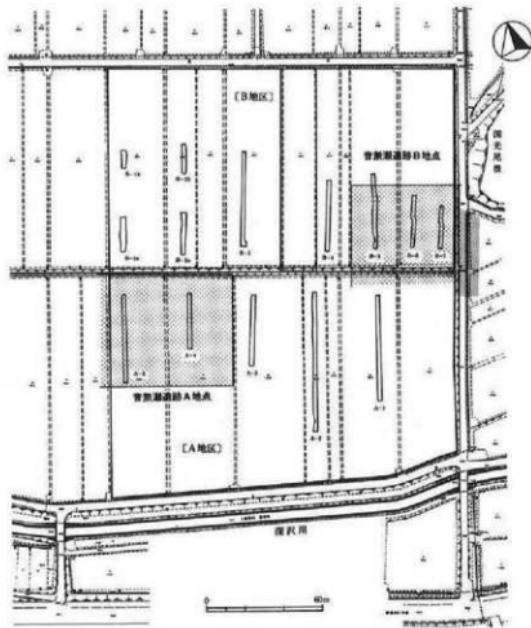
平成7年の確認調査で出土した遺物は、縄文時代、平安時代、中世後期に所属するものである。平成8年の本調査出土遺物は、これら以外に奈良時代末平安時代初の遺物が主体的に出土したもので、本遺跡の存続時期が意外に長いことを改めて確認した。

縄文土器の時期については、細片で時期を特定できない粗製土器が多いが、本調査で出土した縄文土器の一部には、中期前葉の新崎式期と、後期前葉の三十畳場式期の蓋形土器が確認されている。新崎式期の土器は、近接する国光の塚群遺跡でも少量ながら出土しており、関連性が考えられる。しかし、国光の二ツ塚遺跡で出土している前期後半期の土器群との関連もあり、そのほかの粗製土器の時期を特定することはできない。また、縄文土器の出土位置は、包含層とSD-01とした水路内からの出土であり、摩滅具合などから、他の地点からの流れ込みである可能性が高い。

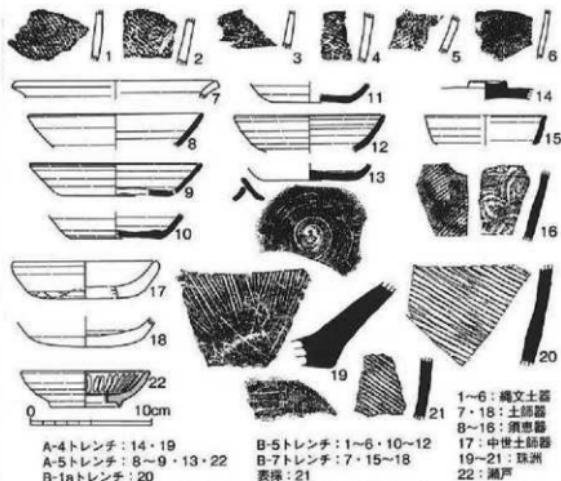
奈良末平安初の遺物は、土師器と須恵器で占められ、大半がSD-10とした溝から出土し、そのほとんどが食膳具であった。また、食膳具の完形率が高く、狭い範囲から集中的に出土しており、一括廃棄あるいは短期間で廃棄されたと考えられる。したがって、出土した遺物群は、日常的生活に伴う結果ではなく、祭祀等に伴う最終的な姿であった可能性が高く、集落の存在を意味するものとは考えにくいのが現状である。さらに、確認調査出土遺物の中にも、わずかにながら当該期の遺物が確認されるが、出土位置は、本発掘調査地点に近接しており、当時の遺跡範囲は、限定的であった可能性が高い。

平安時代については、確認調査出土遺物でも主体をなす存在で、A地点とB地点双方から出土している。本調査区域でも、少ないながら定量が認められ、しかも土師器・須恵器の器種には、食膳具のみならず、鍋類や壺類などの煮炊具も含まれており、集落が形成されていた可能性が高い。

ただし、本調査区域は、奈良末同様に溝跡が確認されているだけであることから、居住域はむしろ、確認調査段階で複数のピットを検出したA-5トレチ周辺及びその西側を想定したい。



第5図 音無瀬遺跡概要図 (柏崎市教委1996一部加筆)



第6図 音無瀬遺跡確認調査出土遺物 (柏崎市教委1996から転載)

中世後期については、珠洲及び越前の編年観から、13世紀末から15世紀後半頃までのものが認められ、比較的長期にわたる。しかし、遺物の出土量は、それほど多くなく、種別的にも土器・陶磁器類のほかには漆器や建物の柱根などが認められる程度である。確認された遺構は、建物跡1棟であり、遺物のほとんどは、包含層から出土している。中世後期に帰属する溝跡が明らかでないことから、主にB地点を中心に居住域が設定されていた可能性が高いであろう。

2) 調査区とグリッドの設定(図版2)

平成8年度に実施した音無瀬遺跡の本発掘調査は、市道22-18号の道路拡幅という改良工事を原因とする。当該市道は、ほ場整備された水田内を走る直線道路であり、道路改良の法線も直線で設定されていた。発掘調査を実施する調査対象地区は、当然この道路法線に沿っていることから、調査実施の利便性を考慮し、市道22-18号改良工事とともにセンターラインを基準にして、任意のグリッドを設定することとした。また、当該法線は、20m間隔でセンター杭が打設されていることから、これを活用して10m間隔で区切ることとした。この基準をもとに、東西方向はセンターラインと平行に10m間隔で区切り、南北方向ではセンターラインと直交し、かつセンター杭の位置を基準に10m間隔で区切る。このようにしてできた10メッシュの方眼を大グリッドとする。大グリッドの呼称は、東西方向を西から東へA・B・C…のアルファベット大文字で表記し、南北は北から南へ1・2・3…と表記した。市道22-18号の法線は、大グリッドのLラインとした。これは、北条中学校用地全体を、大グリッドの方眼内に包括することを意図した結果である。センター杭のナンバーは、南側から北へ付されているが、センター杭と大グリッドの整合は、No12:L-10、No11:L-12、No10:L-14、No9:L-16である。直線で設計された道路改良工事の法線は、真北に対しN-17°-Eを指向する。ちなみに、音無瀬遺跡のグリッドは、平成10年に発掘調査を実施した国光の二ツ塚の調査区と整合する。

小グリッドについては、一辺10mの大グリッドを2m四方で25分割したものとする。その配置は、北西隅を①として東へ②、③、④とし、北東部隅が⑤となる。また西辺は、北から①、⑥、⑦、⑧となり、南東隅が⑨である。

3) 層序(図版6)

音無瀬遺跡の基本層序は、第I層から第VI層まで、大きく6層に大別が可能である。第I層は、水田耕作土となる粘土層である。第II層は、図版6には記載していないが、a層とb層に大きく2層に大別される。a層とは、北半部の上層部が該当し、南側では第III層や第IV層を搅乱しながら厚く堆積する。これらは、ほ場整備に際し盛土された造成土と考えられ、所々でビニールなどの混入を確認できる。これに対し、b層とした下層部は、調査区北半部で検出されるもので、北部の青灰色粘土層(第II b-2層)と南側に連続して堆積する暗青灰色粘土層(第II b-1層)に細分できる。これら2枚の粘土層の上層部は、ほ場整備に関わる第II a層と関連し、一連の造成土という可能性もあるが、ビニール等の混入物がなく、また上面の標高が25.4mで安定していることから、ほ場整備以前の耕作土の可能性が高い。当該地一帯において実施されたほ場整備の時期については、昭和50年代前半頃であり、昭和39年(1964)の航空写真では未実施の状況が撮影されている。したがって、第II a層の時期は、昭和50年代前半以降ということになり、その上層を覆う第I層とした耕作土は、それ以降の所産とすことができ、さらに第II b層もそれまでの耕作土であることからすれば、第II層はともに昭和50年代前半に形成されたものとすことができる。

第Ⅲ層以下第Ⅵ層までは、当該地一帯に堆積した自然堆積の粘土層であり、上層位からそれぞれ自然堆積層のA～Dと呼称した。第Ⅲ層は、自然堆積層Aとした灰色粘土層である。この堆積層Aは、調査区北半に堆積が認められ、上面の標高はおおむね25.2mで安定し、下面の低くなる南側では最大30cmの層厚を計るが、その南側は第Ⅱ層による擾乱によって侵食され失われている。本層は、土層断面上で確認されたSD-21溝を覆うものである。

第Ⅳ層は、自然堆積層Bとした粘土層で、a～dの4層に細分される。細分された各層は、第Ⅳa層：明灰褐色粘土層、第Ⅳb層：明青灰褐色粘土層、第Ⅳc層：暗青灰色粘土層、第Ⅳd層：青灰色砂礫層である。当該層は、調査区北端では第Ⅲ層によって削られて消失するが、以南では徐々に層厚を増し、南端付近では最大45cmほどの厚さとなる。細分された各層は、ともにその上面がおおむね水平に堆積しており、それぞれ第Ⅳa層：25.35m、第Ⅳb層：25.15m、第Ⅳc層・第Ⅳd層：25.05mの標高で安定する。これらの中で、第Ⅲ層と色調及び水平堆積で安定した標高とが類似する第Ⅳa層と第Ⅳb層は、第Ⅲ層との関連を否定できない。第Ⅳc層は、SD-21溝に掘り込まれる以外は、SD-08溝やSD-18溝など多数の遺構上面を覆っている。

第V層は、自然堆積層Cとした灰色粘土層である。本層は、粘性が強く、しまりをもつものである。本層の上面は、標高24.9m前後ではほぼ水平に堆積し安定しているが、SD-08溝に切られ、溝群が集中する区域以北では、第VI層の標高が高くなり、直接第Ⅲ層と接することによって確認されなくなる。このため、本層が、SD-10溝よりも新しく、SD-08溝より古いことは確認できるが、SD-11・12・13・18の各溝群との新旧関係は不明である。ただし、これら4条の溝跡については、第V層を掘り込んでいる可能性が高いように思われる。

第VI層は、最終的な遺構確認面とした自然堆積層Dであり、色調が最も明るい明青灰色粘土層である。今回の発掘調査では、本層をもって地山相当と仮定し、遺構確認面に設定した最終面である。

2 調査の経過

音無瀬遺跡の発掘調査は、休憩用のプレハブの設置、および機材の搬入等の調査準備を行った後、平成8年11月6日から表土剥ぎに着手し、同年12月18日の機材撤収完了まで、おおよそ1ヵ月半ほどの期間で調査現場作業を実施した。調査延べ日数は、発掘機材の搬入・搬出作業を含め、表土剥ぎ着手から記録作業終了までおおよそ延べ25日間(作業員実働延べ16日間)であり、調査時期が晩秋から初冬ということもあって、期間中の降雪や悪天候等により稼働率の厳しい調査となった。調査に従事した延べ人員は、調査員・補助員105人(概数)、作業員120人、合計225人(概数)である。

なお、付帯工事として当該市道の復旧作業と、調査廃土の搬出を行っている。前者は、発掘調査時期が年末となり、道路の改良工事ができなかったことから、翌年の耕作に間に合うように調査区を砂で埋め戻し、道路の仮設復旧を行ったものである。ただし、これらの期間は、上記調査期間に算定していない。

また、今回の市道改良工事に伴う発掘調査は、北条中学校の校舎および体育館等の建設工事と並行して実施されたため、休憩用プレハブや廃土置き場の設定位置などは建設工事側の配慮を得つつも、一定の制約を受けざるを得なかつた。

表土剥ぎ・遺構確認 平成8年11月6日、本日から遺跡調査に伴う掘削作業を開始した。ただし、現状の大半は、アスファルト舗装された現道路部分であり、最初の作業はアスファルト舗装部の撤去が主となつ

た。また、東側の水田部には、大量の水が存在することから、これらが調査区内へ流入することを避けるため、道路用地境界に沿って土手を築き、その上でアスファルト舗装の撤去を行った。

11月7日は、発掘作業を行うため、シルバー人材センターから派遣された会員9名と、遺跡調査室の発掘調査班5名を合わせた調査隊、総勢14名が集合し、発掘調査が開始された。初日の午前中は、重機による表土剥ぎを北端部となるK-13・14グリッドおよびL-14グリッドから実施した。重機については、昨日はバック・ホー0.4m級1台で稼動したが、本日より表土剥ぎと残土処理を同時に実行する必要があることから、0.7m級1台を追加して作業にあたった。発掘作業班はこれと並行し、休憩施設等の整備、発掘器具等の準備を行う。午後からは、表土剥ぎの終えた区域にて遺物包含層の発掘作業を行った。本日の作業では、溝1条が姿を見せたが、遺物はわずかであった。

11月8日、作業開始前、市教委荒木教育次長（当時）から発掘調査開始にあたっての挨拶等を受ける。遺構確認作業は、現道西側の拡幅部となる細長いK-13グリッドにおいて、不整形な落ち込み1基を検出して終了する。遺構確認作業と並行して調査区壁の整形も行ったが、水が染み出で調査区内へ浸入することから、調査面をめぐる排水溝を設定した。重機による表土除去作業は、掘削深度が深く、また道路盛土も固くしまっていたことなどから、1日に10mほどのペースとなった。遺物包含層の発掘では、古代の土器が比較的多く出土はじめ、わずかながら戦国期の越前鉢鉢なども確認できた。

11月11日、表土剥ぎ作業は、K・L-15グリッドまで進み、複数が重複しつつ東西に走る溝群が姿をあらわしはじめた。さらに表土剥ぎ作業を継続すると、これまで比較的多く出土していた遺物が、溝群を超えて南側に至ると、出土量が激減する状況を看取することができた。今回の発掘調査は、第I章でも述べたとおり、範囲確認調査等を実施できなかったことから、本発掘調査を実施しながら調査範囲を特定することとしていた。したがって、溝群を超えた南側で遺物の出土量が激減した事実は、調査区域の設定を判断する時期に近づいたことを示唆するものである。しかし、翌12日の天候は、予報とは違って雨が降り継ぎ、さほどの進捗を得ることなく午前中で作業継続を断念した。13日は、K・L-17グリッドの表土剥ぎを継続する。しかし、遺物の出土はほとんどなくなり、遺構も検出されなかつたことから、K・L-18グリッドライン以南については本発掘調査対象外と判断し、調査区の南限とした。表土剥ぎ作業については、重機乗り入れ口を残すのみとなったことから、大型バック・ホー0.7m級および乗り入れ口に敷いていた鉄板等については、撤収することとした。なお、この日は、朝から寒く、初雪が舞う一日であった。発掘作業班も寒さには不慣れであったことから、午後3時半、少し早めに作業を終了することとした。なお、この日において、調査区の全景写真を撮影する位置確認のため、北側の尾根に登ったところ、平成10年に発掘調査を実施することになる「国光の二ツ塚」を確認することになった。

11月14日、表土剥ぎ作業については、残されたバック・ホー0.4m級1台にて、最後に残っていた重機乗り入れ口の表土を除去し、残土置き場の整地作業等を行い、重機の使用を終えた。発掘調査については、全面の遺構確認作業を終了したことから、遺構確認状況の写真撮影を実施、撮影終了後から若干の時間であったが、K・L-14グリッドに所在するSD-01溝の発掘作業を開始した。

遺構の発掘・記録 遺構発掘に着手したばかりであったが、天候等に阻まれ土日を含む5日間作業が中断し、11月20日に至ってようやく調査再開となった。遺構発掘は、前回発掘を開始したSD-01溝を中心に行開、さらにK・L-15・16グリッドに集中する溝群のうち、最新となるSD-08溝の発掘も並行して実施した。翌21日には、SD-08溝が土層観察用ベルトを残し完掘、実測に入る。SD-01溝についても発掘作業が進み、やや摩滅した縄文土器を確認するとともに、新旧2条の溝が存在することも明らかになっ

た。本日は、天候が急変し、午前中の晴れが、午後に雨となつたため作業を中止し、調査員のみにて仮水準点設定のための原点移動を行つた。22日も雨が降り続き、午前中は待機としたが、結局断念、ほとんど作業できなかつた。土日を挟んだ25日については、調査員のみにてSD-08溝のレベリングを実施、溝群発掘の段取りを行う。26日に至ると、SD-01溝はベルトを残し、ようやく完掘した。またK・L-15・16の溝群については、SX-09としたやや大型の落ち込みが、各溝群が下段へ落ち込み土坑状を呈していたことが判明した。27日は、雨天の中、作業を強行、SD-01溝を完掘した。作業中、一時的に雨が上がつたため、急きょ排水と掃除を行い、完掘状況の写真撮影を実施した。本日は、SD-10・12溝も発掘していたが、雨が強くなつたことで、作業継続を断念、中止とした。

11月28日、発掘作業は中央部に検出された溝群に集中した。SD-12溝は、1・2区を完掘し、3区に着手、新たにSD-18溝を検出する。また、27日から発掘作業を継続していたSD-10溝では、4区から大略完形の須恵器や土師器の食膳具が集中的に出土、底面に墨書きやヘラ書きで「井」と記されたものなどが複数確認できた。これらの土器は、8世紀末葉頃と思われ、SD-10溝2区で出土していた土器群とは時期が異なることが明らかとなり、後者となる2区および1区は、SD-18溝と断定し、遺物取上げのラベル等を変更した。

11月29日は、悪天候により作業を中止したが、この頃から冬型が強まり、当地域でも初の積雪を観測した。週明けとなる12月2日（月）における現場内の積雪は、22cmに達しており、この日も調査を中止し、調査員による現場内の除雪作業を実施した。3日は、雪が降る中、調査を再開、SD-10・12・18溝の発掘作業を進める。SD-10溝では、3・4区の発掘作業を進めたが、この付近が最も遺物量が多く集中していることが明らかとなった。本日はさらにSD-11溝の発掘に着手した。4日は、SD-10溝が遺物を残しおおむね完掘されたことから、遺物の出土状況の記録写真を撮影した。溝跡群の発掘作業は、SD-12・18溝のO・1区を残すところまで進んだ。また、本日からSKp-4~7柱穴の発掘に着手した。SKp-4~6柱穴からは、柱の根元が良好に残されていた。また、SKp-7柱穴からは、板材が検出された。5日は、生憎の雨となつたことから発掘作業を休止とし、調査員3名にてSD-10溝の遺物出土分布図を作成、これらの取上げ作業を行つた。この後天候は再び崩れ、作業の再開は12月10日となった。まず、調査区内にて、復旧作業等を行つた後、K・L-15・16グリッドの溝群に残された各土層断面の分層作業を行い、これと並行して溝群の清掃作業を実施、午後に至り土層断面の写真撮影を行うことができた。また、柱穴から出土していた柱根についても、本日取上げを行つたところ、3本ともそれぞれチョウナによつて多角形に面取りされたものであったことが確認された。11日は、発掘作業を休止とし、やはり調査員のみにてSD-10溝の土層断面図を作成し、ベルトの発掘と遺物の取上げを行つた。また、柱穴もそれぞれ完掘し、個々の状況について記録するため、写真を撮影した。

12月12日は、雨の降る中、溝群にわたされていた土層断面用ベルトの発掘作業を、遺物の取上げに注意しながら進め、午後2時頃までは完掘した。完掘状況の写真撮影については、天候の回復が望める明日とし、調査区内に敷き詰められていたコンパネの撤去作業等を行つて、一日の作業を終了した。久しぶりに晴れ間が覗いた13日、調査区全体を含め、各遺構の排水や清掃作業を行い、昼前には完掘全体写真等の撮影を実施できた。午後、調査員は、遺構平面図や調査区東壁の土層断面図作成などの実測作業を行つた。作業員は、コンパネや発掘機材等の水洗、整頓作業を行つたのち、すべての発掘作業が終了したことにより、本日で調査隊を解散とした。実測作業等は、週明けの16日と17日の両日で終了、18日にはすべての機材を撤収し、音無瀬遺跡の発掘調査現場作業を終了した。

3 遺構の分布と配置

調査区は、K・L - 14グリッドラインを基点として、南に向かって表土剥ぎを実施し、K・L - 18グリッドラインまでは、道路改良工事範囲のすべてを調査対象として発掘した。K・L - 18グリッドライン以南については、K・L - 17グリッドから遺構・遺物が検出されないことが確認されたため、調査対象から割愛したものである。また、K・L - 14グリッドライン以北については、現道部分を迂回路として残ざるを得ないことから、拡幅される幅15mを調査対象としたため、調査区の形状は変則的となった。これらの結果、発掘調査を実施した調査面積は、検出した遺構確認面の計測値として362.23m²となった。

遺構確認面の微地形としては、SD - 01溝以北は国光尾根の迫り出しによる丘陵先端部であり、そこから東西方向の溝群が集中する16グリッドラインまでは緩やかな傾斜が看取され、それ以南ではおおむね水平となっていた。

音無瀬跡から検出された遺構は、溝跡9条を主体に、柱穴3個で構成される建物跡1棟の一部、そして性格不詳のピットや土坑、およびその他の落ち込みなどが確認されている。しかし、遺構分布の状況は、K・L - 14～16の間から検出されており、極めて狭い範囲に集中していたことが指摘できる。これら遺構群の分布は、調査区北部と中央部の2地点に大きく分かれ、北部で検出された溝は、SD - 01溝であり、これを便宜的にA群とする。また、中央部の溝群は、指向する方位などを考慮すると、3群に細別することが可能であり、これらをC～D群とする。また、東側調査区壁の断面で検出されたSD - 21溝については、便宜的にE群として扱い、大きく5群に区分して概観したいが、土坑や落込みなどがこれら溝群と絡むことになる。

まずA群とする溝跡は、調査区の北端に位置するSD - 01関係の溝跡である。当該溝跡は、K・L - 14グリッド内で北西方向を指向するが、調査区の西端となるK - 13グリッド中央部に延長が確認できないことから、丘陵の尾根縦を巡るように開削されたと考えられ、流出方向を屈曲させ、調査区外となった現道路直下を北上している可能性が高い。また当該溝は、SD - 01a溝とSD - 01b溝の新旧2条が、位置を同じくして重複していたもので、機能・目的は同一、時期的にも連続するものと考えられる。

B群とした溝跡群は、おおむね西方を指向した流路群である。溝跡としては、SD - 08・SD - 11・SD - 12・SD - 13・SD - 18の5条があり、SD - 12溝とSD - 13溝については、溝プランのカーブを見ても、おおむね平行する関係が看取されるため、2条一対となる溝跡と考えられる。これら溝跡群の新旧関係については、調査区東壁で確認された土層断面の検討から、互いに平行するSD - 12・13溝を古段階とし、次いでSD - 18溝を経て、新段階ではSD - 08溝へと変遷する。また、SX - 09落込みは、SD - 11溝とSD - 18溝を切りつつSD - 08溝に切られている。SX - 09落込みに切られるSD - 12・13溝は、SK - 19土坑に切られていた。これらの関係を整理すると、SD - 12・13溝⇒SK - 19土坑⇒SD - 11溝→SD - 18溝⇒SX - 09落込み⇒SD - 08溝という変遷觀となる。

C群とする溝は、SD - 10溝跡の1条で、他に本溝と組み合うものではなく、単独溝となる。位置的にはB群の南側となるが、流路が北西を指向することによって、調査区西部で重複し、B群溝に切られている。D群は、おおむね南北方向を指向するSD - 14溝であるが、溝プランはやや不整形であり、深度は比較的浅く、底面に凹凸が看取される。本溝跡の西側には、唯一の建物跡が検出されており、両者は関連している可能性が高い。

なお、調査区東壁に落込みとして検出されているSD-21溝は、指向する方位としては溝B群に類似する可能性が高い。しかし、B溝群の上層を覆う基本層序第IV層を掘り込む新しい溝跡であり、両者は間層を挟むことから、時間差が存在することが明らかであり、B群と同列に考えることは難しい。時期や規模などは不詳とせざるを得ないが、便宜的処置としてE群としたものである。

土坑・落込みについては、溝B群と関連するSX-09落込みとSK-19土坑があるが、何れも溝とした流路に関連する以外に性格等は明らかでない。また、落込みとしては、K-12グリッドにSX-02-03が検出されているが、両者とも深度が浅く、包含層等のくぼみである可能性が高い。

柱穴・ピットについては、K-14~15グリッドに5基が集中する。これらの内、SK p-04~06が柱穴に認定でき、SB-20建物跡を構成する。なお、SK p-07a・07bについては、柱穴と断定するに至らなかったことから、そのまま性格不詳のピットとした。

4 遺構名説

音無瀬遺跡から検出された遺構は、性格不詳な浅い落ち込みを含めても、20基に満たないように、遺構そのものの検出量は少なかった。本節では、遺構の大半を占める溝遺構を中心に、建物跡とそのほかの遺構に区分し、個別に概観したい。

なお、第2表として、遺構属性表を作成したので、参照されたい。

1) 溝 跡

本遺跡を特徴付ける遺構とは溝跡群であるが、調査区を溝の一部が横断するだけで、その発端や流末などの延長はまったく不詳である。ただし、これら溝の機能は、検出された位置などから、水田等耕地を潤す用水路である可能性が最も高いが、得られた情報は少ない。本項では、群別にしたがいつ概観したい。

なお、溝E群としたSD-21溝については、基本層序の断面で検出されているだけであることから、本項での記述は割愛する。

a. 溝A群 (SD-01a・01b溝)

SD-01溝が該当するが、平面面や覆土の層位から新旧2段階に区分される。検出された位置は、K・L-14グリッドで、調査区主要部の北端である。当該地点は、国光尾根の先端部に接し、迂回路となった現道部分に隣接する調査区境に相当する。溝の平面プランは、上流となる東側から調査区の角部分をかすめ、流路を北へ屈曲させて現道下に潜り込む状況であった。また、K-13グリッドの狭い調査区からは、その延長が検出されていないことから、現道下に沿って北上している可能性が高く、地形的観点からは国光尾根を迂回していることが窺える。この事実は、当該流路が自然の営為で形成されたものではなく、人為的に開削されたことを示している。

調査で設定した土層断面は、下流側のA断面（西ベルト）と上流側のB断面（東ベルト）であるが、覆土の層名・番号については整合していない。SD-01a溝の覆土は、B断面の3~6層、A断面では1層が該当するが、4層も属している可能性が高い。覆土の特徴としては、SD-01b溝が有機質の黒色粘土を主体とすることに対し、暗灰色粘土を基本とし、遺構確認面とした明灰色粘土のブロックを多く含む点である。下層となるSD-01b溝覆土は、前記したとおり、有機質分を多く含む黒色粘土が最下層と上層部

に見られ、間層としてやや明るい黒灰色粘土層が挟まれている。また、国光尾根側となる右岸壁部分では、最下層部の壁側に黒色粘土層が食い込んでいる状況が看取されており、8層の迫り出しと同様に、壁の崩落を意味するものと推考される。断面形では、SD-01 b溝はおむね丸底、SD-01 a溝は、上流で丸底であるが、A断面でやや平底となり、4層が貫入する。

本溝から出土した遺物としては、須恵器壺(6)のほかに中・後期の縄文土器(1~4)が含まれているが、これらは何れも混入と考えられる。実は、当該溝の上層を覆う土砂は、基本層序の第Ⅱ層であり、ほ場整備段階の盛土層である。SD-01 a溝覆土に、灰色粘土のブロックが多く含まれていた事実は、ほ場整備における埋土の可能性が高いことになる。

したがって、当該溝は、ほ場整備段階の昭和50年代まで機能していた用水路であり、江戸時代以降に開削された可能性が高いと考えられる。また、当該溝のルートは、国光尾根を迂回する可能性が高いが、ほ場整備後に整備された用水路のルートも、現道の反対側と位置こそ違うが、ほぼ同じルートに設定されており、「白河風土記」に記載されていた「オナセツ川」候補の一つとすることができる。

b. 溝B群 (SD-08・11・12・13・18溝)

B群とした溝跡群は、おむね西方を指向した5条の流路群である。これらの内、互いに平行するSD-12溝とSD-13溝を一对の同時存在と判断した。また、SD-18溝より古いと判断されるSD-11溝は、プラン確認の結果としてはSD-13溝に切られるが、SD-11溝そのものが浅く、底面に凹凸が多いなど安定していないことから生じた結果と判断され、かつSD-18溝との関係も、層位的に連続することから大きな時期差を考慮しないこととして、SD-12・13溝⇒SD-11溝→SD-18溝⇒SD-08溝という変遷を、現段階における理解としたい。

各溝の時期については、最も新しいとされるSD-08溝が中世に下ると考えられる以外は、すべて平安時代前期の所産である可能性が高い。

SD-12溝 本溝は、壁の検出状況や深度から、本遺跡では最も整備された溝跡であったとすることができる。検出された平面プランを観察すると、一对となるSD-13溝とともに緩やかな蛇行が看取できる。しかし、溝が検出された地点は、調査区内でもおむね平坦な区域であり、地形的な制約は少ないと見られることから、下流域との関連などが想定されるところであるが、その事由までは見極められなかった。

また、基本層序とした調査区東壁の土層断面では、上層部である5・6層においてやや幅が広くなり、6層で砂分を多く含むとともに、下層部の7層を切っていることから、改修がなされたものと判断した。遺構名としては、上層部をSD-12 a溝、下層部をSD-12 b溝としたが、同様な状況はF・Eの各断面でも観察することができる。しかし、D・C断面では、SX-09落込みの覆土に覆われ、幅広に堆積することから、SD-12 a溝部分となる上層部の状況が不明となっている。このため、SD-12 b溝がSK-19土坑に切られた後に、SD-12 a溝が改修された可能性も否定できないが、少なくともF・E断面の形状は、一定期間の時間差を示すことは明らかである。溝の規模は、調査区東壁の計測値で、幅約1.9m、深度67cm。調査区内では、幅が1.4m前後で安定し、深度も遺構確認面から50cm程度となっていた。

出土遺物としては、土師器・須恵器・製塩土器や、石器および用途不明の木製品のはか、青銅製の帶金具が特記される。当該溝に伴うものとしては、土師器椀(10)と須恵器無台杯(8・9)、製塩土器(13・14)と帶金具(12)であり、石器やその他は混入と判断される。

なお、対となるSD-13溝との関係については、幅や深度など規模が大きいSD-12溝が排水路であり、

進捗名称	種別	グリッド	平面形	規 格 (m)			形状的特徴	覆土の特徴	道 物	時 期	備 考
				長径(延長)	短径(幅)	深 度					
SD-01a	溝 跡	K-L-14		8.00	1.15~1.25	0.20~0.50	西ベル小の土表面部では、底面がおむね平緩。断面はほぼ平行台形。東側は比較的深い。底面によると底面の可動性がある。	基本的に殆ど土層が主体	樹木土器・底面器(面版12-1~6)	初期~	堆は落込み周辺部の計測
SD-01b	溝 跡	K-L-14		7.20	1.20~1.55	0.41~0.65	本家の表面部は、平行形ほど見えられない。北東より底面が浅くならり、豊も侵食された可能性がある。	與植物層が多い。		初期~	
2	窪み	K-12	不整形								深い落ち込み
3	窪み	K-12	不整形								深い落ち込み
SKp-4	柱 穴	K-14	楕円形	0.54	0.50	0.74	壁はほぼ直立に立ち上がる。	柱根(面版17-122)			GB-20建物跡の柱穴
SKp-5	柱 穴	K-15	楕円形	0.76	0.64	0.74	壁はほぼ直立に立ち上がる。	柱根(面版17-123)			GB-20建物跡の柱穴
SKp-6	柱 穴	K-15	楕円形	0.59	0.48	0.88	壁はほぼ直立に立ち上がる。	柱根(面版17-124)			GB-20建物跡の柱穴
SKp-7a	ピット	K-15	円 形	0.25	0.22	0.20					地盤不詳
SKp-7b	ピット	K-15	椭円形	0.33	0.27	0.40					地盤不詳
SD-08	溝 跡	K-L-16		10.25	0.55~0.80	0.07~0.20	幅広のU字状断面。	砂礫を多量 包含	木製品(面版17-125)		
SK-09	落込み	K-15-16	不整形	(5.40)	(2.10)	0.40	印-10-12-13-16落下面を 訓る落込み。S字状の構造。北側は比較的深い。南側に向かって傾くなど、傾める いは下洗削面については、所々干 燥しておらず不規則。		木杭多數(面版18-135~138) 土 器器(面版15-81)	Ⅲ中期	木杭が多數打ち込まれた状況で候。
SD-10	溝 跡	K-L-16		7.90	1.40~2.00	0.19~0.30	溝跡は、下側でややくなる。北側は比較的深い。南側は比較的浅く であるが、少し傾いており、底面は比較的えぐられて、凹凸あり。	調査物を含 むた白色粘 土(面版13-1~27)	底面器・土器器(面版12-1~71) 土 器器(面版15-139~141)	ⅢA期	
SD-11	溝 跡	K-L-15		9.80	0.21~1.38	0.06~0.35	溝跡は分離と合流を繰り返して いるようである。北側は比較的浅く、 南側は比較的深い。底面は比較的くびれ、 傾いた。流水にえぐられた感也 あり。	調査物を含 むた白色粘 土(面版15-72~75)	土器器・底面器(面版15-72~75)	ⅢB期	人为的に削除された 痕跡ではない可能性あり
SD-12	溝 跡	K-L-15-16		9.90	1.30~1.65	0.46~0.56	断面形では北側より縁端が 突出する。南側と北側に 突き出しがついており、壁の最も上 から内側へ向かうにつれて、壁の傾 斜、北側では北側の傾斜が ある。底面も比較的傾斜で、南側より 北側の方が底面が深い。	調査物と砂 礫を多く含 む。	土器器・底面器(面版12-7~26) 木製品(面版 17-118~120) 土 器器(面版15-121)	ⅢB期	SD-12とSD-13は、 互いに平行すること から、一方の調査結果を 収められる。限界深い SD-12とSD-13は、 どちらも水洗削面で、 ある可動性を考慮 する必要あり。
SD-13	溝 跡	K-L-15		10.30	0.18~0.79	0.11~0.47	溝跡は一貫せず、ややくびれる。北側は比較的深い。南側は比較的浅く、一部はややくびれたもののがある。	黑色粘 土。生土。西侧 ではやや膨らむ ややくびれ 砂岩など。		Ⅲ中期	
SD-14	溝 跡	K-15		5.33	0.34~0.65	0.03~0.18	侵入みが比較的深い状況後、 GB-20建物跡との関わりが想 定される。		調査土器・木製品(面版17-128~134)		
15											欠番
16											欠番
17											欠番
SD-15	溝 跡	K-L-15-16		9.75	0.45~1.19	0.42~0.66	壁の立ち上がりがゆるく深い い。	灰褐色や砂 礫などを含 む。	土器器・底面器・ 磁鉄物(面版15-77~80)	Ⅲ中期	
SK-19	土 坑	K-16	不規則円形	2.95	1.65	0.57	底面はやや平坦だが、丸みを 持てて壁を立ち上げる。底面がおむね平坦。壁の最も上 から内側へ向かうにつれて、壁の傾斜が ある。底面の影響で全体の可動性があり、底面には0.77 × 0.64m、高さ0.57mのビクトが 埋められている。	生土層で 磁鉄物と 粘土粘土。西半 部の壁は 油色系で少 なく砂岩が多く 含む。		Ⅲ中期	
SB-20	建物跡	K-14-15	長方形		5.32		2間×3間の建物跡と考えられ る。ビードレスの玄関。				SKp-4-5+柱穴
SD-21	溝 跡	(L-15-16)			2.00	0.26	底面は平坦。壁のうち北は比較的内側寄り。東側は比較的外側寄り。方柱は不明で、セク ジョン壁は比較的直交せず、斜めと考 えられ、計測して算定。	砂礫を多量 包含する青 灰色粘土。		Ⅲ中期?	調査区域東部で確認

第2表 音無潮遺跡遺構属性表

S D - 13溝については用水路としての機能が想定されるところであるが、S D - 12 a溝とS D - 12 b溝との対応は不明とせざるを得ない。

S D - 13溝 遺構確認で検出された規模は、幅がおおむね50cmで推移し、下流となる西端部で80cmとやや幅を広げる。深度は、東端側で10cmほどであるが、大半が5cmに溝たないほど浅くなっている。ただし、東調査区壁の土層断面では、幅が1mほど、深度も20cmという規模であったことが確認できる。また、調査区西端部では、遺構確認面から50cmと一気に深くなる。このような深度の変化、段差の理由については、S X - 09落込みによる搅乱が入り込むことによって、上流側との連続的なつながりを確認できておらず、不明な部分が多い。

覆土については、調査区東壁第4層が小砂利系の砂礫を多く含む黒灰色粘土層、F・E・D断面では、若干の砂礫を含む黒色粘土層である。また、底面が深くなるC断面では暗灰色粘土層となっており、覆土に相違が認められる。

出土した土器類は、須恵器と土師器であり、須恵器では食膳具のみ(15~17)、土師器では食膳具(18)のほかに、甕類(19~21)が伴っていた。ただし、これら土器類の大半は混入と考えられ、当該溝に伴う確率が高いものは、18とした土師器碗のみである。

なお、出土遺物のうち、図版12において、S D - 12・13とした5個体(22~26)については、25を除き、S D - 12溝とS D - 13溝それぞれ別地点から出土した破片が接合したものであり、両溝の同時存在、一対の溝跡であったことの証左となっている。

S D - 11溝 S D - 11溝は、S D - 13溝の北側に位置し、おおむね同じ方位を指向する溝跡である。しかし、溝の幅は一定せず、20cm~1.3mと広狭が著しい。深度についても、調査区東壁で約15cmを測るが、調査区内では数cmに過ぎない。覆土は、東壁で黒灰色粘土、調査区内では黒色粘土となっている。なお、D断面では、ピット状の落込みとなっているが、S D - 11溝覆土としては、14 a層が該当し、14 b層・15層は、ピット内の覆土として、分離される可能性が高い。

出土した土器類には、土師器(74・75)と須恵器(72・73・76)が確認されるが、当該溝跡に伴うものは、小甕(75)と考えられる1点のみで、その他は混入と考えられる。

S D - 18溝 S D - 12溝の南側に接して検出された。調査区東壁では顯著でなく、西側はS X - 09落込みによって切られており、おおむねD・E・F断面の位置にて検出されている。深度は15~20cm程度、幅は東端部で30cm程度、西側では1.2mと広くなる。覆土は、E断面で多く分層される。緑灰色砂層を間層として最下層の5層(黒色腐植層と3層(黒褐色腐植層)が堆積し、さらにその直上を2層(灰色粘土)が覆っていた。F断面では3層が欠落、D断面では最下層である3層(黒色粘土層)のみとなっている。

出土した土器類は、赤彩された土師器杯(77)、須恵器杯(78)、黒色土器(内黒:79)とともに、縁釉瓶1点(80)が伴っていた。これらのうち、本溝に付随するのは、縁釉瓶のみで、その他はすべて混入と判断されるものである。

S D - 08溝 当該溝は、溝B群の中で最も新しいとされる溝跡であり、一定期間の隔たりが想定され、他の溝跡とは、時期的に連続しないものである。検出された溝の規模は、幅0.7~0.8mで安定し、深度は、東端で4cm程度、西側へ行くほどやや深くなり、15cm近くに達するが、東壁では幅約2m、深度20cmほどであった。

覆土は、黄灰色・灰色・黄緑色等の砂礫層が主体であることを特徴とし、流水が顯著であったことが窺われる。また、図版4(分割図B)に示したように、樹枝を主体とする杭多数が打ち込まれていたことも、

特徴のひとつである。後者については、当該溝に特有であり、他の溝では認められなかった。

出土遺物としては、溝に打ち込まれた樹枝杭（135～138）のほかに、土師器長甕（81）が出土しているが、おそらく混入と判断すべきものである。

c. 溝C群（SD-10溝）

溝C群と同じ位置から検出されたが、流末が指向する方位が異なることにより分離した溝群であり、結果的にはSD-10溝1条で構成される。したがって、本項では、SD-10溝について記述する。

なお、SD-10溝の時期は、まとまって出土した土器類の特徴から、西暦800年を前後する奈良時代末から平安時代初頭が想定できる。

SD-10溝 指向する方位は、おおむね北西であり、調査区内下流部は、溝B群と重複し、切られている。調査区東壁の基本層序では、溝B群が掘り込む第V層に覆われることから、明確な時期差をもって古く位置付けられる。検出プランからみた規模は、東端部で0.9m、SD-18溝と重複する西端部では2.1mまで広くなるが、東壁断面では幅1.35mを測る。深度は、東壁で35cm、調査区内でも30cmの深さとなっている。底面は、やや窪み、壁は緩やかである。H断面付近から北西へ3.3m、幅約80cmで深くなる。この部分からも遺物が出土したが、完形品等が多く出土するのは、この凹みよりも北西側であり、図版10のとおり、狭い範囲に集中していたことが窺われる。

覆土は、最上層を粘性が強い灰色粘土が覆い、下層部では暗灰色粘土を主体とする。東壁とH断面では、黒色を強くする腐植層の堆積が確認されるが、土器類を多く出土したG断面付近では、検出されなかった。G断面の下層部は、2層とした暗灰色の砂礫層が充満するが、その中層位にカルシウム成分のような白色の固形物が薄く堆積しており、それにより2a層と2b層に細分した。出土遺物については、分層して取上げを行ったが、下層部からの出土は少なく、大半が上層、つまり2a層から出土した。

出土遺物としては、木製品として杭（139）や先端を尖らせた樹枝（141）、加工痕のある木片（140）などを若干ながら確認できるが、大半は土師器・須恵器の土器類が占めていた。これら土器類の器種は、その多くが土師器椀と須恵器杯の食膳具が占めており、かつ完形率が高いこと、出土位置が集中することなどから、意図的な廃棄行為を想定することができる。

図版10には、遺物の出土状況を分布図で示したが、SD-08溝に切られる北西端部から、底面が土坑状にやや深くなる南側までの2mほどの区間に集中して出土したことが窺われる。当該集中出土地点を横断する土層断面では、前述のように、カルシウム状の白色の固形物が中層位に薄く堆積していたことが確認されており、何らかの祭祀行為等が行われた可能性を否定できない。特に、須恵器には「井」（28・30・33）、「大」（29）の墨書きが、また土師器には、「井」（51・52・54・55・59）の線刻文が焼成前に刻まれていたことが注目される。特に、「井」と表記された事例が8点にも及ぶことは、具体的な内容や儀礼は不明ながら、「井」に関する呪いなどが執り行われたものと考えられる。今後は、「井」の意味などを含め検討が必要である。

d. 溝D群（SD-14溝）

溝D群とは、SD-14溝単独で構成される。音無瀬遺跡における今回の調査区内から検出された溝跡は、何れも東側から西側、特に地形的な上流から下流側へ延長されるものであった。しかし、本項で、記述するSD-14溝は、おおむね南北を指向しており、溝としての意味、あるいは機能も、他の溝とは異なって

いたことを窺い知ることができる。所属する時期については、伴う遺物がなく特定できないが、溝の性格も含め、指向する方位が近似するSB-20建物跡との関連性が想定されるところである。

延長は、南端がSD-11溝と重複する地点から、北端まで5.33m、幅は、0.34~0.66mの間で変動し、一定しない。底面も、凹凸が著しく、0.03~0.18mで安定せず、概して浅い溝として検出されていた。

2) 建物跡・柱穴・ピット類

本項で概観する遺構は、柱穴とピット類であり、柱穴から復元された建物跡を含めることとする。種別としては、建物跡を構成する柱穴3基とピット2基、そして浅い凹み状の落込み2ヶ所である。

建物跡は、調査区中央の西側（K-14~15グリッド）において、1棟の一部が検出されている。その位置は、SD-01溝の南西側、溝B群の北側に位置し、溝D群としたSD-14溝の西側で検出された柱穴3基である。ピットは、建物跡の南西端となるSKp-06の南側から検出された2基である。また、浅い落込みとしたものは、調査区が狭くなった北端のK-12で検出されている。

a. SB-20建物跡（図版8）

当該建物跡とは、柱穴としてSKp-04~06の3基が調査区内で検出されているが、建物全体としては、平成7年（1995）の試掘調査で発掘したB-7トレンチ検出遺構との関連から、梁間2間×桁行3間となる建物跡の一部と考えられる（図版11）。

今回の調査区内では、各柱穴からは、SKp-04（122）、SKp-05（123）、SKp-06（124）と、それぞれ柱根が出土した。柱穴と柱根の平面的な位置関係は、何れも北東側の壁に密着するよう偏っており、南西側から根固めを行った状況が看取できる。各柱根の中心間距離は、ほぼ2.70mの等距離であるが、中央のSKp-05の柱根は、両端のSKp-04とSKp-06を結ぶ直線より柱根の半径分外側に張出しておらず、上屋構造を知る手掛かりとなる。この特徴は、B-7トレンチ検出の23・24・26の3ピットでも、その一部から柱根が検出され、かつ中央の24ピットがやや外側に偏る状況が同じであり、SB-20建物跡の一部である可能性は極めて高いことを示している。

なお、出土遺物としては、柱根以外時期判定可能な土器類の出土がないことから、時期の特定ができない。柱根は、中央の棟木に当たるSKp-05出土柱穴が芯持丸木であるが、両側となる2基は、SKp-04が1/4材、SKp-06は1/6材の割材から成形されたものとなっている。

b. ピット類（図版8）

ピットは、K-15グリッドのはば中央に位置し、建物跡の柱穴であるSKp-06の南側において、ほぼ接して検出されたSKp-07a・07bの2基である。規模は、何れも直径が30cm前後を測り、深さについては、SKp-07aが20cm、同07bでは40cmと深くなる。後者のSKp-07bについては、加工痕のある木製品（図版17-125）が出土していることから、ピットそのものも人為的に掘削されたものと考えられ、その深度から柱穴の可能性がある。しかし、調査区の制約もあって、関連するピットの所在が不明なことから、その性格については不詳とせざるを得なかった。また、両ピットは、互いに接するも、両者の新旧関係は見極められなかった。

浅い凹みとした落ち込み（2・3）については、遺構確認面とした第VI層の凹凸面に、上位の暗色土が堆積した結果生じた可能性もあり、積極的に遺構と認定することはできないものである。

IV 出土遺物

1 遺物の概要

音無瀬遺跡から出土した遺物は、縄文時代、古代、そして中世と近世に区分され、出土量としては古代が最も多くまとまっていた。また、遺物の種別としては、土器・陶磁器類が大半を占め、さらに漆器や木製品類も比較的多く、その他に金属製品と石器類が出土している。

遺物の出土位置は、遺構の発掘に伴って覆土内から出土した遺物と、重機による表土剥ぎ、遺物包含層の発掘に際して出土したものとに大別される。後者の遺物は、原則的に遺物包含層出土として扱うが、これらは小グリッドに区分して取上げたものである。また、前者の遺構内から出土した遺物とは、縄文土器や古代に限定され、中世・近世の陶磁器類は、すべて包含層出土であった。この事実から、今回の調査区内から検出された遺構は、すべて古代以前であると考えられ、さらに縄文土器については、摩滅の度合いなどから、混入したものと判断され、したがって遺構の時代も、ほぼ古代に限定されていることが理解できる。

また、後述するように、古代の遺物については、大きく二つの時期があり、古い時期のものが新しい時期の遺構に混入する現象が多く認められた。したがって、遺構から出土した古代の遺物の中で、一括りが高い遺物群とは、古い時期にはほぼ限定され、新しい時期の遺構から出土した遺物群には、古段階の遺物が紛れている可能性が高いことになる。

以下、本章における遺物の説明は、種別に従って記述することとし、出土遺物の中で主体を占める土器・陶磁器類と木製品、および石器類・金属製品に区分したい。また、遺構観察表に遺物の項目を設定し、図化された各遺物を提示したことから、これを参照願いたい。

古代の遺物は、土器類を主体とし、これらに木製品と金属製品が伴って出土した。本節における出土遺物の記述は、種別に区分して、個々に述べることとするこのため、同一遺構からの出土であっても、種別が異なる場合は、記述が分離されてしまうが、この点については、遺構属性表（第2表）を参照願いたい。

2 土器・陶磁器類

土器・陶磁器類は、出土遺物の大半を占めているが、その多くは古代の所産である。これらは、第3表に示したとおり、第I群（縄文土器）、第II群（古代の土器・陶器類）、第III群（中世の陶器類）、第IV群（近世の陶磁器類）に大別することとなるが、それぞれを音無瀬遺跡の時期区分に対応させることとして、音無瀬第I期から第IV期とした。

土器・陶磁器・漆器の分類		時期区分
第I群	縄文土器	第I期
	a類 中期前葉	
	b類 後期初頭	
第II群	x類 時期不詳	
	古代土器・陶器	第II期
	a類 奈良時代末期～平安時代初頭	第II A期
第III群	b類 平安時代前期	第II B期
	中世陶器・漆器	第III期
	a類 朱洲	
第IV群	b類 越前	
	c類 漆器	
	近世陶磁器	第IV期

第3表 土器・陶磁器・漆器類の大別と細別

1) 古代の土器・陶器類（音無瀬第Ⅱ群土器）

a. 出土状況と傾向

音無瀬第Ⅱ群土器である古代の土器・陶器類は、土器・陶器類の破片総数約918点の内、およそ840点(91.5%)と、その大半を占めていた。これら古代の土器・陶器類は、須恵器と土師器、黒色土器、綠釉陶器、製塙土器に区分されるが、これら約840点の内、土師器の破片総数は約747点(88.9%)に達しており、そのほとんどを土師器の破片が占めていた。須恵器は、土師器に次いで多く出土しているが、破片総数では79点(9.4%)に過ぎず、このデータからすれば、土師器の圧倒的な優位性が明瞭となっている。

しかし、このような数値の偏りについては、個体数ではなく破片数をカウントしていること、また器種を考慮していないことにも起因していると考えられ、あくまで参考値に過ぎないかも知れない。また、土師器の破片が多い理由としては、食膳具だけではなく、甕類を主とする煮炊具が比較的多いこと、また食膳具の破片化も著しい点が挙げられる。これに対し須恵器は、貯蔵具がほとんど出土せず、大半を食膳具が占めていること、かつ食膳具の完形率が高いことが、破片数の数値を低くしている理由であり、結果として破片数に大きな差異が生じたことが考えられる。しかし、全体的な傾向としては、土師器の組成率が相対的に高くなっていることは事実であり、時期的な変化の一端を示しているものと評価することができよう。

ところで、古代土器類は、遺構覆土内出土と包含層出土に大別されるが、古代土器類に占める破片数とその比率は、前者が554点(66.0%)に対し、後者278点(33.1%)であり、遺構から出土した土器類が多くなっている。また、後者の包含層出土とされる土器類の出土位置について、小グリッド単位で出土量を比較すると、全体的な傾向としては、K～L-15グリッド北半、つまり溝B・C・D群の北側、S B-20建物跡の東側で、特に遺構が希薄なエリアにおいて集中している状況が看取できる。特に、L-15⑥グリッドでは、出土状況を確認できていないが、50点もの破片が集中的に出土しており、廃棄だけではない意図的な行為がなされた場所であった可能性を否定できない。

また、溝などの遺構群が途切れるK～L-16グリッド南部では、遺物はほとんど出土しておらず、遺構群の北側エリアとは対照的な結果が得られている。したがって、当時の主要な活動は、溝群を境界とした北側に広がっていたことが窺われ、遺跡範囲との関連性も指摘できる。

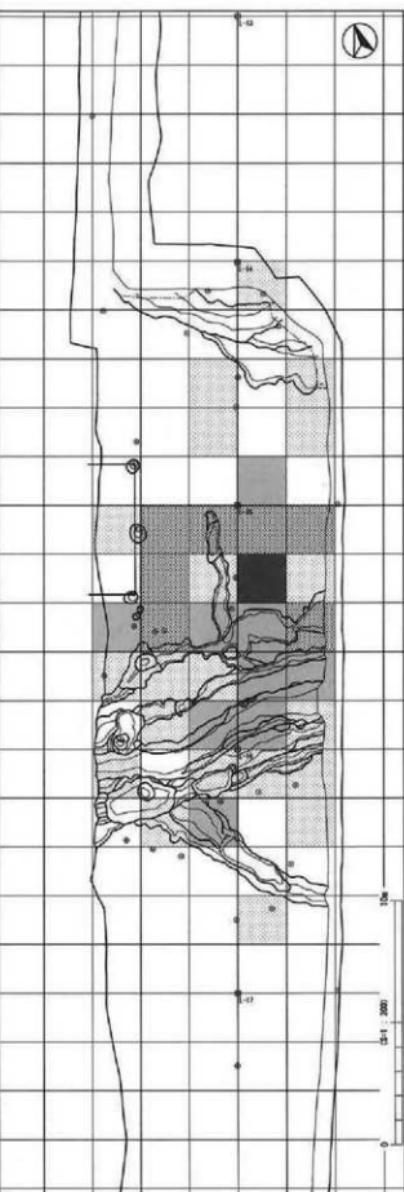
b. 種別と器種構成

音無瀬遺跡から出土した古代の土器類は、土師器と須恵器を主体に、黒色土器、綠釉陶器、製塙土器で構成されているが、出土数は極めて僅少で、黒色土器は破片数で8点、綠釉陶器は同一個体となる2点が、また製塙土器についても個体数にすれば1～2個程度に過ぎず、特に土師器の出土量が圧倒的であることを印象付けている。

ところが、音無瀬第Ⅱ群とした古代の土器・陶器類の器種・器形分類図(第8・9図)に示したように、図化された個体数では、須恵器が49点を数え、図化率も実に62.0%となっている。これに対し、赤彩された土器を含む土師器は45点だけであり、土師器破片数全体に占める図化率も僅か6.0%という結果となっており、破片数から見た量比とは逆転してしまうこととなった。土師器の図化率が極めて低い理由とは、図化が困難な煮炊具、特に甕類の胴部破片が多いこと、また食膳具でも、口径を復元できない口縁部小破

遺構名	須恵器	土師器	其他土器	縁石	瓦	古代小計	鐵大土器	埴輪	塔頭	近世陶磁器	合計
S-01	1	3				4	17				21
S-01b		17				17	13				30
S-08	29					29	2				31
S-10	37	120				157	1				158
S-11	3	26				29	2				31
S-12	16	124				2	136	1			137
S-12・13	2	22					24				24
S-13	6	100					106				106
S-14		4					4	2			6
S-16	2	32	2	2			38				38
S-05	1						1				1
S-09	1	8					9				9
K-13①							0	1			1
K-14	2						2	1			3
K-14①	2						2				2
K-15②	2						2				2
K-15③	1	1					2				2
K-16④	4	17					21				21
K-16⑤		15					15	2			17
K-15⑥	18						18				18
K-15⑦	4						4	1			5
K-16⑧	1						1				1
K-15⑨	7						7	3			11
K-15⑩	11						11	2			13
K-15⑪	6						6				6
K-15⑫	2						2				2
K-15⑬	3						3				3
K-15⑭	3						3	1			4
K-15⑮							0	2			2
K-15⑯	1						1				1
K-15⑰	1	5					6	1			7
K-16⑲	1						1				1
K-16⑳	1						1				1
K-16㉑	3						3				3
K-15㉒	3						3				3
K-15㉓	5						5				5
K-16㉔							1				1
L-14①	1						1				1
L-14②							1				1
L-14③		0	1				0	1			1
L-14④	2						2				2
L-14⑤	2						7	1			8
L-14⑥	3						3				3
L-14⑦	1						1				1
L-15⑧	18						18	7			25
L-15㉙	2	12					14				14
L-15㉚	1	47	2				50	1	1		53
L-15㉛	3						3				3
L-15㉜	1						1				1
L-15㉝	6						6	1			7
L-15㉞	2	16	3				21				21
L-15㉟	8						8				8
L-15㉟	7						7				7
L-15㉟	1	6					7				7
L-15㉟	3						3				3
L-16㉟	1						1		1		2
L-16㉟	1						1				1
L-16㉟							0	2			2
L-16㉟	2						2		1		3
L-16㉟	2						2				2
L-17㉟							0	2			2
出土・表記	6	1					7				7
合計	79	749	8	2	2	940	68	3	3	4	918

第4表 遺構別グリッド別遺物出土集計表



第7図 グリッド別遺物分布図

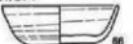
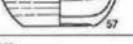
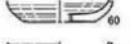
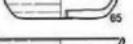
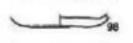
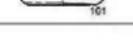
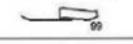
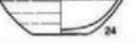
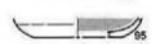
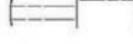
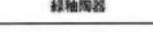
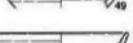
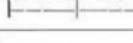
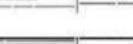
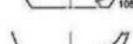
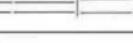
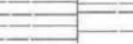
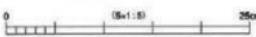
杯 壺		有台杯		無台杯	
Ⅱ A群	杯壺A1 27	有台杯A1 23	無台杯A1-1 38	杯口縫 36	
	杯壺A2 29	有台杯A2-1 82	無台杯A1-2 39		15
	28	有台杯A2-2 34	無台杯A2-1 46		78
	30	37	76		42
	杯壺A3 29	32	66		43
	杯壺M-1 92	35	無台杯A2 40		44
	杯壺A4-2 31	38	無台杯A3-1 41		45
	杯壺M-3 72	32	無台杯A3-2 46	無台杯底部 37	
	54	23	無台杯A4 48	9	
	22	67	無台杯B 47	茎 頭	
Ⅱ B群	93	85	6	縫口縫	68
	10	84	17	茎頭部	6
	73	86		(S1 : S)	25cm

第8図 音無瀬第Ⅱ群土器の器種・器形分類図(1)

片や、底径を計測できない底部破片が多いためであり、図化に至らなかった理由の多くが、出土した土器破片そのものの個体と器種に起因しているからである。したがって、図化資料の個体数から受ける印象は、あくまでも図化された個体数の結果に過ぎず、実態としては、土師器の出土量が圧倒的であることを、明確に指摘しておきたい。

古代土器類の大別 ところで、古代の土器類が出土した遺構において検討したとおり、溝C群としたSD-10溝と溝B群の間には間層があり、時期的な隔たりが確認されている。また、SD-10溝からは土器類が集中的に出土しており、比較的一括性が高い点も指摘できる。しかし、溝B群から出土した土器類をみると、大半はSD-10溝出土土器とほぼ同じであり、時期的な差異がない状況が看取される中で、新しい時期の土器が含まれており、これらが溝B群の時期を示す土器群と認識できる。

そこで、これら土器群の状況から、音無瀬第Ⅱ群とした古代の土器群も新旧2段階に細分が可能なこと

無台杯				
II群	無台杯A  50	無台杯C1-1  66	無台杯C2-1  53	無台杯C2-2  55
	無台杯B  77	 52	 64	 58
	 74	 54	 82	 57
	無台杯B  96	無台杯C1-4  51	無台杯C2-7  63	無台杯底部  60
	 97	 65	 61	 66
	 100	 59	 101	 67
	黒色土器			
	楕A  102	楕A  24	小便B  25	須恵部  69
	楕B  79	楕B  18	中便A  20	須恵部1  19
	綠釉陶器  85	綠釉陶器  49	大便A  104	須恵部2  106
	 80	楕B  10	大便B  70	須恵部3  108
	製塩土器			
	 13	 103	大便B  71	鍋類  12
	 14	 14	 81	 21
				

第9図 音無瀬第Ⅱ群土器の器種・器形分類図(2)

から、古段階をa群、新段階をb群として細分することとする。第Ⅱa群とした土器群は、SD-10溝出土土器群を主体に、溝B群などに混入した土器群で構成され、合計される個体数はかなり多くなる。また、第Ⅱb群は、溝B群から出土した土器群の中で、須恵器では小泊窯系の須恵器を抽出した一群と、土師器では主に楕形態の器種を兔がい、さらに黒色土器や緑釉陶器、そして製塩土器を含めたものとした。

さて、第8・9図は、音無瀬第II群の器種と器形を種別に従って掲載した分類図であるが、図化された結果であるとしても、提示された器種構成などはかなり特徴的である。以下、種別にしたがって、概観したい。

i) 須恵器（第8図）

まず、須恵器の器種としては、食膳具と貯蔵具に大別される。貯蔵具である壺類は、図化資料では2個体分であるが、意外にも胴部破片などの出土がほとんどなく、器の大きさに対して、出土した破片数そのものも極めて少なくなっている。したがって、須恵器における器種構成上の特徴とは、壺や壺類といった貯蔵具がほとんど組成していない点をまず指摘できる。

このような貯蔵具に対して食膳具は、かなり充実している様子が窺われる。まず、器種として掲げられるのは杯蓋であり、これと対を成す有台杯、そして無台杯で構成されているが、それぞれの各器種内におけるバラエティも多い。

杯 蓋 杯蓋の器形については、宝珠部分と身の形状、そして端部の作りなどで細分が可能である。まず、宝珠部分の特徴は、相対的にやや小型のもの（a類）と中型でやや大きいもの（b類）に大別され、さらに中心部が僅かに突起状をなすもの（i類）と、ややくぼむもの（ii類）に区分され、それらの組み合わせから、a i類（27・29・89）、a ii類（28・30）、b ii類（90）の3種に細分できる。身の形状としては、比較的高さがあるもの（27・30など）と、低平なもの（92・93）とに区分され、前者が多い。端部については、1類：三角形状を呈するもの（27・92）、2類：内側がやや脹らむもの（28・30・89など）、3類：端部が2類とおおむね同じとしつつ身の端部側がやや反るものの（29・73・91・93）とに大まかに細分され、2類が多くなっている。

杯蓋の形態的な分類は、以上のような観点から細分が可能であるが、音無瀬の資料では完形品が少なく、破片資料が主体であることから、宝珠部分と身、そして端部の形態分類から細かく細分することは避け、今回は大枠的な観点から形態を分類することとし、主に端部の形状から分類した。つまり、杯蓋A類の各1～3類は、端部の分類にそれぞれ対応する。また、端部を主とする破片資料については、A4類に一括したが、細分された各1～3類も、端部の分類に対応するものとした。結果としてA1類（27・92）は少なく、A2類（28・30・89・31）については完形品に多く、A3類（29・22・72・93・94）は破片資料が多いという傾向が把握された。なお、第II b群の杯蓋B類については、宝珠はb ii類（90）、蓋の身部分は3類（73・91）で占められている。

有台杯 有台杯の器形は、一般的な深さのものと、身がやや深くなるものとに大別し、後者のうち大型のものを有台杯B類（23）、やや小型のものを有台杯C類（84）とした。有台杯B類については、底部破片であり、口縁部を確認できないが、やや外反傾向が窺われる。有台杯C類については、やや内湾傾向が窺えるものの直線的に外傾するものである。一般的な深さとした有台杯は、有台杯A類として一括したがバラエティが多く、底部が平底であるものと丸底風を呈するもの（有台杯A3類：32）とに細別し、前者は口縁部が内湾するもの（有台杯A1類：82）とやや緩く外反するもの（有台杯A2類）に細分した。有台杯A2類については、口径に比し器高が低いもの（A2-1類：82）と、やや身が深くなるもの（A2-2類：7・34・35・83）に細分した。第II a群の高台部は、内側が設置する内接であるが、第II b群では外接となる。

無台杯 無台杯については、まず成形技法として、底部の切離しにより大別し、底部ヘラ切りを無台杯A類とし、糸切りの場合は無台杯B類（47）としたが、B類については僅少である。また、無台杯B類は楕円形に近い形態を呈するが、第II b群の無台杯は、底部ヘラ切りながら楕円形を呈しており、これを無台杯

(8) とした。無台杯A類については、バラエティが多く、一括的にまとめにくい状況となっている。まず、底部が丸みを有するものとしてA1類を設定したが、それらの中で身が深く、生焼けの一群をA1-2類(46)とし、一般的な深さの一群をA1-1類(38・39)とした。底部が平板な一群については、A-2~4類に分類し、A2類はやや身が深く(40)、A3類は身がやや浅く、口径が小さなものをA3-1類(41)、大きなものをA3-2類(16)に細分した。A4類については、胎土や焼成が土師器でありながら、成形そのものが須恵器である特殊な事例を分類したものである(48)。

ii) 土師器(第9図)

土師器は、食膳具と煮炊具に大別され、破片数としては器形が大きな煮炊具が多くなる。しかし、前述したとおり、煮炊具の主体を占める壺類の多くは胴部破片であり、図化に至らないものが多く、また口縁部破片であっても、口径が復元できないものについては図化を割愛しており、図化点数では食膳具が多くなっている。さらに、食膳具の主体を占める無台杯は、SD-10溝から集中的に出土しているが、これらの完形率が高いことも、図化点数が多くなった理由である。

音無瀬第II群の土師器についても、a群とb群に区分されるが、量的には第IIa群が凌駕する。それぞれの組成にも相違があり、第IIa群では、煮炊具である壺類の出土量が多く、生活臭が漂う。しかし、第IIb群では、食膳具である無台碗に限定されており、その差異は歎然としている。

なお、古代土器群である第II群の土師器食膳具は、無台杯と無台碗の2器種に限定されており、高台が付く有台類の出土は皆無であった。また、第IIa群の食膳具はすべて無台杯であり、第IIb群については、すべて無台碗である。

無台杯 無台杯は、第IIa群に限定されるが、大きく3類に分類される。まず、無台杯A類は、整形後薄い化粧土を塗布した痕跡が観察され、丁寧に仕上げられるとともに、胎土も精選される特徴的な個体である。器形は、内湾気味に立ち上がる。1点だけの出土である(50)。

無台杯B類は、やや丸みを持つ底部と、やや身が深い器形を特徴とする。内底面を除く器面を赤彩される4点(74・77・96・97)については、出土地点や帰属する遺構がそれぞれ異なるが、胎土の特徴がかなり近似しており、同一個体の可能性がある。

無台杯C類は、体部器形の立ち上がりや底部の調整等で細分を試みた。まず、底部の調整として、糸切り痕未調整のもの(2類)と、ヘラケズリを施して底部に丸みを持たせるもの(1類)に大別した。C2類については、口縁部の立ち上がりが中位でやや外反するものをC2-1類(53・61~64)、やや内湾気味のものをC2-2類(55・57・58)として2細分したが、その差異は小さい。C1類は、ヘラケズリの及ぶ範囲により、全面(C1-1類)と外周(C1-2類)に細分した。C1類は、「井」が施されるものが大半を占める。口縁部は、C2-1類に近い。底部については、C2類に分類されるものが圧倒的に多かった。

無台碗 すべて第IIb群に属する。完形品は少なく、大半が破片資料である。大きく2類に区分した。無台碗A類は、底径がやや大きく、身が浅いものとした(24)。無台碗B類は、底径がやや小さく、口縁部が内湾しながら立ち上がるもので、法量としては2種があり、口径がやや小さなB1類(18)と、一回りほど口径が大きくなるB2類(10)に細分されるが、何れにしても個体数は少なかった。

煮炊具 煮炊具は、壺類と鍋類の2器種で、すべて第IIa群に属するものと判断した。両者ともほとんどが破片で出土しており、全体の器形を窺えるものはなく、したがって、数多くの破片資料が出土した壺類については、口縁部と胴部、底部はそれぞれ分離せざるを得なかった。壺類の法量は3区分され、小壺

(25)、中壺(29・104)、大壺(70・71・81)に分類した。口縁部の器形は、頸部がくの字を呈し、若干内湾気味に外傾するA類(20・70・71・104)と、口縁部がやや受口状を呈するB類(25・81)に細分できる。胴部上半から口縁部までの調整は、内外面とも原則ロクロナデが施されるが、小壺の25については、外面がカキ目、内面はハケ目が施され、カキ目が施される胴部破片の69とは同一個体の可能性が高い。

壺類の底部については、法量から3細分したが、壺底部1類と2類はロクロ成形であるが、大きな壺底部3類については、ハケ調整が施され、非ロクロ成形の器種ということになる。

鍋類(26)については、口縁部の小破片が1点確認されただけであり、胴部や底部の形状等は不明である。

iii) 黒色土器・綠釉陶器・製塩土器(第9図)

各種別とも、出土量は僅少であり、1個体ないし数個体に過ぎない。何れも第II b群に属するものと判断した。製塩土器については、小破片であるが、第II b群に煮炊具がほとんど伴っていない状況の中で、僅かながら出土している点は、注意が必要かもしれない。

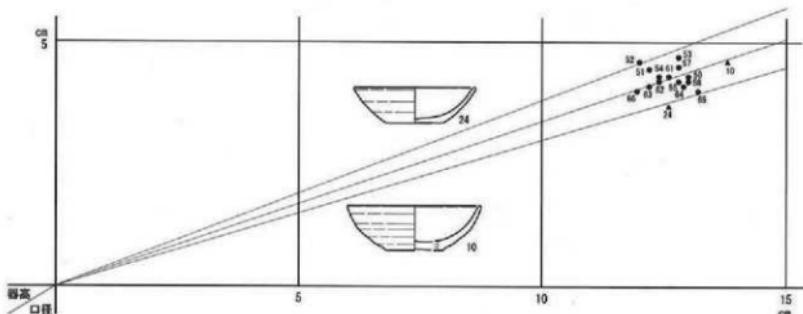
黒色土器 何れも底部の破片であるが、器種としては無台椀となる。内外面黒色のA類(102)と、内黒のB類(79・95)に区分したが、A類については破片が小さく、断定は難しいかもしれない。

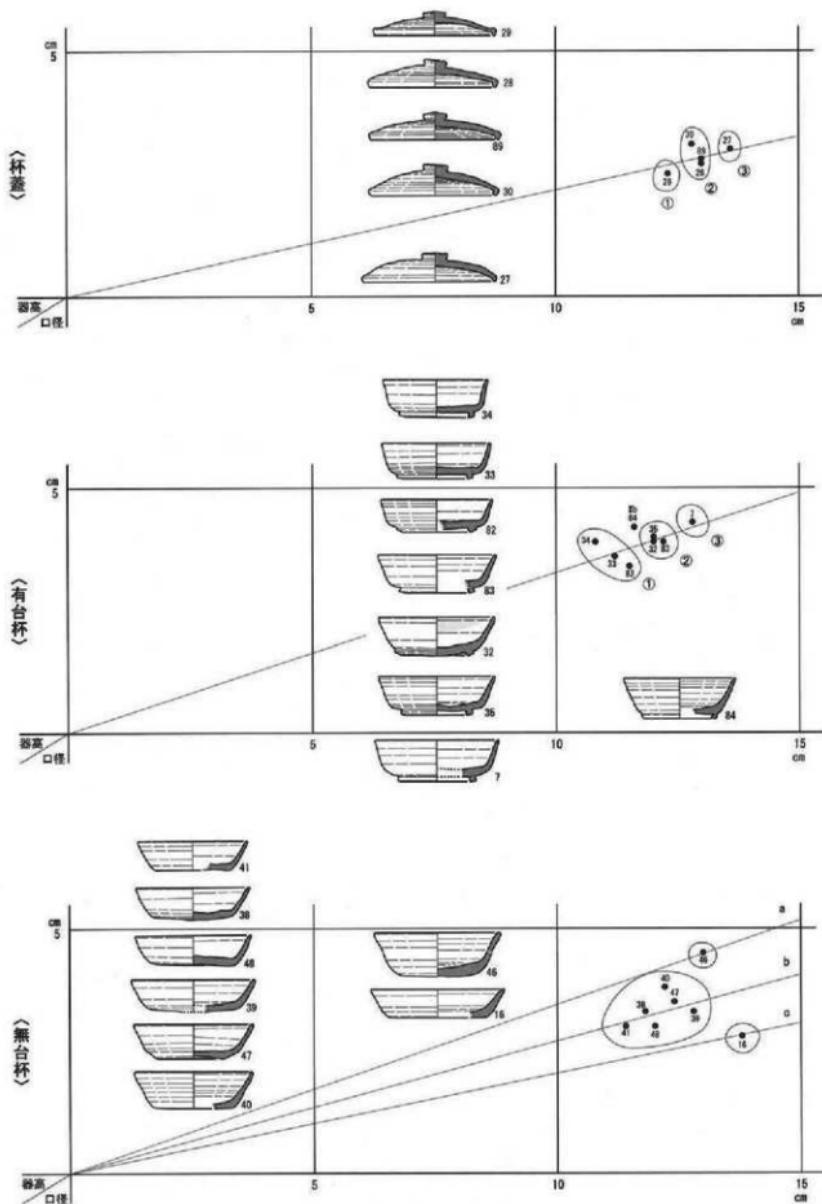
綠釉陶器 小型の双耳瓶の破片である(80)。胎土は、ややがさつく軟質系で、砂粒の混入は少ない。釉薬は、外面全面と、内面では口縁部と胴部下半に塗布されるが、色調は緑色とは程遠く、ややくすんだ灰褐色を呈しており、二次的な被熱を受けたものとみられる。

製塩土器 確認された破片は小片の2点(13・14)に過ぎず、器形は窺えない。したがって、製塩を行ったわけではなく、塩を入れる器として搬入されたものと考えられるが、破片が僅少であった事実から、大半が散逸していることになる。胎土には、粒径1mm未満の砂粒が多く含まれ、焼成も堅微である。

c. 食膳具の法量

本項では、完形品が比較的多い食膳具について、法量から見た分類を試みたい。対象とするのは、須恵器では、杯蓋、有台杯、無台杯、土師器では、無台杯と無台椀である。





第11図 須恵器の法量分布図

i) 土師器(第10図)

無台杯・無台碗 II a群の無台杯については、個体数が多いという事情もあるが、おおむね1.0cm程度の範囲で集中しており、全体的な法量の差異、あるいは分化といった現象は認めにくい。このため、原則として同じ規格として、成形された可能性を否定できない。II b群については、2点のみであり、器形的な差異も大きく、特に傾向等は窺えないが、II a群と比較すると器高はやや低い。

ii) 須恵器(第11図)

杯 蓋 計測可能な杯蓋はII a群に限定される。器高については、宝珠の高さも計測しているが、例示した5個体に限定すれば、法量的な差異は小さい。口径について区分を試みると、①群から③群までおおむね3区分が可能である。ただし、その差異は直径で1cmにも満たない僅差であり、法量の分化が明確とは言い難いかも知れない。したがって、個体数が多い場合は、この3区分は見えにくくなる可能性がある。ただし、次項の有台杯の口径も、3区分が可能で、ほぼ同じ傾向が看取されることから、ある程度の対応は想定できそうである。

有台杯 II a群の有台杯についても、法量的には大きな変動はなく、安定している。口径については、前述した杯蓋と同様に、①群～③群まで3区分が可能であり、それぞれが対応する可能性が高い。II b群については、II a群の①類と②類の中間に位置するが、1点の事例であるため、ほかに対比できない。

無台杯 無台杯についても、II a群に限定される。器高／口径の数値では、身が浅いa類(16)と、身が深くなるc類(46)、そして中間的なb類に区分され、b類が多くなっている。特にa類とした16については、形態的には特異な存在といえそうである。

d. 胎土と混和材

土師器 第II a群の土師器無台杯の胎土は、砂粒の含有がやや少ない101や、褐色粒が見当たらない無台杯Bの77という事例もあるが、無台杯A(50)と無台杯Bの内砂粒をほとんど含まない100を例外とし、その他はすべて、砂粒を多く含み、かつ褐色流が適度に混入することで共通しており、この点が混和材における大きな特徴となっている。この事実は、考え方を変えた場合、同じ生地からほぼ同時に生産された可能性を示唆するものであり、SD-10溝に集中していたことと合わせ、注意したい事項である。

煮炊具である甕類や鍋については、混和材として砂粒を混ぜることが一般的であるが、特に石英が目立つ個体に砂粒が多い傾向が看取されることから、混和材として採取した砂粒の組成に大きく関わっている可能性が高い。また、無台杯と同様に、砂粒とともに褐色粒が組成するパターンも比較的多いことから、煮炊具も同時に在地で土師器生産されていたことが窺われる。

また、第II b群については、個体数が少ない中で、胎土に含まれる混和材等の構成にバラエティが多く、特徴的な状況は認められなかった。

なお、第II群全体をみて、僅かながら海綿骨針が含まれる事例が存在しており、生産地の差異などを検討する必要がありそうである。

須恵器 須恵器については、生産された窯場との関連性や、群別の根柢等に資するため、やや細かく観察し、その結果については、第5表にまとめるとともに、各個体別の図を作成した(第10・11図)。

胎土の観察結果と分類試案については、第12・13図のとおりであり、全体を大きく6群に大別し、個体

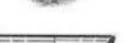
数が多いものなどについては、細分を試みたものである。まず、A類は、白色粒子（ $\phi 1\text{mm}$ 前後）を主体に黒色粒子が組成するもので、須恵器49個体の内、27個体（55.1%）と過半数を占める。白色粒の粒径と黒色粒の含有量等の組み合わせから、4類に細分した。B類は、A類と同様に白色粒子が目立つが、粒径が $\phi 0.2\text{mm}$ 前後～未満と小粒となるもので、黒色粒子を僅かに含むものをB2類とした。B類は7個体（14.3%）で、比較的多い。C類は、白色岩粒（ $\phi 3\text{mm}$ 未満）を多量に含み、破断面ががさつくものである。個体数としては1個体であり、やや特異な存在である。D類は、微細な砂粒を含み、土師器に多く含まれる褐色粒が組成するとともに、金雲母や海綿骨針が含まれ、さらに生焼けで酸化炎焼成となって明褐色を呈する一群である。3個体（6.1%）と少ない。E類は、土師器的な胎土のものを一括したが、小砾を含むものをE1類とし、含まないものをE2類として細分した。F類は、白色・黒色粒子のほかに、灰色粒を僅かに含み、焼成等から佐渡小泊系窯と判断した個体を一括した。これらはすべて、第II b群に分類したものであるが、個体数は8個体（16.3%）と、やはり少ない。

須恵器の胎土分類と器種組成 第12・13図を一瞥してまず気付く点について概観したい。まず、器種が比較的整っているのはA類であり、それは個体数と正比例することであるが、F類についても個体数が少ないながら、ある程度の組成を構成していることが窺える。特に注目したい器種が杯蓋の存在である。つまり、胎土の分類から見た杯蓋は、A類とF類に分類され、その他のB～E類には属さないことがある。

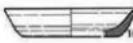
また、A類では個体数が多いことから4類に細分されているため、さらに細かく見していくと、杯蓋と組み合わせる有台杯Aとの関係は、A1類において有台杯の割合が多く、A2類では定量含まれているが、A3・4類に有台杯Aがなく、A4類では有台杯Bがようやく確認できるというように、各類における構成には差異が認められる。また、有台杯A・Bが組成しないA3類には、墨書きされたすべての杯蓋3個体が分類されている点には、注意が必要かもしれない。

分類	概要	個体番号	点数	%
A	1 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 前後△・ $\phi 1\text{mm}$ 前後△）を少量（△）含み、黒色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ △）を少量含むもの。	7・22・27・33・45・72・82・87・92・93・94	11	27 55.1%
	2 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 前後△・ $\phi 1\text{mm}$ 前後△）を少量（△）含み、黒色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ ▼）を若干量含むもの。	15・35・42・83・89	5	
	3 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 前後△・ $\phi 1\text{mm}$ 前後△）を少量（△）含み、まれに大粒の白色岩粒（ $\phi 5\text{mm}$ ▼）をまれに含み、黒色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ ▼）を極少量含むもの。	9・28・29・30・38・41・78	7	
	4 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 未満○・ $\phi 1\sim 2\text{mm}$ △）をやや多く含み（○）、黒色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 未満○）をやや多く含むもの。	23・31・37・43	4	
B	1 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 前後）を多く（○）含む。	40・44	2	7 14.3%
	2 白色粒子（ $\phi 0.2\text{mm}$ 未満△）と、黒色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ ▼）を含むもの	34・36・39・68・85	5	
C	白色岩粒（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）を多量（◎）に含む。石英長石も多い。断面がさつく。	16	1	2.0%
D	微細な砂粒（ $\phi 0.1\text{mm}$ 以下○）を含むとともに、褐色粒（ $\phi 1\sim 4\text{mm}$ △）が特徴的。微細な金雲母や海綿骨針を含む場合がある。生焼けで明褐色を呈する。	46・76・88	3	6.1%
E	1 砂粒（ $\phi 1\text{mm}$ 未満○・ $\phi 8\text{mm}$ ▼）を含む土師器的胎土。	32・48	2	3 6.1%
	2 砂粒（ $\phi 1\text{mm}$ 未満△）を含む土師器的胎土。	47	1	
F	白色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ △）、黒色粒子（ $\phi 0.1\text{mm}$ △）、灰色粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ▼）を含むもの。小泊系窯産。	6・8・17・73・84・86・90・91	8	16.3%
合計			49	100.0%

第5表 音無瀬遺跡出土須恵器の胎土分類表

分類	杯 蓋	有台杯	無台杯
1	    	       	   
2	 	 	 
A	 	   	   
3	 		
4	 	 	 

第12図 須恵器の胎土分類図（1）

分類	杯 蓋	有台杯	無台杯	蓋
I				
				
B				
	2			
C				
D				
E	1			
	2			
F				
				

第13図 須恵器の胎土分類図 (2)

B～E類については、無台杯が主体であり、有台杯が少ないという傾向が窺える。特に有台杯Aが確認されるのは、B2類とE1類だけであるが、B類全体では有台杯Aと無台杯のほか、甕類の口縁部が組成しており、一定の存在感を示している。しかし、C～E類については、何れも1～3個体と個体数が少なく、特に生焼けであったり、土師器的な胎土、底部糸切りなど、特異な存在となっている。

F類については、佐渡小泊系窯産の須恵器を一括したもので、杯蓋、有台杯、無台杯、甕類がそろうことから、須恵器が安定的に供給されている実態を示唆するものとして評価したい。

2) 古代以外の土器・陶磁器類（音無瀬第I群・第II群・第IV群土器）

a. 音無瀬第I群土器（縄文土器）

出土状況 音無瀬遺跡から出土した縄文土器は、第4表にも集計したとおり、調査区全体ではおよそ68点の破片が出土した。これら縄文土器が最も多く出土した遺構は、SD-01溝の約30点(44.1%)であり、当該溝以外では散発的に1～2点程度が出土する状況であった。また、包含層から出土した縄文土器については、L-15①グリッドの7点が最多で、その他では数点もしくは皆無であり、状況的には希薄であった。

遺存状況 縄文土器の器面は、摩滅が著しく、文様や縄文地文などがほとんど留めていない個体で占められている。この状態は、縄文土器が最も多く出土しているSD-01溝出土でも同様であり、これらが原位置を失い、流路等を伝って流れ込み、古代などの遺構内に混入した経緯を物語っている。その結果として、拓本などの図化がかなわないものが大半を占めることとなった。

ただし、これら縄文土器が、破片ながら少なからず出土したという事実は、当該調査区の上流側には、縄文時代遺跡が立地しているであろうことを示唆するものとして評価できる。

大別と分類 図化された破片は少ないが、SD-01溝から出土した縄文土器5点(1～5)と、包含層から出土した2点(114・115)を図示した。これらの文様や器形・器種等及び胎土の特徴から分類すると、中期前葉(a群:1・2)と後期前葉(b群:3～5)に大別されるが、時期を特定できない破片をx群(114・115)としてまとめた。a群土器は、半截竹管による半隆起線文が施される(1・2)ことが特徴である。またb群土器では、蓋形土器(4)が出土している。

b. 音無瀬第II群・第IV群土器

中世の陶器 中世陶器とは、珠洲と越前の2種に集約され、中世土師器は確認できていない。すべて遺構外の包含層から出土しており、出土状況等に特別な傾向は窺われない。

珠洲は、擂鉢2点(107・109)、甕類1点(108)である。109は珠洲編年のⅢ期、107はⅤ期の所産である。越前は、擂鉢2点(111・112)と甕底部1点(110)である。甕底部の時期は特定できないが、擂鉢については、16世紀の所産である。したがって、平安時代中期の9世紀中葉以降については、遺物から継続を探ることができないが、少なくとも中世では13世紀後半から16世紀まで、断続的ながら継続的な土地利用があったことを窺い知ることができる。

近世の陶磁器 近世の陶磁器は、肥前系の青磁香炉(116)と焙烙と考えられる素焼きの陶器(117)の2点を図化したが、全体でも4点が出土しただけであり、出土量は全般的に少なくなっている。この理由として考えられる点は、基本層序の第I層から第III層まで、特に場整備における盛土層などを重機による表土剥ぎによって除去したことと関連している可能性が高い。

3) 遺構出土の土器・陶磁器類の概要

音無瀬遺跡から出土した土器・陶磁器類はすでに述べたように大半が遺構内から出土している。本項では、遺構別に土器類等を概観し、合わせて主要な包含層出土土器類等についても、略述したい。

なお、各個体の法量や調整、色調や胎土等は、土器・陶磁器類観察表（巻末の附表）にまとめた。

S D - 01溝（図版12-1~6）当該溝は、上層のa溝と下層のb溝に区分されるが、a溝として取上げたものではなく、S D - 01溝全体もしくはb溝出土となっている。縄文土器は、全体で約30点が出土しているが、何れも摩滅等が著しく、混入あるいは流れ込みと判断されるものであるが、当該溝の上流に縄文時代遺跡の存在が濃厚である。時期としては、中期前葉新崎式期後半の深鉢破片（1・2）と、後期前葉三十稻場式の蓋（4）、深鉢の胴部片（3）と底部（5）である。1は、半截竹管による半隆起線文が施されるが、爪形文はない。4の蓋には、貼付文が継位に施される。古代の土器は、第II b群で占められ、小泊窯系の壺破片のほか、土師器無台碗の小破片等が出土している。

S K p - 05柱穴 S B - 20建物跡の柱穴は、3基検出されているが、柱根以外の遺物、特に時期判定が可能な土器類の出土は極めて少なく、S K p - 5柱穴から出土した土師器の口縁部小破片1点が唯一であった。器種は、無台杯もしくは無台碗であるが、1辺が2cmほどと小さく、器形の全体像は不分明で、図化は断念した。調整は、横ナデが施されている。胎土はきめが細かく緻密で、微細な砂粒が若干含まれ、焼成は軟質で、触ると粉が指に付着する。胎土の状態は、土師器無台杯Aに近いが、焼成は異なる。時期的な判断は、雰囲気に第II a群の可能性が高いように見受けられるが、断定は困難である。

S D - 08溝（図版15-81）第II b群を主体とする土師器が約29点出土しているが、小破片のため大半が図化に至っていない。器種としては、無台碗を主体とし、壺類は数点に過ぎない。図化した壺類（81）は、口縁部がやや受口状に脹らむ特徴を持つが、第II a群の所属と判断した。

S D - 10溝（図版13-27~図版15-71）第II a群の土師器・須恵器がまとまって出土した。出土状況は、図版10に示したように2m四方の範囲に集中しており、一括性が高い。須恵器の器種は、食膳具では杯蓋・有台杯・無台杯の3種、壺類は口縁部破片1点（68）が出土しているが、唯一の貯蔵具である。土師器は、無台杯が大半を占めるが、壺類の破片が多いことも事実である。ただし、壺類については、祭祀など何らかの行為に伴う可能性は低いように感じられる。

当該土器群において、特記されることは、墨書き土器と刻書き土器が多数出土している点であり、墨書きは須恵器に、刻書きは土師器に施され、「井」と「大」の2種が確認された。「井」については、文字以外の記号という考え方もあるが、今回は便宜的に文字として扱うこととした。

須恵器に施された墨書きの文字は、「井」3点（28・30・33）と、「大」1点（29）である。墨書きされる器種と位置は、杯蓋表面の宝珠付近3点、有台杯外底面の左寄り1点である。刻書きは、すべて土師器無台杯の外底面に刻まれており、その文字「井」は、7点（51・52・54・55・56・59・66）に及ぶ。また、何れも焼成前に刻まれていることが明らかであり、刻書きがない個体も器形や調整、胎土などが類似することから、使用目的が製作段階から予定されていた可能性が高い。

なお、図版10では、集中箇所が2地点に分かれており、両者の中間では遺物が希薄となっているが、これはサブトレンチが設定されていたことによる。また、49については、II b群の無台碗であり、S D - 10溝1区出土との注記があったことから当該遺構内に含めている。しかし、本溝に1区はないことから、混入

等と判断し、当該遺構一括出土土器群の範疇からは除外する。

S D - 11溝（図版15-72~75） 須恵器3点のほかは土師器が主体を占め、特に壺類が多くなっている。図化資料としては、須恵器の杯蓋2点（72・73）と無台杯（76）、土師器では赤彩された無台杯（74）と壺底部（75）である。これら5点の内、72が第II b群の小泊窯系須恵器である以外は、第II a群の所産である。76は、生焼けの製品である。

S D - 12溝（図版12-6~14） 土器・陶磁器類の出土量では、S D - 10溝に次ぐ約137点と多い。また、S D - 12溝と対をなすS D - 13溝、および両溝から出土した破片が互いに接合した事例を含めると、古代に限定してもおよそ266点に達しており、出土量としては最大となる。

出土した土器類の種別は、須恵器と土師器を主体とするが、このほかに製塙土器（13・14）の破片が含まれていた。須恵器は、有台杯（7）と無台杯2点（8・9）、土師器は無台碗（10）と壺底部（12）である。これらの内、製塙土器2点と須恵器無台杯（8）、土師器無台碗（10）は第II b群で、当該溝の時期を反映するものであるが、これら以外は第II a群の混入である。

S D - 13溝（図版13-15~21） 出土量としては、土師器100点、須恵器6点と多いが、小片が多く、図化資料は7点となった。須恵器無台杯3点（15~17）、土師器無台碗（18）、壺類3点（19~21）である。第II b群は、無台碗の1点であり、これ以外はすべて第II a群の混入品である。

S D - 12・13溝（図版13-22~26） 図化資料は5点を例示したが、何れもS D - 12溝とS D - 13溝それぞれから出土した破片が接合したものである。須恵器は、杯蓋（22）と有台杯（23）、土師器では無台碗（24）と小壺（25）、鍋口縁部（26）である。これらの中で、第II b群に属するのは、無台碗（24）の1点のみであり、その他はすべて第II a群の混入品であり、小壺（25）については、S D - 10溝出土の小壺胴部破片（69）と同一個体の可能性がある。

S D - 18溝（図版15-77~81） 古代土器類については、約38点の出土量となっている。図化資料は、赤彩土師器無台杯（77）、須恵器杯口縁（78）、黒色土器（79）、そして縁釉の瓶1個体（80）と、バラエティがある。黒色土器と縁釉陶器が第II b群に属するが、77・78は第II a群の混入である。

包含層出土の土器・陶磁器（図版15-82~図版17-117） 包含層など遺構外から出土した土器・陶磁器類は、約326点を数える。これらのうち、第II群土器とした古代の土器類は286点（87.7%）と大半を占めており、今回の調査区が古代を主体としていたことが明らかである。また、その他の土器群は、第I群土器（縄文土器）：30点（9.2%）、第II群土器（中世）：6点（1.8%）、第IV群土器（近世）：4点（1.2%）という比率となり、縄文土器の出土量が比較的多くなっている。

第I群土器は、深鉢の口縁部（114）と底部の破片（115）を図示したが、時期等は特定できなかった。

第II群土器は、25点を図化したが、これらの内、第II a群は18点、第II b群は7点を図示した。第II a群の内訳は、須恵器有台杯（82・83・85・87）、杯蓋（89・92~94）、赤彩土師器杯（96・97）、無台杯（98~10）、壺類（104~106）である。第II b群については、須恵器有台杯2点（84・86）、杯蓋（90・91）、黒色土器（95）、土師器無台碗（102・103）となっている。

なお、須恵器杯蓋の内、89と91は、内面に墨が付着しており、転用硯である。

第III群土器は、珠洲と越前に限定され、これらに伴うであろう中世土師器は確認できていない。珠洲は、Ⅲ期（109）とV期（107）の擂鉢、および壺類（108）の破片、越前は、16世紀後半の擂鉢（111・112）と壺底部破片（110）である。

第IV群土器は、肥前系の青磁で香炉（116）、塔塔（117）と考えられる口縁部破片が出土している。

3 漆器・木製品・金属製品・石製品

音無瀬遺跡からは、土器・陶磁器以外の遺物として、漆器を含む木製品類や金属製品、そして石製品類が出土している。本項では、これらを一括して概要をまとめたい。

漆 器(図版16-113) K-16⑧グリッドの小砂利層上面から出土した。内外面黒色漆。口縁部と高台の先端部が欠損。高台部の直径は、8.6cmを測る。

S D-10溝出土木製品(図版18-139~141) 樹枝を利用し、先端部を1カットで尖らせた杭(141)と、やや太い樹枝をカットして先端部を調整した杭(139)の2種2本が出土している。また、断面が四角形となるように加工された木片(140)が出土しているが、杭の先端部の可能性がある。

S D-12溝出土木製品(図版17-118~120) 短冊形の板状木片(118)のほか、断面が三角形に加工された棒状の木片2点(119・120)が出土している。118については、先端部が片側に丸くなる。上部は欠損。

S D-14溝出土木製品(図版16-126~134) 本溝は遺構自体が浅く、平面形の一部が安定しないが、木製品類の出土量が多かった。しかし、ほとんどの性格が不明な板状の断片であり、部材などの可能性もあるが、用途等は不明である。唯一128については、縁が丸く弧を描いていることから、曲げ物の底板と考えられる。126は、やや太い部材で、上端はおおむね平坦に調整、下端部はやや尖らせてある。127については、腐食が著しく、加工痕が不分明となっているが、126に類似した部材の可能性がある。

S D-08溝出土木製品(図版18-135~138) 本溝の覆土は、流水があったことを示すように砂層が堆積し、図版4の下段に示した平面図のとおり、自然木の樹枝を活用した細い杭が多量に打ち込まれていた。図化資料としては、先端部の加工が観察できる個体を5例図示した。

S B-20建物跡出土木製品(図版16-122~124) 建物跡の柱穴3基からそれぞれ柱根が出土した。柱根は、中央の棟木に当たるSKP-5出土柱穴が芯持丸木であるが、両側となる2基は、SKP-4が1/4材、SKP-6は1/6材の割り材から成形されたものとなっている。また、3本何れも、下端部に溝状の抉りが一巡りする。各柱穴からは、礎板などの部材は一切出土しておらず、この抉りそのものは、運搬に際し、ロープ等を括り付けるためのものであったと考えられる。側面の整形は、2~3cmほどの幅に整形された多面体となっており、概して丁寧な作りであった。

SKP-7ピット出土木製品(図版17-125) 下端部が凸字状に突出させ、膣穴に差し込む部材の可能性があるが、上端部は欠損しており、用途等は不明。

包含層出土木製品(図版18-142~144) 142は、K-15⑩グリッド出土の薄い板状の断片である。左上の角は、カットされ、上端は原形のまま、下端は幅3~4mmほどで本体より若干薄く削り取られているものである。部材と考えられるが、用途や性格不詳。143は、L-16②グリッドから出土した上下不明の部材で、図の上位は六角形に整形される。下端部は欠損し、全形は不明。用途や性格不詳。144はL-14⑩グリッドから出土した断面方形の棒状の部材である。

帶飾り金具(図版17-121) SD-12溝出土。銅製の鉈尾である。大きさは、横の長さ3.85cm、幅2.65cm、厚さ0.12cm、重さ7gである。

砥 石(図版46-a) SD-18溝出土。側面は、4面すべてが砥面として使われているが、1面については、欠損、剥離している。写真の上端部は、原形のままであるが、下位は欠損している。長さ8.5cm、最大幅4.1cm、最大厚3.2cm、重さ135gである。

V 総括

1 音無瀬遺跡における古代土器の様相

音無瀬遺跡の古代土器については、調査で出土した土器群を4大別した中で、第Ⅱ群土器としてまとめたところである。これらの概要については、すでに第Ⅲ章で述べているが、本遺跡における古代土器の様相について改めてまとめ検討を加えるとともに、編年的な位置付けを試みることとした。

1) 音無瀬第Ⅱ群土器の様相

a 第Ⅱ群土器の概要

出土状況と傾向 古代の土器群は、第Ⅱ群土器としてまとめ、これらを第Ⅱa群と第Ⅱb群に大別し、それぞれ時期が異なるものとして報告した。古代前期末に位置付けられる第Ⅱa群は、SD-10溝から集中的に出土するとともに、Ⅱb期以降の遺構に混入していた土器群ということになる。また、第Ⅱb群は、溝B群を主体に、SD-10溝以外の遺構から出土しているが、絶対量は少なかった。

第Ⅱ群土器は、須恵器と土師器を主体に、黒色土器、綠釉陶器、製塙土器で構成される。これらの破片総数は、およそ840点に達するが、その内訳は、土師器が747点(88.9%)を占め、破片数の上では、完形率と固化率が高い須恵器79点(9.4%)を凌駕する。また、土師器には、化粧土が施される無台杯Aの1点と、無台杯Bで同一個体の可能性がある赤彩土器4点が含まれている。この他の種別では、黒色土器8点、綠釉陶器2点1個体、製塙土器2点が確認できる。出土位置については、遺構に伴うものが多く、特にSD-10溝とSD-12・13溝からまとまって出土した。また、遺物包含層等グリッドで取上げられた土器片については、L-15⑥グリッド周辺からの出土が多くなっているが、理由等は不詳のままである。

土師器・須恵器の器種構成 用途別・機能別では、食膳具と煮炊具、貯蔵具で構成される。第Ⅱa群と第Ⅱb群に区分した場合、両者とも食膳具が主体を占めることに対し、貯蔵具が限定的で出土量が僅少であるという点で共通する。しかし、第Ⅱa群は、第Ⅱb群ではほとんど出土していない壺類や鍋といった煮炊具を定量伴う点で相違しており、第Ⅱa群がより日常的な器種で構成されるとともに、第Ⅱb群が食膳具に特化した組成であったことを示している。また、第Ⅱb群については、綠釉陶器や帶金具が伴うことから、官人など有力者層の関与が窺われ、さらに製塙土器が伴う点で、やや特異なニュアンスがある。

食膳具の法量

第Ⅱb群は、個体数が少なく保留せざるを得ないことから、第Ⅱa群について述べる。須恵器の有台杯については、深身の有台杯Bが僅少で、全形を窺える個体がない。無台杯Aとした器高が通常のものについては、杯蓋と同じ口径が3段階に区分可能であり、両者がそれとの対応関係が推測できる。これに対し、須恵器無台杯Aについては、口径ではなく、身の深さで3区分される。

土師器無台杯は、口径および器高ともおおむね同じ範囲に集中しており、法量的な区分はなかったものと見られる。ただし、法量の分布は、器高1cm、口径1.5cmの範囲に分散しており、やや大雑把感がある。

胎土と混和材 第Ⅱa群の土師器については、極一部を除き多量な砂粒が多く含まれ、特に無台杯C類は大半がほぼ共通した胎土であった。また、焼成前に刻書された土器が複数含まれる事実と合わせ、無台杯C

類は、限定的な使用目的が意図された中で、同一の生地から一括的にまとめて成形された可能性が高い。これに対し、第Ⅱ b 群では、胎土に含まれる混和材のバラエティが多く、共通点などの特徴を見出せなかった。

須恵器については、A～Fまで6類に大別したが、白色粒子や白色岩粒と、黒色粒子を含むA～C類が主体を占める。その他では、微細な砂粒と褐色粒を主体に金雲母や海綿骨針を含む生焼けのD類、土師器的な胎土のE類がわずかに伴う。F類については、第Ⅱ b 群の佐渡小泊窯系須恵器として一括した。

b 音無瀬第Ⅱ a 群土器

器種構成 第Ⅱ a 群は、須恵器と土師器で構成されるが、須恵器のほとんどが食膳具であり、唯一の例外が壺口縁の破片1点(68)となっている。これに対し土師器の器種構成をみると、食膳具である無台杯が最も多いが、煮炊具である壺類も多く出土していることが、須恵器とは異なる様相として掲げることができる。

しかし、第Ⅱ a 群全体についてもう少し詳しく見ていくと、食膳具の構成比率が高い理由は、SD-10溝から出土した土器群に、食膳具が集中していた結果であり、当該溝出土の食膳具を除外した場合には、破片が多く出土している土師器煮炊具の出土比率が、相対的に高くなることは間違いない。この事実は、煮炊具の比率が高い日常的な器種構成に対し、SD-10溝出土土器群の非日常的な性格を浮き彫りにすることを意味すると言える。それは、第Ⅱ a 群を厳密に評価する場合、SD-10溝出土土器群とそれ以外を区分しなければならず、両者を個別に検討する必要が生じることになる。

また、SD-10溝出土土器群の器種構成は、そのほとんどが須恵器・土師器の食膳具であり、貯蔵具や煮炊具は僅かであるとともに、破片が出土しているに過ぎない。この破片出土という事実に注目した場合、完形率が高い食膳具との大きな相違点だけではなく、構造内で一括されている土器群にも区分が必要であることを示唆する。これは、完形率が高い食膳具が多く出土した場合、非日常的な行為の存在を示すことを意味する。さらに、これらが何らかの祭祀・儀式に伴う一括廃棄とすれば、貯蔵具と煮炊具はそれらとは異なる別個の行為、つまり破片で出土した食膳具を含む貯蔵具や煮炊具は、日常的な行為の結果、溝内に廃棄されたものであると考えられ、完形率の高い食膳具が多く出土しているという現象が認められるときすれば、それは祭祀等非日常的な行為の所産であったとすることができるのではないだろうか。したがって、廃棄された時間や場面は、両者で異なっていたことが予想されるが、ただ現段階では、両者に明確な時期差が認められないことから、日常的な生活の場において、SD-10溝の一部に非日常的な行為が執り行われていたと解釈したい。

以上のような解釈が妥当とした場合、住居あるいは用水路の管理施設の存在が想定されることになるが、隣接地点で検出されたSB-20建物跡が重要な意味を持ってくることになる。この建物跡は、検出された柱穴3基で認定されているに過ぎないが、建物の規模としては、確認調査のトレントから検出された柱穴列と組み合わせることによって、2間×3間の建物として復元される。また、出土した柱材は、大木を4分割ないし6分割し、それらを円柱状に成形したものが用いられており、その造作からすれば、簡便な施設であったとは考えにくい。ただ当該建物の用途・機能を、居住施設か、あるいは管理棟的な施設であったのかをにわかに判断できないが、この建物に常駐しない居住する人員がいたことは想定できる。その人員とは、第Ⅱ b 群に綠釉陶器とともに帶金具が伴うことからすれば、一定程度の身分を持つ官人等有力者層が想定できる。そして、刻書・墨書き土器の器面観察では、底部外面を主体に磨耗痕から数次に渡る使用が指摘されており〔村木2006〕、SD-10溝跡から出土した完形率の高い食膳具とは、祭祀的行為に寄与されるため、一定の期間SB-20建物内に保管・管理され、その後、何らかの事情により、一括的に廃棄された可能性を裏付けていると考えができる。

土師器無台杯の評価 無台杯A類は、調整が丁寧であり、胎土も精選される。また、無台杯B類についても、赤彩されていることから、日常的な食膳具という意味合いよりも、祭祀などと関連するものと考えられる。また、破片数では4~5点となって、接合に至っていないが、胎土や調整等はほぼ同じであることから、同一個体が多いと考えられ、実際は僅少な存在である。これらのことから、A類とB類はともに、やや特殊な存在とすることができるよう。

ところで、無台杯C類については、調査で出土した土器類の中で、個体数が相対的に多い。しかし、個体数が多いことを理由に、普遍的な存在であるとすることができるのであろうか。

無台杯C類の特徴と意図 無台杯C類は、器形や胎土などから、おおむね同じ特徴を持っている。これらC類の細別においては、底部外面の調整、つまりヘラ削り調整を施すC1類と、底部の切り離しが糸切りのまま未調整であることを特徴とするC2類に区分した。また、C1類については、ヘラ削りが施される範囲により、つまり底部外面全面がヘラ削りされるC1-1類と、外周をヘラ削りするのみのC1-2類に細別したが、原則的には同じものとして理解できる。

ところで、無台杯C類の特徴のひとつとして、底部外面に「井」という文字ないし記号が、焼成前に刻書されていた点が掲げられる。この刻書土器と上記分類との相關的な関係とは、刻書される個体のはほとんどがC1類に限定されていたという事実である。例外として提示される2点は、C2類で唯一刻書された1点(55)の他に、C1類でありながら「井」が刻書されない個体(65)の存在である。ただ、後者は、底部の大半が欠損して全体を窺えないことから、「井」の存在を確認できないだけという場合があり、記されていた可能性を否定できない。

したがって、「井」を刻書する場合、底部外面にヘラ削り調整を施すことを強く意識し、意図的に行っていったことを指摘できる。つまり、ヘラ削り調整も「井」の刻書もすべて焼成以前の行為であること、そして糸切り未調整のC2類を含め、胎土が共通し器形も大差ないことからも、当該無台杯が、当初から何らかの目的のため、意図的に生産されたと理解せざるを得ない。

以上のことから、音無瀬第IIa群に多く伴って出土した無台杯C類は、日常的な食膳具として焼成されたものではなく、焼成以前に刻書されていたという事実からも、非日常的行為に供するため生産された特別な食膳具であったと認定したい。したがって、音無瀬第IIa群が指し示す時期である音無瀬第IIa期において、土師器の食膳具は一般化しておらず、普遍的な存在ではなかったと判断したい。

須恵器の墨書 土師器無台杯に記された「井」は、墨書ではなく刻書であり、かつ焼成以前に刻書されていたことから、明確な使用目的のため、その意図が通じる管下の在地において、意図的に焼成されたことが明らかである。しかし、須恵器の場合、刻書された製品が皆無であったことから、生産地が刻書を可能とする管轄下の在地ではなく、他所から供給される製品であったことを如実に示している。

確認された墨書は、「井」3点(28・30・33)と「大」1点(29)である。墨書される器種とその部位は、杯蓋の上面が3個体(28~30)と、有台杯底部外面の高台内1点(33)である。この須恵器に墨書された文字ないし記号も、土師器無台杯C類と同様に「井」が多いことは、両者が何れも同じ意図を持っていたことを強く示唆している。

墨書・刻書の文字の意味 音無瀬遺跡において確認された墨書・刻書の文字ないし記号は「井」が9点と、かなり高い頻度で出土した。しかし、この「井」が文字なのか、記号であったのかの判断はできていない。また、唯一例外の文字である「大」についても、また確認調査で出土した音無瀬第IIb期に属する須恵器無台杯底部の「八」(第6図13)という墨書を含め、これらの意味・意図は不詳であり、今後の課題としたい。

2) 音無瀬第Ⅱ群土器の編年的な位置付け

a 柏崎平野の古代土器編年

研究歴史と現状 柏崎平野における古代土器の編年作業は、「古代三島郡と古代土器の様相」として検討されたことがあるが〔品田1994〕、当時の資料群とは、極めて限定的であり、奈良・平安時代を問断なくそろえることは無理な状況にあった。このような状況の中で、地域的な様相を概観する試みが可能となつた背景とは、新潟県内で進められていた古代土器編年の進展であり、「今池編年」〔坂井1984〕と「山三賀編年」〔坂井1989〕という二つの大きな研究成果が前提となっていたことは言うまでもない。

その後、新潟県の古代土器編年は、南加賀地方における古代土器編年〔田嶋1988〕によって新たな展開を迎えた。当時の北陸では、北陸古代土器研究会により各地の古代土器を実見し、互いの並行関係を見極める作業が進められ、田嶋編年を基軸とする北陸地方全般にわたる広域的な編年体系が形成された。そして、新潟県内でも田嶋編年を基軸とした比較検討や編年作業が深められ〔春日1999・笠澤2003など〕、現在では細部の位置付けや実年代比定など部分的な相違があっても、編年的な序列はほぼ確立するに至っている。

一方柏崎平野では、前掛り遺跡出土土器の検討〔品田1997〕や宮下遺跡群の成果〔伊藤2001・2002〕など、その後も古代土器編年の検討が進められていた。しかし、当該地域において、古代の集落等が増加するのは、他地域と同様に平安時代中期となる9世紀中葉以降である。したがって、得られる資料群は、V期以降の古代後期に限定せざるを得ないが、柏崎平野ではV1期以前を含む古代前期の資料は依然として少ないままとなっている。特に、7世紀代とされる土器群がほぼ皆無という実態は、現在に至っても変わつておらず、いまだ古代土器の間断なき編年は出来上がっていらない。

なお、本項で表記する時期区分や各期の呼称などについては、春日真美がまとめた編年対比表〔春日2008〕を主に用いることとする。

音無瀬第Ⅱ群の意義 今回報告した音無瀬遺跡の土器群とは、古代前期の土器群が比較的多く出土し、編年的な空白を埋める資料の一つが得られたという意味を持つ。これまでの古代前期の報告事例とは、製塩跡出土の刈羽大平遺跡例〔柏崎市教委1985b〕と、萱場遺跡の土器群〔柏崎市教委1985a〕があり、この他では戸口遺跡や井ノ町遺跡などからの出土が知られているが、遺構内一括など資料的なまとまりに欠けるものであった。このような現状の中で、国道8号柏崎バイパスで調査された箕輪遺跡からは、古代前期を含む土器類など、多くの資料群が出土している。この成果は、遺跡そのものの重要性もさることながら、柏崎平野における古代土器編年においても不可欠の存在であり、正式な報告書の刊行が大いに待たれるのである。

ただし、箕輪遺跡は、古代三島郡3郷のうち三島郷域に所在するが、柏崎平野には他に多岐郷と高家郷があり、それぞれの地域差・遺跡差を考慮した場合に課題がないわけではない。したがって、その意味では高家郷域に比定される音無瀬遺跡から、古代前期の資料群が得られた事実は、柏崎平野という地域を理解する上で、大きな意義を持つものと評価することができるのである。

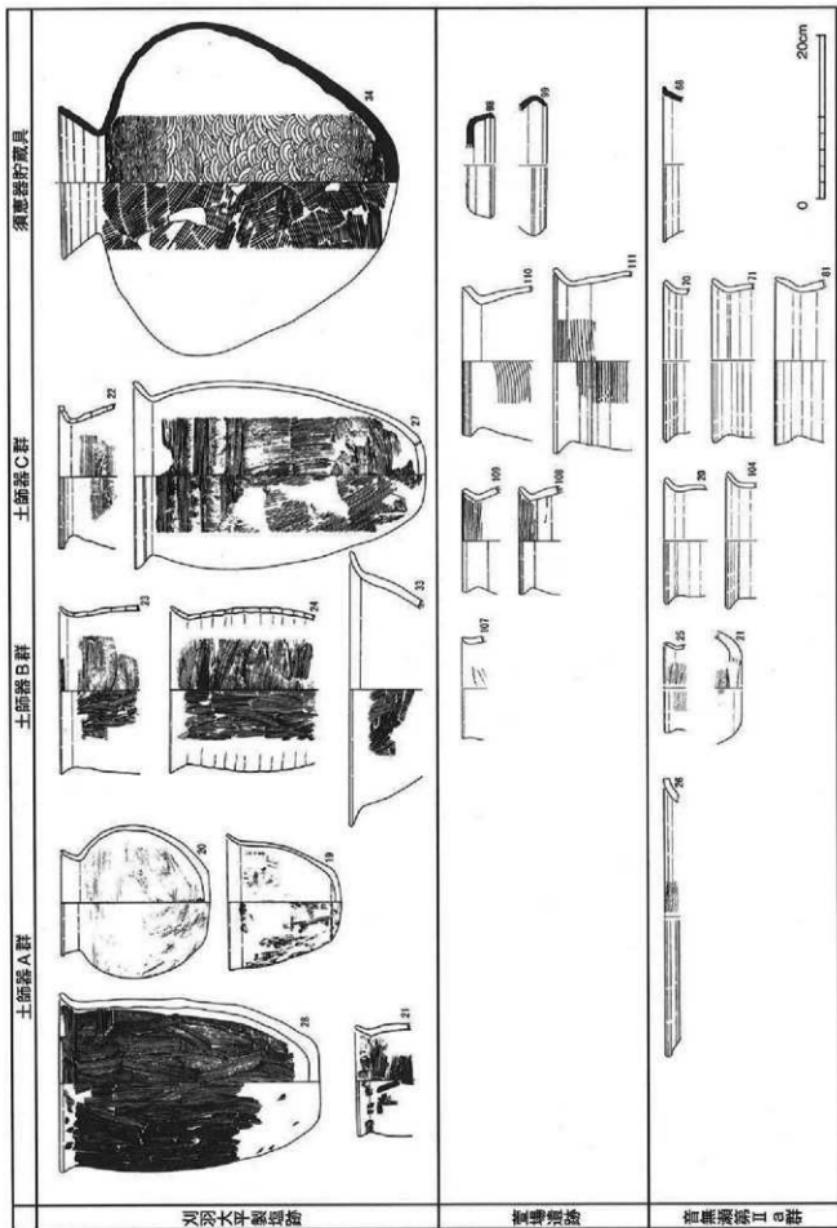
b 柏崎平野の古代前期の土器群

柏崎平野における古代前期において、ある程度一括性が保証される土器群とは、確實性にやや欠けるとしても、前述した刈羽大平遺跡の製塩跡と、萱場遺跡の2遺構から出土した二つの事例であり、今回これらに音無瀬遺跡第Ⅱa群土器が加わることとなった。これら土器群3例の編年的な序列は、第14図と第15図

須 惠 器	土師器 A群			土師器 B群			土師器 C群			土師器 D群			土師器 E群			
	(杯) 直 14	(有台杯) 15	(無台杯) 16 (赤) 17	(接 檻) 18 (赤) 19	(接 檻) 20 (赤) 21	(接 檻) 22 (赤) 23	(接 檻) 24 (赤) 25	(接 檻) 26 (赤) 27	(接 檻) 28 (赤) 29	(接 檻) 30 (赤) 31	(接 檻) 32 (赤) 33	(接 檻) 34 (赤) 35	(接 檻) 36 (赤) 37	(接 檻) 38 (赤) 39	(接 檻) 40 (赤) 41	
刈羽大平製造跡																
直場遺跡	14	15	16 (赤) 17	18 (赤) 19	19 (赤) 20	20 (赤) 21	21 (赤) 22	22 (赤) 23	23 (赤) 24	24 (赤) 25	25 (赤) 26	26 (赤) 27	27 (赤) 28	28 (赤) 29	29 (赤) 30	
直場遺跡	14	15	16 (赤) 17	18 (赤) 19	19 (赤) 20	20 (赤) 21	21 (赤) 22	22 (赤) 23	23 (赤) 24	24 (赤) 25	25 (赤) 26	26 (赤) 27	27 (赤) 28	28 (赤) 29	29 (赤) 30	
直場無瀬第 II 3 群	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
第 II 4 群	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62

第14図 柏崎平野の前期古代土器群(食器具)

第15図 柏崎平野の前期古代土器群（煮炊具・貯蔵具）



に示すような変遷観で捉えることができる。

刈羽大平製塩跡の土器群〔柏崎市教委1985 b〕 遺跡の位置は、多岐郷の海浜部に該当するものと考えられるが、当該期に限定すれば製塩という生業が行われた作業場であり、居住を主とする集落ではないという特異性を持っている。

まず、当該土器群は、明確な遺構から出土したわけではなく、製塩炉周辺から製塩土器とともに出土したもので、いわば包含層出土と変わりない。しかし、塩作りという一過性の作業に伴って、製塩土器とともに廃棄されていたことから、時期的に限定されるものと考えている。また、これら製塩跡は、その直上から厚い砂丘砂に覆われており、後世の混入等を阻んでいたことが窺われる。

土器群の特徴は、食膳具と煮炊具、貯蔵具がそろっていること、特に煮炊具が比較的豊富であった点が掲げられる。これは、日常の煮炊きを可能とするもので、一通りの食生活を営みながら、製塩作業を行っていたことを示している。もうひとつの特徴とは、須恵器が貯蔵具である大甕1点（34）に限定され、その他は地域差などを包含する土師器で占められていたことにある。特に、食膳具に須恵器杯類が皆無であり、他遺跡の資料群との対比をわかりにくくするものであった。

また、主体を占めた土師器については、古墳時代以来の伝統的な非ロクロ成形によるもの（土師器A群）と、須恵器の製作技法に共通するロクロ成形によるもの（土師器C群）、そして両者の中間的なもの（土師器B群）に区分することができる。土師器B群については、食膳具と煮炊具で異なり、食膳具では土師器C群の胎土と同じく砂粒を多く含み、ロクロ成形がなされるが、焼成は土師器A群的な技法で仕上げられている。これに対し煮炊具の甕は、胎土そのものは土師器C群に共通するが、輪積みによる非ロクロ成形や、ハケによる調整も土師器A群の技法が踏襲されており、中間的といつてもその中身が異なっていた。土師器食膳具の器種は、皿形の無台杯と鉢形の丸い椀に限定され、A群は内黒の椀のみ、C群は無台杯のみで構成されるが、B群では無台杯と椀の両者がそろっており、土師器B群が中間的な存在であることを端的に示すとともに、無台杯という器種が、須恵器の導入と大きく関わっていることも意味しているようである。また、赤彩された椀が出土しており、これを便宜的に土師器D群としておきたい。

煮炊具については、土師器C群が長甕に限定されるが、B群では長甕とともに鍋が組成し2器種となる限定的な状況が窺える。これらに対し、A群は、長甕以外にも、小甕と鉢や壺という多器種が組成しており、器種のバラエティが多い特徴を看取ることができる。

董場遺跡の土器群〔柏崎市教委1985 a〕 遺跡そのものは、吉井遺跡群の一つに数えられ、多岐郷南西部の一画に位置するものと考えられる。当該土器群は、S D - 7とした溝遺構と、S I - 8とした竪穴遺構から出土した土器群で構成される。しかし、出土量は少なく、また破片資料が主体であることから、土器群の様相は必ずしも明かでない。

土器群の特徴としては、食膳具の主体を須恵器とし、杯蓋、有台杯、無台杯のほかに稜椀が出土したが、土師器ではB群の椀類が少量伴うのみである。煮炊具では、C群としたロクロ成形が主体となり、長甕のほかに小甕が組成する。貯蔵具は須恵器のみとなるが、壺蓋破片が出土しているだけであり、詳細は不明とせざるを得ない。検討すべき資料に制約があるため、土器群の全体像は掴めないが、見るべき土師器杯類が伴わないことと、煮炊具は土師器C群が主体となり、A・B群が極めて限定的な存在へと縮小されていることが窺われる。

音無瀬第IIa群土器 音無瀬遺跡は、すでに本文に述べたように、鶴石川中流域から長島川流域に北定される高家郷域の遺跡と考えられ、前述の2遺跡とは郷域を異にする。また、古代北陸道が通らない内陸

に位置しており、三崎郷や多岐郷とは異なる地域差も考慮する必要がある。また、発掘された調査区が狭く、出土資料の大半が溝から出土しているため、器種構成やその量比については、注意を要することになる。

まず、土器群全体の器種構成を見ると、食膳具が大半を占め、煮炊具は定量伴うが貯蔵具については極めて僅少となっている。その理由としては、調査区が日常的な集落区域ではなく、ややはすれに位置していたことを考慮する必要があるかもしれない。特に、食膳具の出土量は他を圧倒しており、組成そのものの特異性を示している。この点については、前項で述べたように、非日常的な行為が伴っていた結果である可能性が高く、当該土器群の様相については、日常的な土器群との直接的な対比は注意を要することになる。

須恵器の食膳具は、杯蓋、有台杯、無台杯で構成され、胎土や焼成、底部の切離し技法等から大きく4類に分類され（第12・13図）、複数の生産地から供給されていたことが窺われる。これに対し土師器は、胎土や調整等が共通する無台杯C類としたものが大半を占め、その他に丁寧なミガキ調整を施す無台杯A類や赤彩土師器とした無台杯B類が僅かに伴うものであった。無台杯C類は、土師器C群に属するが、後者の無台杯A・B類は、土師器D群として一括しておきたい。

煮炊具は、萱場遺跡と同じく土師器C群としたロクロ成形の長甕と小甕を主体とするが、B群となる個体も若干伴っている（25・69）。鍋については、土師器A群ないしB群の可能性があるが、口縁部の小破片のため、断定は避けたい。特に、土師器A群との判断については、出土量が僅少な萱場遺跡でその存在が不明確であることもあり、この点については地域差を考慮する必要があるかも知れない。

貯蔵具については、壺口縁部破片1点のみであり、詳細は不明とせざるを得ない。

音無瀬第II b群土器 当該土器群は、時期的には古代後期に下るものであるが、音無瀬遺跡から出土していること、そして前期から後期への流れを窺う意味で、取上げることとした。遺跡からの出土量そのものは僅少であり、煮炊具や貯蔵具はほとんど確認されていない。このため、第14図には、食膳具のみを掲載した。須恵器食膳具は、すべて佐渡小泊窯系製品であり、有台杯と無台杯が少量出土した。土師器食膳具については、土師器C群の無台碗が組成し、僅かながら土師器D群とする内黒の碗が伴い、この他に縁釉の瓶や製塩土器破片数点が確認されている。

c 柏崎平野の前期古代土器の変遷

柏崎平野における古代前期の土器群は、まとまった事例が少なく、また出土量も決して多くない。このような限られた状況の中ではあるが、土器群の変化や変遷について、若干の検討を試みておきたい。

なお、検討に際しては、用途・機能別に行なうが、食膳具は須恵器と土師器に区分したい。

須恵器食膳具 刈羽大平製塩跡では、須恵器食膳具が出土しておらず、具体的な様相は明らかにし得ない。ただし、土師器C群とした無台杯は、須恵器の模倣であることから、形態等については、これらを参考とすることになるであろうが、必ずしも忠実に模倣しているわけではなく、単純な対比は難しい。

本項では、実際に須恵器食膳具が出土した萱場遺跡と音無瀬第II a群土器について比較し、検討を試みたい。まず、杯蓋については、萱場例に完形品がないため、全体的な対比はできないが、宝珠部分を見ると、萱場遺跡例の直径が一回りほど大きく、また頂部のナデを強くし、頂点中央が尖るように突出していることが看取できる。また、口径は、確實な萱場例がないため明らかでないが、音無瀬第II a群が相対的に小さくなっているように見える。この点について有台杯を窺うと、やはり萱場例のほうが大きくなってしまい、杯蓋の口径との相関関係が認められる。さらに、無台杯の口径もやや大きくなってしまい、音無瀬第II a群では、有台杯と同様に萱場遺跡の段階より法量が縮小傾向にあることが明らかである。有台杯の内、

身が深くなるものについては、音無瀬第Ⅱa群において僅かに認められるが(23)、萱場では不明である。

また、音無瀬第Ⅱa群の須恵器食膳具とは、器形や胎土、あるいは底部の切り離しが、ヘラ切りを主体としつつも、糸切り技法が僅かに含まれているなど多種多様であり、在地産のほかに古志郡各地や頸城郡から持ち込まれるなど、供給地が多様化していた可能性が高い。萱場遺跡例については、個体数が少なく詳細は今後の課題とせざるを得ない。

なお、音無瀬第Ⅱb群については、佐渡小泊窯系として抽出したものを掲載した。

土師器食膳具 まず全体的な傾向として、土師器A群・B群・C群について窺うと、刈羽大平製塙跡では3群すべてを確認できる。萱場遺跡例では、土師器食膳具がほとんど伴わないことから、実態は不明とせざるを得ないが、土師器A群が欠落していたとしても、B群は残存している可能性がある。しかし、音無瀬第Ⅱa群に至ると、B群の存在も不明確となり、C群が主体であることから、土師器はC群へ統一されていく大きな流れを看取ることができる。

また、土師器A群・B群・C群の器種については、鉢に近い形状を呈する深身の無台椀と、皿形態を呈する一般的な無台杯、そして一般的な無台椀の3器種が確認できる。これらのうち、鉢形態の無台椀は、萱場遺跡でも小破片が出土しているが、刈羽大平製塙跡に事例が多く、音無瀬遺跡で確認できないことから、古墳時代的な要素をたぶんに含む器種と見られ、特に刈羽大平製塙跡例(15)については、高杯の杯部分との関連が想定される。皿形態を呈する無台杯は、刈羽大平遺跡の土師器B群とC群、および音無瀬第Ⅱa群にそれぞれまとまりがある。刈羽大平製塙跡の土師器B群は、C群の模倣であるが、C群そのものは、須恵器をモデルとしたものである。また、音無瀬第Ⅱa群の無台杯C類も、須恵器の模倣であり、皿形態の無台杯とは、須恵器を模倣することで形成された器種として理解される。したがって、刈羽大平製塙跡や音無瀬第Ⅱa群の時期においては、土師器食膳具の形態などが、縦の時間軸で独自に変遷するのではなく、横軸となる同時期の須恵器の形態に対応していると見なすことができる。

これらに対し、一般的とした無台椀は、古代後期に至って成立する器種であり、当該無台椀の出現は、食膳具の変遷を見た場合の大きな画期を意味することになる。特に、古代前期の無台杯とは異なり、須恵器食膳具が衰退する中で、土師器食膳具として独立を果たし、普遍的な存在として確立されたものである。したがって、須恵器の変遷に対応することなく、時間軸に沿って独自に変化、変遷を遂げていくことになり、古代前期との大きな差異として指摘できる。

ところで、上記では言及しなかった土師器D群は、黒色土器や赤彩土器などを便宜的に一括したものである。まず赤彩土器については、刈羽大平製塙跡と音無瀬第Ⅱa群に伴っているが、両者とも日常的な食膳具というよりも、儀礼等に際し用いられたと考えられる。ただし、前者は古墳時代的な鉢形態の無台椀であることに対し、後者は同時期の須恵器を模倣したものであり、同じ赤彩であっても器種が異なっている。また、黒色土器のうち、内黒とされる個体も、刈羽大平製塙跡と、音無瀬第Ⅱb群に少量確認される。これも、前者は古墳時代的な鉢形態の無台椀であることに対し、後者は土師器食膳具として普遍化した無台椀であり、これらの器種も異なることから、両者に通じる脈絡は基本的になく、古代前期の段階では、それぞれが変遷をたどる状況は希薄であったと考えられる。

煮炊具 煮炊具は、原則として土師器で占められるが、器種としては甕類・鉢類・鍋類などがある。まず、全体的な動向としては、刈羽大平製塙跡では、土師器のA群・B群・C群の3群がすべてそろっているが、萱場遺跡段階でA群が欠落、B群もわずかながら残存しているが、大半をC群が占めるようになっており、食膳具の場合と同様に推移している。形態的な変遷については、大半が破片資料という制約が

あって、全体を見極められない。このため、口縁部形態に注目し、変化の一端をまとめたい。

まず、刈羽大平製塙跡の状況を壺類から窺うと、土師器A群の口縁部は、円筒状を呈して大きく張らない胴部から短く外反し、その度合いは緩やかである。土師器B群の場合は、胴部上半が若干張りを強くするが、口縁部の外反はA群に近似している。土師器C群では、胴部上半の張りがさらに強くなり、肩部分が明瞭になるとともに、頸部をくの字状に屈曲させ、口縁部が直線的に外反するものとなっている。これら3群を比較した場合、B群が如何に中間的な存在であるのかが理解できる。

壹場遺跡では、C群が主体を占めることから、「く」の字口縁の壺類が多くなっている。口縁部の変化としては、口唇部の端部が、刈羽大平では丸く仕上げられ、面取りが施されるものが少なくなっていたが、壹場遺跡例では面取りが施されるようになるとともに、端部が上方へつまみ上げられるような変化が窺われる。

音無瀬第II a群に至ると、土師器C群に見られる変化として、口唇部の端部に施される面取りから、やや鋭さが弱まること、頸部の「く」の字が形骸化して緩やかになり、さらに口縁部が受口状に変化するものの(81)が現れていることを指摘できる。

貯蔵具 貯蔵具については、各土器群に伴う個体が極端に少なく、変遷を追える出土量がないことから、とりあえず今回は保留とし、状況のみ概観することとした。

貯蔵具の主体は須恵器が一般的であるが、刈羽大平製塙跡の土師器A群に壺(20)の存在を確認できる。土師器A群は、須恵器出現以前の伝統的な存在であり、当然のこととして貯蔵具も製作されていたことから、刈羽大平製塙跡の時期までは、その名残として壺が存在したと考えられる。しかし、土師器C群は、ロクロ成形であることから明らかなように、須恵器の存在が前提であり、土師器の煮炊具と須恵器の貯蔵具という棲み分けが確立していたものと考えられる。したがって、壹場遺跡段階以降、土師器A群は姿を消すとともに、土師器C群が主体となることによって両者の棲み分けが確立し、貯蔵具は須恵器が主体となったとすることができる。

d 音無瀬第II群土器の編年的位置付け

音無瀬遺跡から出土した古代土器は、第II a群と第II b群に大別し、それぞれ時期が異なるものとして捉え、前項にて刈羽大平製塙跡や壹場遺跡例と対比しつつ、その変遷を述べた。本項では、音無瀬遺跡第II群土器について、それぞれの編年的な位置付けを検討することとした。

ただし、柏崎平野の資料では、同時期とされる一括性の高い土器群がほとんど把握できていないことから、主に県内の他遺跡の事例と対比したい。また、編年的な序列については、春日真美がまとめた「編年軸の設定」〔春日2008〕における編年対応表を中心に、これまでに集積された編年的な成果を大いに参考にすることとした。

音無瀬第II a群 まず、音無瀬第II a群と類似した土器様相を持つ事例として、長岡市下ノ西遺跡SE201の土器群〔和島村教委1998〕がある。当該土器群の組成は、須恵器食膳具を主体とするが、土師器食膳具も比較的多く伴っている。土師器食膳具の器種は、音無瀬遺跡と同様に椀ではなく無台杯で占められ、「須恵器のそれと器形・製作技法が共通するが、酸化炎で焼成されたやや軟質のもの」〔和島村教委前掲〕とされていることから、不足する須恵器食膳具を補完するため、在地で焼成された可能性が高いと見られる。また、須恵器食膳具には、佐渡小泊窯系の無台杯が伴うこと、また土師器煮炊具である壺類の口縁部が、明らかに受口形となっており、音無瀬第II a群より新しくなることが明らかである。下ノ西遺跡SE201の編年的な位置付けは、V1期とされていることから〔春日2001〕、佐渡小泊窯系の須恵器を伴わない

音無瀬第Ⅱa群は、Ⅳ期以前に位置付けることが妥当である。

次に、音無瀬第Ⅱa群以前に位置付けた壹場遺跡の土器群について検討したい。まず、須恵器無台杯(100・101)は、底部に厚みがあり、立ち上がり部分が丸みを帯びるなどの特徴を有するが、これらは上越市今池遺跡SK21A・B〔新潟県教委1984〕などの無台杯に近似する。また、煮炊具である甕口縁部についてみると、口唇部が面取りされ、端部を摘み上げるような形状は、上越市木崎山遺跡の第6号・第8号竪穴とされる住居跡〔新潟県教委1992〕から出土した甕口縁部と共通している。これらの時期については、おおむねⅣ2期に対比されており、壹場遺跡例の時期を大まかに規定するものと判断される。ただし、対比可能な資料が僅少であり、詳細は今後の課題とせざるを得ないであろうが、これらの状況からすれば、壹場遺跡例に後続する音無瀬第Ⅱa群の時期は、おおむねⅣ3期に比定できるものと考えたい。

音無瀬第Ⅱb群 当該土器群は、出土量が少なく、また遺構一括的なまとまりに欠け、さらに食膳具には限定されているといった事情から、時期を特定するには制約が強く、ある程度の時期幅を想定する必要もありそうである。しかし、佐渡小泊窯系の須恵器食膳具が伴うこと、またその有台杯(84)の形状からすれば、おおむねⅤ期に限定される。さらに、Ⅳ3期とした第Ⅱa群との形態差からすれば、一段階程度の断絶が想定されることから、これら土器群については、Ⅴ2期を主体とした時期に比定できるものと判断したい。

e まとめと今後の課題

さて、柏崎平野における古代土器の変遷等について、主に前期を中心に述べてきたところであるが、本項ではまとめの意味を込め、幾つかの課題を述べてみたい。

まず、刈羽大平製塙跡出土土器群についてである。当該土器群は、本地域において、これに勝る資料がないことから、標準的な土器群として用いている。近年、相前後する時期の遺跡が県内でも調査され、また報告されるに及んで、該期の土器様相がかなり明確になってきた。その結果、明らかになった土器様相と刈羽大平製塙跡の土器群を対比したとき、違和感が生じてきたことも事実である。刈羽大平製塙跡の土器群は、大きく幅を見積もってもⅡ期からⅢ期の幅に収まるに間違いない。しかし、古墳時代的な様相を残すとした土師器A群は、Ⅰ期に編年される一之口遺跡東地区〔新潟県教委1994〕や、Ⅱ期とされる上越市津倉田遺跡〔上越市教委1999〕の遺構資料に認められない。また、Ⅲ期からⅣ期に対比される遺構資料が出土した上越市木崎山遺跡〔新潟県教委1992〕や延命寺遺跡〔新潟県教委2008〕においても、該当する土器は確認できない。むしろ、富山県東部の東江上遺跡の土器群〔上市町教委1982〕と親縁性が強く、クロ土師器である土師器C群の出現時期と絡め、新潟県域で普遍的な存在としてよいのか、再吟味が必要を感じる。

また、音無瀬遺跡の古代土器について、第Ⅱa群をⅣ3期に、また第Ⅱb群をⅤ2期に比定したが、このことにより両者の間が不連続となり、空白期を設けざるを得なくなった。この状況は、遺跡を理解するための土器情報として重要な意味を持つであろう。しかし、柏崎平野の古代集落等では、Ⅴ2期以降に多くなってもそれ以前は少なく、音無瀬遺跡からⅣ3期の土器群が得られたことによって、その隙間の一部が埋められたとしても、Ⅴ1期という時期は、未だ不明確となっている。第Ⅱa群は、甕口縁部の形状から、西ノ下遺跡SE201よりも古く、Ⅳ期の範囲に収まることは確かであろうが、三嶋郡でも北陸道から外れ、山間に位置する高家郷城という地理的な環境から、小泊系須恵器が欠落することも考慮する必要があり、これらについても今後の課題として指摘しておきたい。

この他の課題としては、一括性の高い土器群が少ないという実態の克服であり、特に、箕輪遺跡の調査成果は、今後の研究動向に与える影響は大きく、遺跡・遺構の評価とともに、大いに期待したい。

2 音無瀬遺跡からみた地域史と課題 一調査のまとめにかえて一

調査成果の総括 今回の発掘調査で確認された遺構は、水路と考えられる溝跡群と、建物跡の一部であった。遺構の主体的時期は、第Ⅱa群土器が春日編年のIV3期に比定されることから、奈良時代末期から平安時代初期の西暦800年前後と、第Ⅱb群が示す9世紀前葉までというが時間幅が与えられ、奈良時代末から平安時代前期に相当する。また、注目される遺物としては、「井」と記され食膳具が、最古となるS D-10溝から多く出土したことがあり、土師器への刻書6個体、須恵器への墨書き3個体が確認された。これらは、水に関わる儀礼に使用された後、水路内に廃棄されたと考えられる。

水路とされる溝跡の性格は、『白川風土記』に記された養水「オトナセ川」の前身的な存在である可能性が高く、田を潤す用水路と考えられる。この用水路は、現在、深沢川上流に設けられた深沢頭首工の中堰で取水し、右岸の市道に沿うルートに整備され、今も現役で音無瀬に広がる水田域を潤しているが、水利に乏しい音無瀬の水田にとって不可欠の存在であったことは間違いない。

水路群の北側には、2間×3間の掘立柱建物跡1棟が確認されている。その機能や用途について確証は得られていないが、儀礼用の食膳具類を保管していた可能性があり、何らかの管理施設であることを否定できない。しかし、音無瀬第Ⅱa群土器は、煮炊具である壺類が比較的多く、日常的な煮炊きが行われていたことを示している。また、音無瀬第Ⅱb群土器に伴って銅製の帶金具（蛇尾）1点が出土していることから、儀礼を取り仕切る人の存在として、官人等有力層の関わりを想定できる。ただし、当該土器群には、煮炊具がほとんどなく、食膳具が主体であったことから、日常的な生活の場とは考えにくくなっている。

しかし、平成13年度の発掘調査では、隣接地点からさらに2棟の建物跡が検出されており、管理施設に特化するのではなく、集落的な要素も強く、隣接する水田を耕作していた人々の住まいであったなど、時期的な変遷も想定できる。これらの点については、遺跡の全体像がまだ明らかにされているわけではなく、これらについては今後の課題として後世に託したい。

古代音無瀬遺跡の歴史的背景 古代音無瀬遺跡の年代観は、三嶋郡が古志郡から分離・独立したとされる9世紀初頭という時期〔米沢1980〕にまさしく該当し、大きな動きが生じた時期でもあった。このような地方政治の動向が、在地における遺跡の調査結果と直接的に結びつくことは、たとえあったとしても確かな痕跡としては残りにくいであろう。しかし、音無瀬遺跡ではちょうどその頃、最も古い溝、つまり水路が開削されており、当然その下流には水田が開かれたはずである。このような在地での活気、盛り上がる雰囲気を感じざるを得ない。

また、三嶋郡が古志郡から独立した経緯、あるいはその理由を示す史料が存在しないことから、これらを明らかにすることは極めて難しいであろう。しかし、近年実施されている発掘調査では、大規模な製鉄関連遺跡の存在が明らかとなっており、分離・独立の背景としてすでに指摘されている〔品田1994〕。

柏崎平野における古代製鉄遺跡の存在は、1985年に発見された田尻1号木炭窯を端緒とし〔品田1989〕、その後藤橋東遺跡群が発見されると、柏崎平野南部の丘陵地帯に古代のハイテク基地とも呼べる大規模な製鉄遺跡の存在が想定されるようになった〔品田1993b〕。そして、軽井川南遺跡群で実施された発掘調査により、越後最大規模の製鉄コンビナートの存在が証明されるに至ったのである。これら製鉄遺跡群の展開については、調査データの分析をさらに進める必要があるが、遅くとも8世紀後半に始まり、9世紀中頃に製鉄炉の型式が長方形箱型炉から半地下式堅型炉へ、また9世紀末頃～10世紀初頭までに木炭窯が半地

下式から地下式へと転換するなど(品田2010)、三嶋郡の時代以降急速に展開しているように見受けられる。三嶋郡の分置・独立と古代製鉄業との関係、またこれらと音無瀬における新田開発について、今のところ互いに結び付ける事象はない。しかし、ある程度の推測が許されるならば、新たに任命された三嶋郡司たちは、これら製鉄業を支え発展させるため、食料の確保や経済的基盤の整備を企図したはずであり、郡内各所における新田開発は、重要な施策のひとつとなったのではないだろうか。

音無瀬遺跡で明らかにされた歴史的事実は、西暦800年頃、音無瀬の地を水田に開発し、用水路を開削して、深沢川に堰を築いて水を引き、新たな耕地を潤していたことにある。これは当時においても、新田開発は大事業であり、現在行われているは場整備事業同様、行政の関与がなければなし得ない。西暦800年頃の時代であればなおさら、官主導、特に郡司の介入があつて当然であり、帶金具の出土がこれを裏付けている。そして、新たに開削された用水路が、新たな水田を潤していることに、特段の思いを込め何らかの儀礼を行っていたとの想定には、ある程度妥当性があるよう思う。

三嶋郡の須恵器事情 音無瀬遺跡から出土した土器群を一瞥すると、須恵器貯蔵具、特に大壺が極端に少ないと氣付く。上越市今池遺跡におけるⅣ期の資料群と比べてみても、須恵器貯蔵具は、やはり少ないのではないであろうか。今のところ箕輪遺跡の状況が明らかにされていないことから確かなことはわからないが、このような実態は、柏崎平野という地域的な傾向の一つとして捉えられるのかもしれない。その背景には、在地における須恵器生産の事情があったと考えられる。

Ⅳ期という時期、柏崎平野一帯は未だ古志郡域であったが、古志郡における須恵器生産の拠点は、島崎川流域の西古志窯跡群にあった。柏崎平野とは、別山川の分水嶺を越えた地にあり、北陸道を通じて往来は確保されていたと考えられる。しかし、三嶋郡は、9世紀初頭に古志郡から分置・独立することになる。当時の須恵器生産は、一郡一窯といった在地における生産体制のピークが過ぎており、三嶋郡としても新たな生産拠点の構築には至らなかつたものと考えられ、現在知られている窯跡は、兩池古窯跡〔柏崎市教委2000〕1基と、刈羽村の枯木古窯跡の2件だけである。

これら窯跡2件の所在地は、兩池古窯跡が三嶋郡に、また枯木古窯跡は多岐郡に属するが、音無瀬遺跡が所在する高家郷では今のところ確認されていない。唯一発掘調査がなされた兩池古窯跡の製品を見ると、食膳具が極端に少ないと対照的に、そのほとんどが貯蔵具で、特に大壺が多くなっており、三嶋郡域では須恵器貯蔵具の不足を補うための努力として、須恵器生産を行っていたようである。枯木古窯跡については、その実態が不明であるが、焼成された製品が兩池古窯跡と同じであった可能性は十分予測できる。

このような在地における須恵器生産体制の脆弱さは、大型品である大壺などの流通が滞りがちとなり、小型品で流通しやすい須恵器食膳具も、生産地が多岐に分かれるという事態を生じた可能性が高い。高家郷では、須恵器窯が確認されていないことから、特に顕著であったと推測されるが、この状況は、須恵器貯蔵具の僅少さと、須恵器食膳具の胎土などが多岐にわたること、さらに供給不足を在地生産可能な土師器で補完していたという土器組成など、音無瀬遺跡における須恵器事情に合致するのである。

今後の課題 音無瀬遺跡の調査成果は、柏崎市北条地区における古代史の一端を知る大きなきっかけとなり、古代三嶋郡にも言及することができた。しかし、今回提示した調査データの評価・解釈は、一つの仮説に過ぎない。また、発掘調査面積は少なく、また他遺跡の動向が不明なことから、未だ点での理解に過ぎないだろう。近接する南条遺跡群の成果〔柏崎市教委2011b〕をあわせて、地域史を構築していくためのデータは不足している。今後は、地域の文化財にも目を向け、古代史だけではない地域全体の歴史を見極めるという視点だけは堅持し、さらなる調査、情報の収集に努めることとしたい。

引用・参考文献

- 相沢 央・小林昌二 2000 「柏崎市箕輪遺跡出土木簡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報(平成11年度)』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤啓雄 2001 「宮之下遺跡群における古代の土器様相」『宮之下遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 伊藤啓雄 2002 「柏崎平野における平安時代前期の土器様相—組成からみた9~10世紀の土器編年—」『新潟考古学談話会会報』第25号 新潟考古学談話会
- 宇佐美篤美・坂井秀介 1987 「龜ノ倉跡跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』柏崎市史編さん委員会編
- 荻野正博 1983 「越後国中世在闇の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 荻野正博 1986 「在闇と国衙領」『新潟県史(通史編1 原始・古代)』新潟県
- 柏崎市教育委員会 1983 『国光の塚群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第3)
- 柏崎市教育委員会 1985 a 『吉井遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4)
- 柏崎市教育委員会 1985 b 『刈羽大平・小丸山』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5)
- 柏崎市教育委員会 1990 『吉井遺跡群II』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13)
- 柏崎市教育委員会 1995 『藤原東遺跡群—写真でつづる発掘調査の概要—』(柏崎市埋蔵文化財調査図録第1集)
- 柏崎市教育委員会 1996 a 『田塙山遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集)
- 柏崎市教育委員会 1996 b 『音無遺跡』『柏崎市の遺跡V』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22集)
- 柏崎市教育委員会 1997 「前振り」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集)
- 柏崎市教育委員会 1999 a 『国光の二ツ塚』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第30集)
- 柏崎市教育委員会 2000 「雨畠古窯跡」『奥山東遺跡群I』(柏崎市埋蔵文化財長査報告書第34集)
- 柏崎市教育委員会 2001 『宮之下遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 柏崎市教育委員会 2003 「下川原」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第42集)
- 柏崎市教育委員会 2006 「南条遺跡群(第1次)」『柏崎市の遺跡XV』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第49集)
- 柏崎市教育委員会 2007 「南条遺跡群(第2次)」『柏崎市の遺跡XVI』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第51集)
- 柏崎市教育委員会 2008 a 『坂田遺跡群I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集)
- 柏崎市教育委員会 2008 b 『江ノ下』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集)
- 柏崎市教育委員会 2008 c 『よみがえった古代の製鉄—柏崎市経川南遺跡群—』(柏崎の遺跡シリーズ第1集)
- 柏崎市教育委員会 2008 d 『南条遺跡群(第3次)』『南条遺跡群(第4次)』『柏崎市の遺跡XVII』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第54集)
- 柏崎市教育委員会 2011 a 『角野』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第63集)
- 柏崎市教育委員会 2011 b 『南条遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第64集)
- 柏崎市史編さん委員会編 1982 『柏崎市史資料集 考古篇2 考古資料(写真図版)』
- 柏崎市史編さん委員会編 1987 a 『柏崎市史資料集 考古篇1 考古資料(図・拓本・説明)』
- 柏崎市史編さん委員会編 1987 b 『柏崎市史資料集 古代・中世篇 柏崎の古代中世史料』
- 柏崎市立図書館編 1977 広瀬典原著『白河風土記—越後国刈羽郡之部—』
- 春日真美 1999 「土器編年と地紀生」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真美 2001 「和島・出雲崎地蔵における7世紀から10世紀の土器の変遷」『国道116号埋蔵文化財発掘調査報告書(拂子谷窯跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集)
- 春日真美 2008 「編年軸の設定」『一般国道8号米魚川東バイパス関係発掘調査報告書III(六反田南遺跡・前波南遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集)
- 金子拓男 1990 「三島郡の成立」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市
- 上市町教育委員会 1982 「東江ノ上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告(上市町土器・石器網)』
- 刈羽村教育委員会 1995 『祐木A遺跡発掘調査報告書』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集)
- 刈羽村教育委員会 1999 『弘川遺跡発掘調査報告書』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第4集)

- 坂井秀弥 1983 「歴史的背景と栗原遺跡の性格」『栗原遺跡第一回発掘調査報告』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上新ハイバス関係遺跡発掘調査報告書I (今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集) 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「奈良・平安時代の土器」『新新ハイバス関係遺跡発掘調査報告書 (山三賀II遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集) 新潟県教育委員会
- 猪澤正史 2003 「第5章古代 第1節時代概説」『上越市史資料編2 考古』上越市
- 品田高志 1989 「柏崎市・田尻1号木炭窯」『新潟考古学談話会報』第3号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1993a 「馬場・天神殿遺跡の中世集落について」『新潟県考古学会第5回大会研究発表要旨』新潟県考古学会
- 品田高志 1993b 「柏崎平野の古代鉄生産韓城・藤原町遺跡群の発見とその意義」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1994 「古代三島郡と古代土器の様相—柏崎平野における古代史理解に向けて—」『柏崎市立博物館館報』第8号 柏崎市立博物館
- 品田高志 1997 「前掛り遺跡における古代土器の様相」『前掛り—新潟県柏崎市・前掛り遺跡発掘調査報告書I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集) 柏崎市教育委員会
- 品田高志 2004 「越後羽佐橋花の中世古道と町並み」『中世のみちを探る』高志書院
- 品田高志 2008 「南条遺跡群の変遷と展開—調査のまとめにかえて—」『柏崎市の遺跡XVI』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第54集) 柏崎市教育委員会
- 品田高志 2010 「X下ヶ久保E遺跡 5まとめ」『経井川南遺跡群I—新潟県柏崎市経井川南遺跡群発掘調査報告書I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第59集) 柏崎市教育委員会
- 上越市教育委員会 1999 「上千原地区は湯野瀬間関遺跡発掘調査報告書 (津倉田遺跡)」
- 田朝明人 1988 「古代土器輪軸車輪の設定—加賀地域にみる7世紀から11世紀中期にかけての土器群の推移—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 新潟県教育委員会 1984 『上申堀縦バース関係遺跡発掘調査報告書I (今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集) 新潟県教育委員会
- 新潟県教育委員会 1992 『北陸自動車道関係発掘調査報告書 (大崎山遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集)
- 新潟県教育委員会 1994 『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV (一之口遺跡東側)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集)
- 新潟県教育委員会 2002 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書I (箕輪遺跡I)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集)
- 新潟県教育委員会 2003 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書II (下沖北遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集)
- 新潟県教育委員会 2005 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書III (東原町遺跡・下沖北遺跡II)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集)
- 新潟県教育委員会 2008 『一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書IV (延命寺遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集)
- 西山町教育委員会 2001a 「畠田遺跡発掘調査報告書」(西山町文化財調査報告書第5集)
- 西山町教育委員会 2001b 「井ノ町遺跡発掘調査報告書」(西山町文化財調査報告書第6集)
- 西山町教育委員会 2002 「宮ノ前遺跡発掘調査報告書」(西山町文化財調査報告書第7集)
- 村木志津 2004 「柏崎市音無瀬遺跡出土の刻書・墨書き土器について」第11回新潟歴史土器検討会レジュメ
- 村山義二 1990 「中世における柏崎市成『柏崎市史(上巻)』柏崎市史編さん委員会編 柏崎市
- 米沢 康 1976 「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第28巻5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32巻6号 信濃史学会
- 和島村教育委員会 1994 『八幡林遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第3集)
- 和島村教育委員会 1995 『下ノ西遺跡—出土木簡を中心として—』(和島村埋蔵文化財調査報告書第7集)
- 和島村教育委員会 2003 『下ノ西遺跡IV』(和島村埋蔵文化財調査報告書第14集)
- 和島村教育委員会 2005 『八幡林遺跡IV』(和島村埋蔵文化財調査報告書第16集)

表1 音樂遺物(石器、土器、陶器、石器(石器)觀察表)

管 番 号	通称名	出土位置・地 理	判 別	器 形	分類	口沿 径幅	底幅	腹幅	腰幅	高 度	調 査 成 形	色 調	土 色	施 記	被 覆	付 合 部 位	外 縁	内 縁	内 底	外 底	外 縁	内 縁	内 底	外 縁	内 縁	内 底	外 縁	内 縁	内 底				
30 SD-10	Re31	遺物坑	Iia	腰合符	A2	12.6	-	3.1	0.242	27	-	9	△(2.0)■(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/5.1	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
31 SD-10	Re34	遺物坑	Iia	腰合符	A4-2	11.7	-	(1.7)	1	-	-	外壁・腹内側に凹部	△(2.0)■(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/5.1	○	▼	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
32 SD-10	Re5-35	遺物坑	Iia	腰合符	A3	12.0	8.1	3.9	0.235	32	26	10	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
33 SD-10	Re5	遺物坑	Iia	腰合符	A1	11.2	7.8	3.0	0.231	30	36	8	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
34 SD-10	Re3	遺物坑	Iia	腰合符	A2-2	10.8	7.7	3.9	0.261	38	30	10	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
35 SD-10	Re5-3-35	遺物坑	Iia	腰合符	A5-2	12.0	7.4	4.0	0.333	10	13	3	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
36 SD-10	Re3-4-5	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	14.0	-	(3.1)	2	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
37 SD-10	Re3-4-6	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	11.8	7.9	3.3	0.26	18	36	7	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
38 SD-10	Re4	遺物坑	Iia	腰合符	A1-1	11.8	7.9	3.3	0.26	18	36	7	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
39 SD-10	Re2-4-7	遺物坑	Iia	腰合符	A1-1	12.8	9.5	3.3	0.258	18	18	5	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
40 SD-10	Re5-6-7	遺物坑	Iia	腰合符	A2	12.2	3.4	3.8	0.311	8	26	6	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
41 SD-10	Re5-13	遺物坑	Iia	腰合符	A2-1	11.4	7.8	3.0	0.263	3	10	1	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
42 SD-10	Re2-15	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	12.2	-	(2.8)	8	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
43 SD-10	Re5-16	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	12.8	-	(3.0)	9	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
44 SD-10	Re35-18	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	13.7	-	(3.0)	18	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
45 SD-10	Re35-19	遺物坑	Iia	腰合符	Ia	13.8	-	(2.3)	8	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
46 SD-10	Re3-10	遺物坑	Iia	腰合符	A1-2	11.0	8.4	4.5	0.246	4	36	10	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
47 SD-10	Re25	遺物坑	Iia	腰合符	B	12.4	7.1	3.5	0.282	36	36	10	□(2.0)△(1.0)	黄灰 (モザイク)	黄灰 (モザイク)	2.5/7.2	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
48 SD-10	Re5-16-7	遺物坑	Iia	腰合符	A4	12.0	8.2	3.0	0.25	36	26	10	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
49 SD-10	Re3	土器	Iib	桶	D	12.8	-	(2.8)	9	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
50 SD-10	Re2-17	土器	Iib	桶	A	14.2	-	(2.8)	16	-	-	□(2.0)△(1.0)	黄灰	黄灰	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
51 SD-10	Re3-18	土器	Iib	桶	C1	12.2	6.6	4.5	0.306	11	27	5	□(2.0)△(1.0)	外底・内壁・中壁	外底・内壁・中壁	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52 SD-10	Re3-19	土器	Iib	桶	C1	12.0	6.7	4.6	0.303	15	36	6	□(2.0)△(1.0)	外底・内壁・中壁	外底・内壁・中壁	2.5/7.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

附表2 音無瀬遺跡 木製品・金属製品類別表

遺物番号	遺物名	出土位置・層位	種別	大きさ(cm)			調査等	不取扱	通行規制	備考
				全長	幅	厚み				
113	K-15②		漆器	現在高	19	高台径 8.6	—		地本迄日	△
116	SD-12	2区	用途不明	現在高	12.0	2.8	0.9		延日	◎
119	SD-12	3区両	鉢底	現在高	14.7	12.4	1.5		鉢材	×
120	SD-12	3区両	鉢底	現在高	14.0	2.2	1.2		鉢材	×
121	SD-12		漆器(金箔貼付用)	現在高	12.5	2.65	0.12	○ 金属製品(側面)	延日	○
122	SKg-4		鉢底	現在高	9.0	18.0	1.0		鉢材	△
123	SKg-5		鉢底	現在高	6.0	21.2	1.8		芯持丸木	△
124	SKg-5		鉢底	現在高	7.0	21.0	2.0		鉢材	△
125	SKg-7		漆器鉢材	現在高	14.1	3.5	1.7		延日	○
126	SD-14	2区	漆器	現在高	13.9	6.1	3.7	下端片面からかかづ、上端は漆器の為不規則	鉢材	△
127	SD-14	1区	用途不明	現在高	14.6	6.8	4.1		芯持丸木	×
128	SD-14	2区	曲物漆器底盤	現在高	9.1	3.0	0.8		鉢材	○ 通路W1.5m
129	SD-14	1区	板状漆器	現在高	11.7	2.9	0.7		延日	△
130	SD-14	2区	板状漆器?	現在高	10.4	1.1	1.2		板日	○
131	SD-14	1区	漆器鉢材	現在高	7.3	2.0	0.6		芯持丸木	○
132	SD-14	1区	漆器鉢材	現在高	5.7	1.8	0.7		漆器鉢日	○
133	SD-14	1区	漆器鉢材	現在高	6.0	3.0	0.6		漆器	△
134	SD-14	1区	漆器鉢材	現在高	9.3	4.5	0.7		漆器鉢日	○
135	SD-08		漆器鉢材	現在高	50.0	3.0	2.7	—下端穴あき2カ所	芯持丸木	○
136	SD-08		漆器鉢材	現在高	21.2	2.5	1.3	下端穴あき2カ所	鉢材	○
137	SD-08		漆器鉢材	現在高	20.7	2.5	1.8	—下端穴あき2カ所	芯持丸木	○
138	SD-08		漆器鉢材	現在高	29.7	3.0	2.1	—下端穴あき2カ所	芯持丸木	○
139	SD-10		杭	現在高	39.5	3.8	3.7	下端穴あき2カ所	芯持丸木	×
140	SD-10	4区	用途不明	現在高	9.9	1.8	2.0		板日	○
141	SD-10	3区	漆器鉢材	現在高	20.2	2.5	—上端穴あき2カ所 中央部凹込2カ所	芯持丸木	○	
142	K-15⑧		器物の底盤?	現在高	5.5	3.4	0.3	裏面(漆器底盤)裏に漆器底盤	延日	○
143	L-15⑨		用途不明	現在高	8.2	3.8	1.4	全体に漆膜	延日	○
144	L-14⑩		角状漆器	現在高	14.1	1.6	1.4	上端中央部に漆器底盤	延日	○

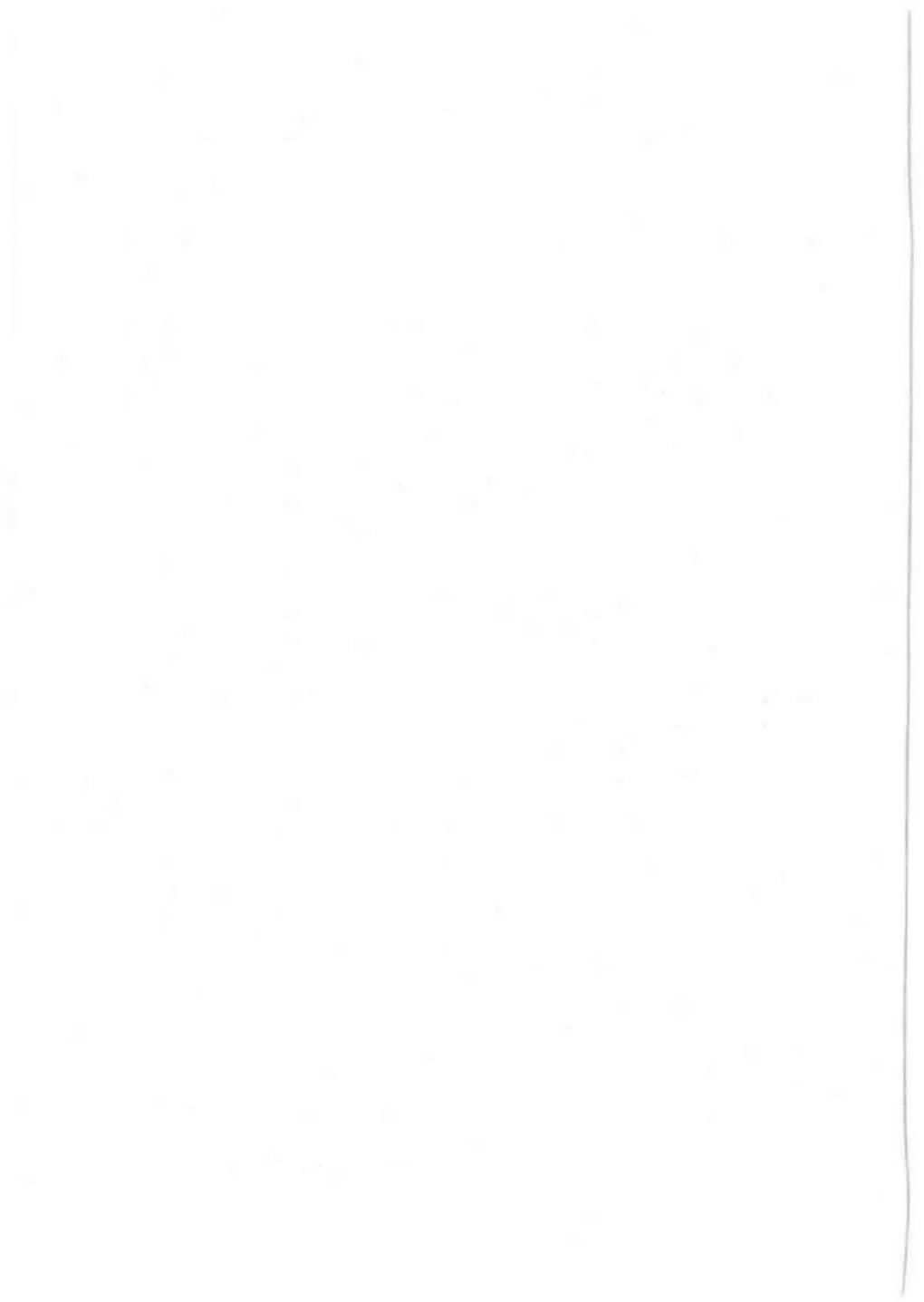
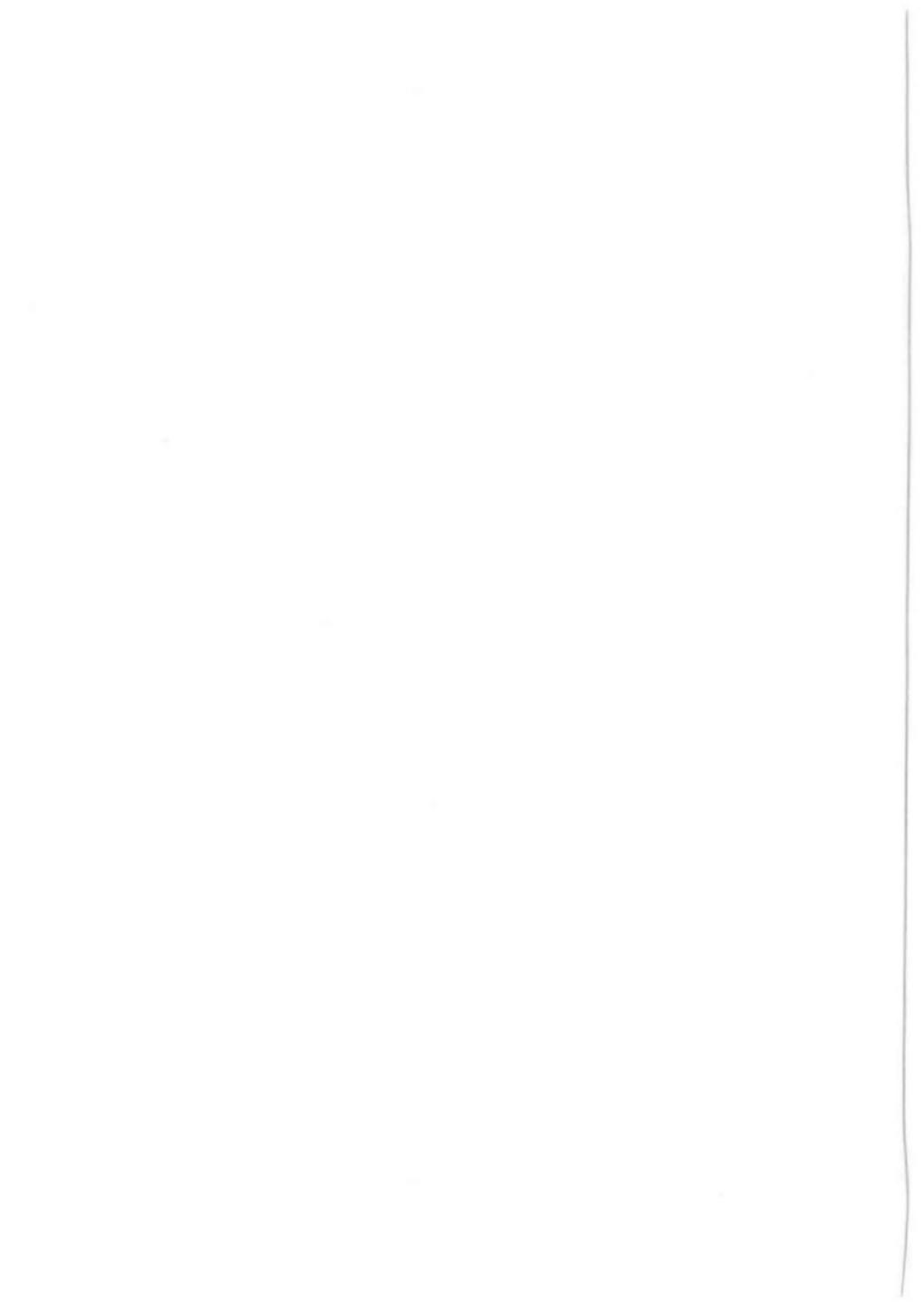


図 版

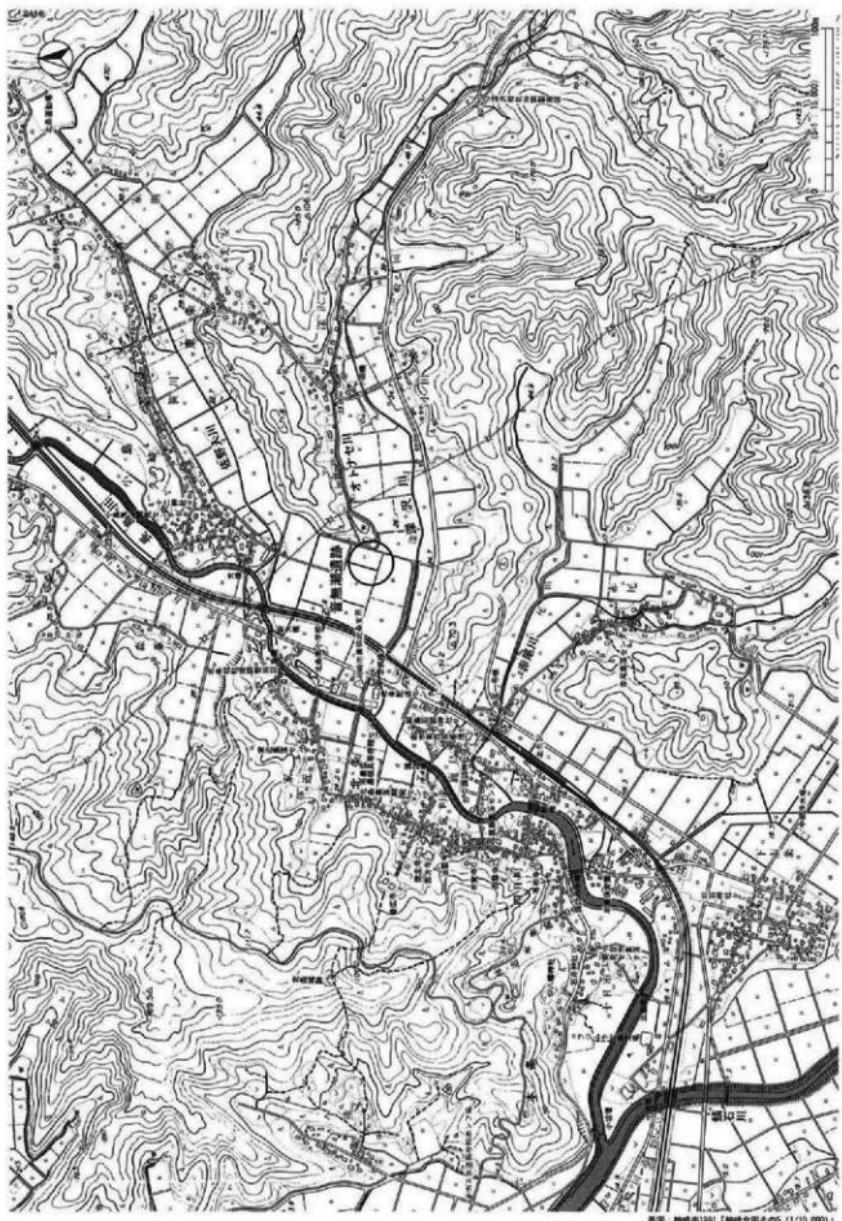
1. ここには、遺跡全体および遺構・遺物に関する実測図と写真を収める。図版は、図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 写真図版のうち、出土遺物の縮尺は、一部を除きおおむね1：2である。

トーン凡例





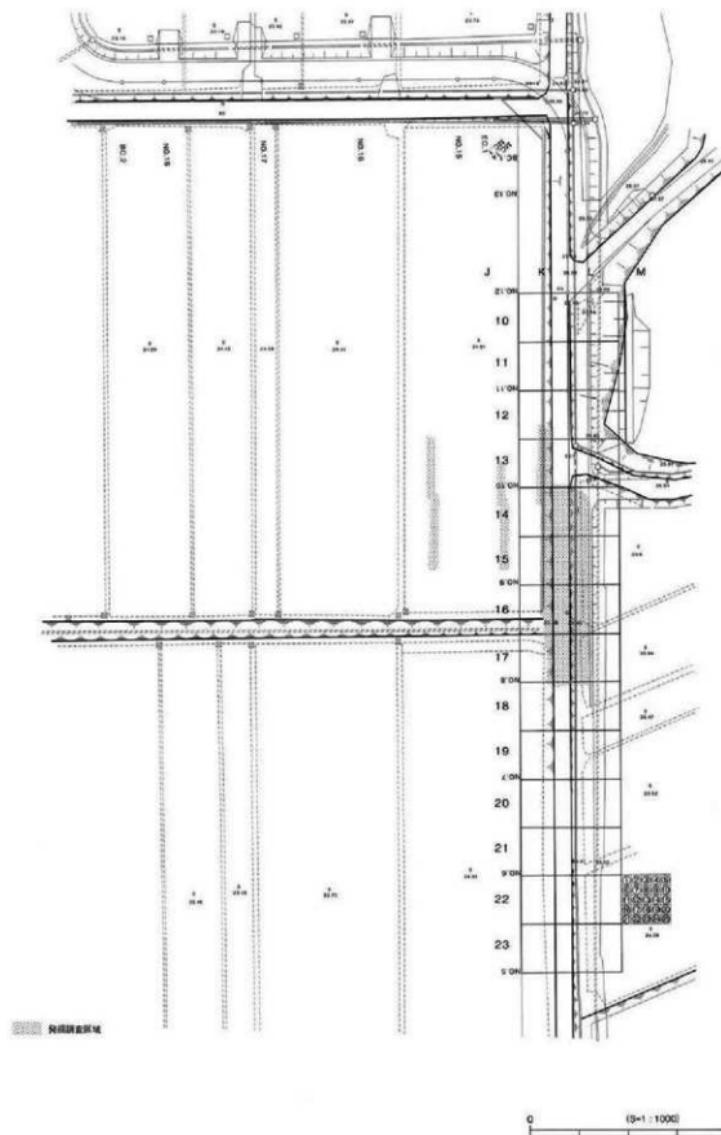
音無瀬遺跡の位置と周辺の地形



原図：地図市1991「越後全図705(1/10,000)」

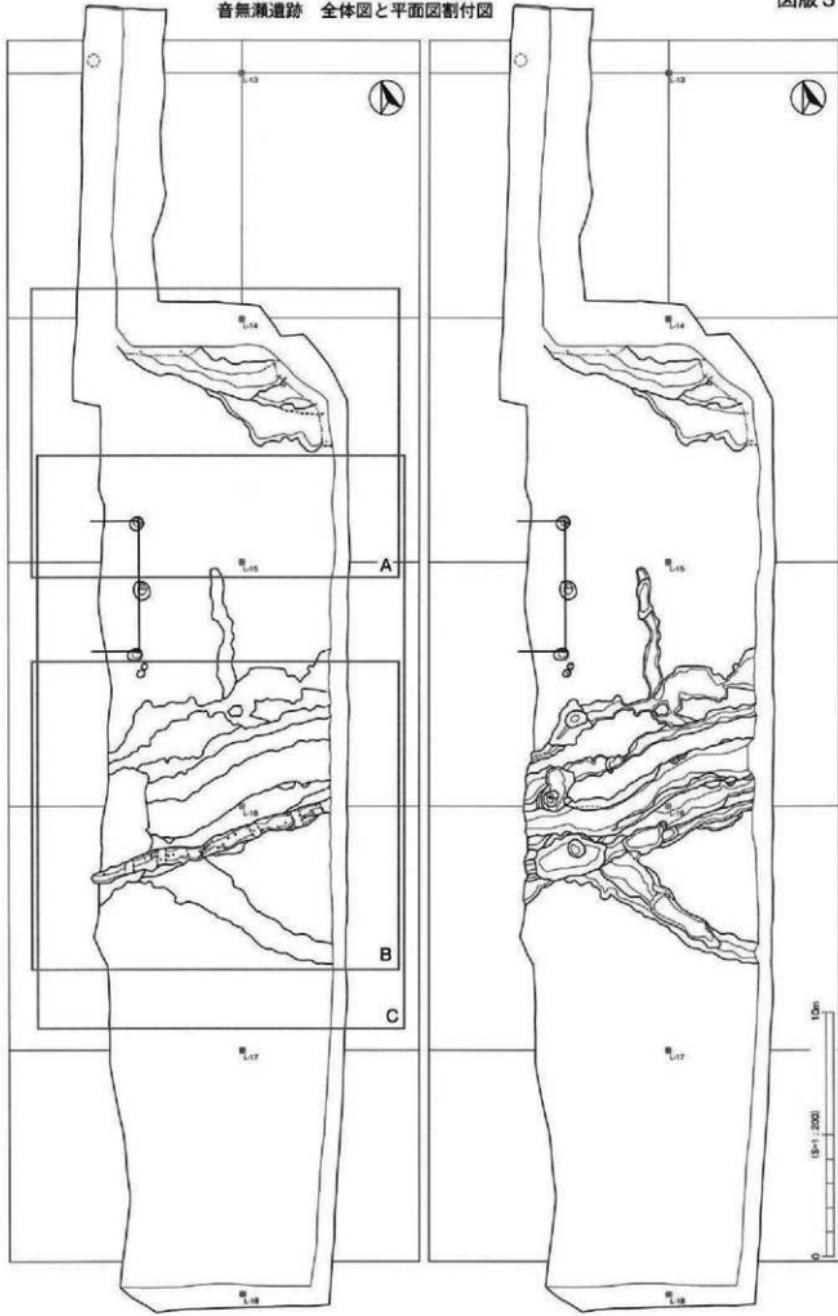
図版2

音無瀬遺跡 調査区とグリッド配置図



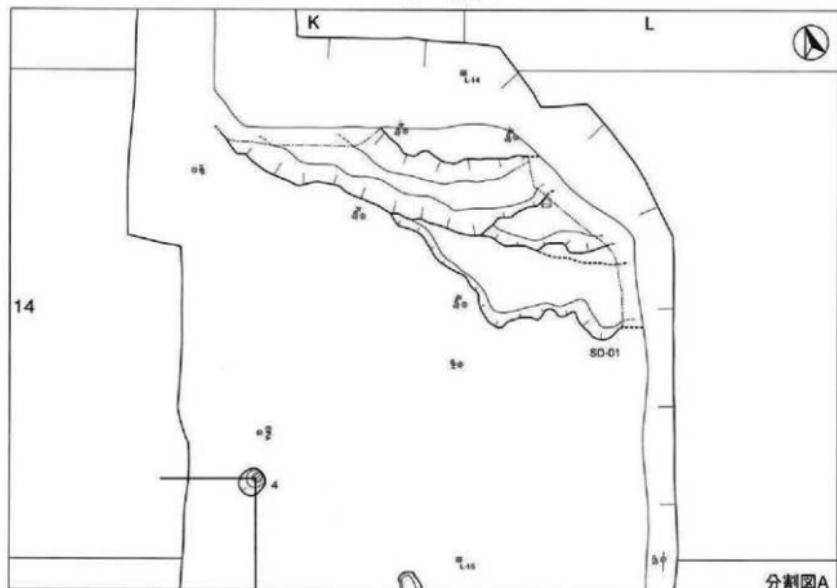
音無瀬遺跡 全体図と平面図割付図

図版3

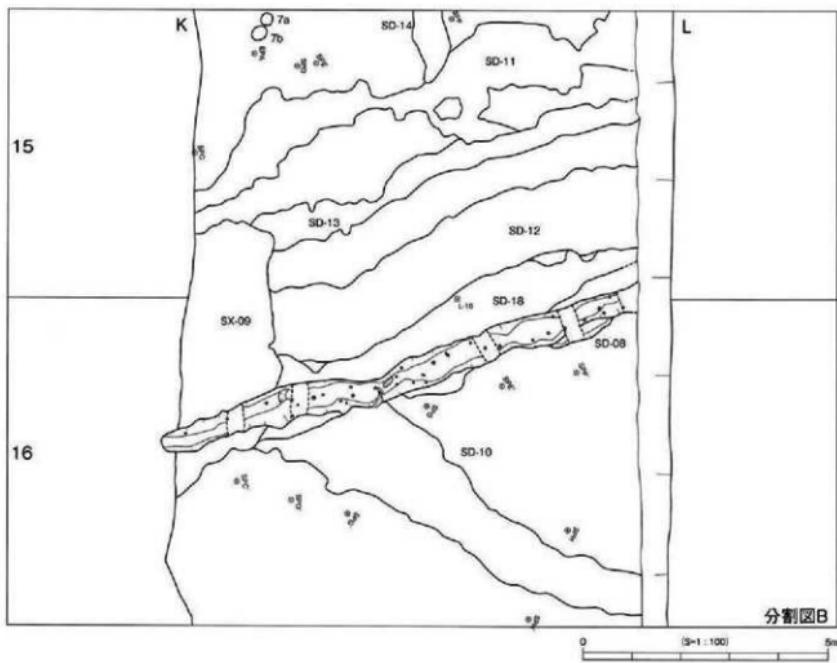


図版4

音無湖遺跡 分割図 1



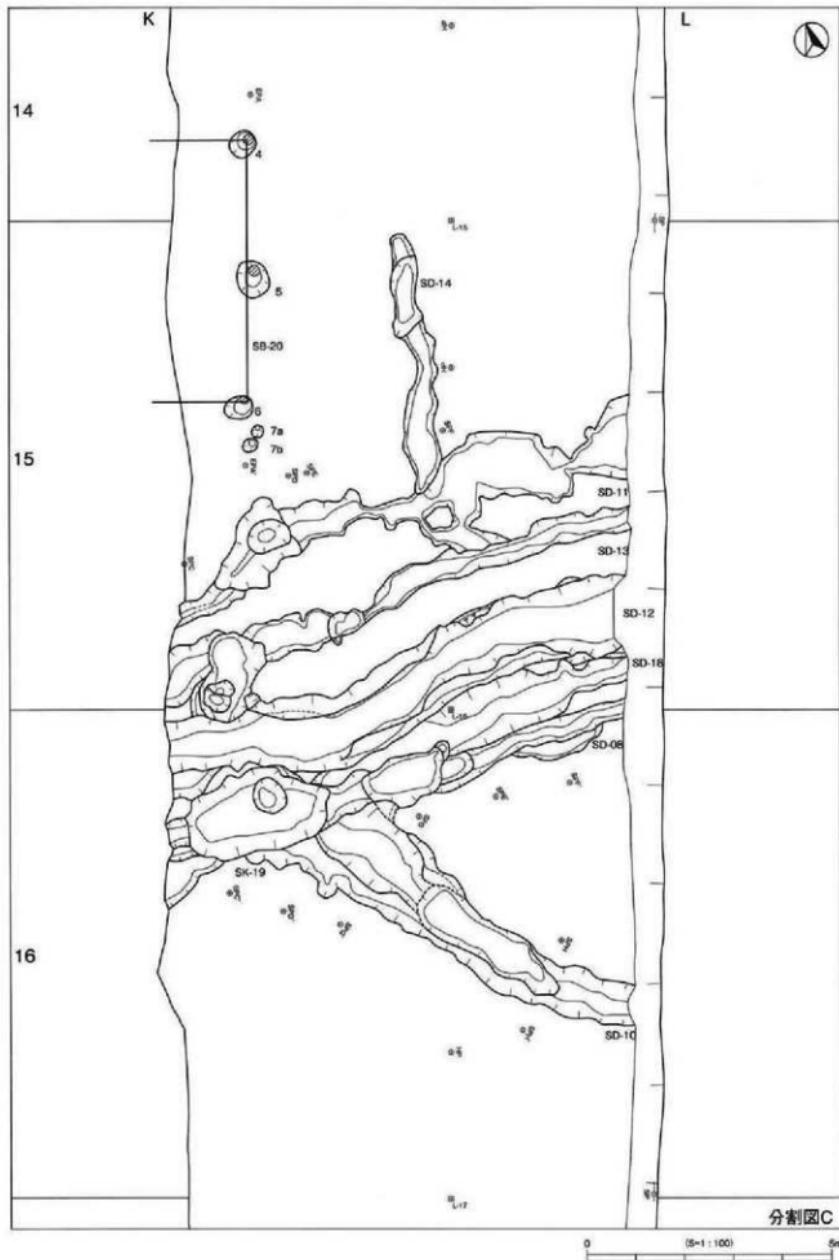
分割図A



分割図B

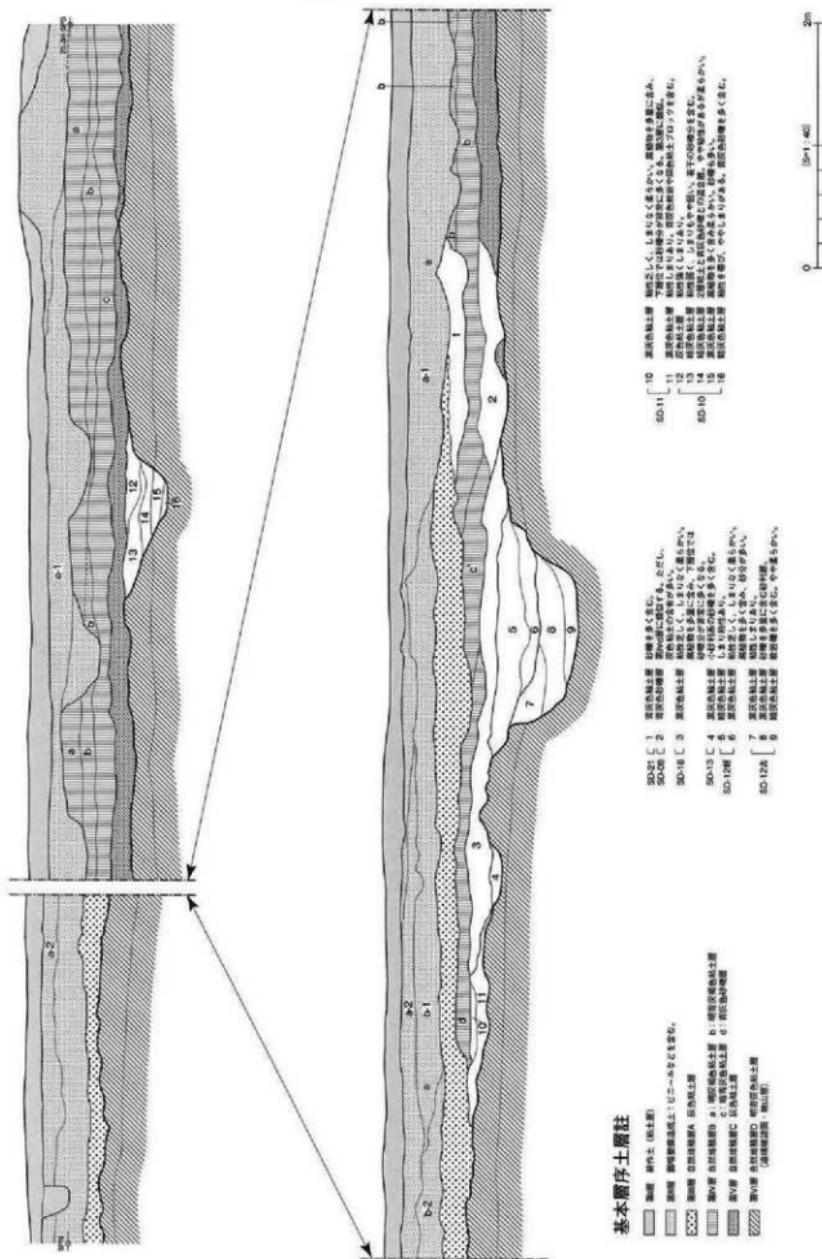
0 (S=1:100) 5m

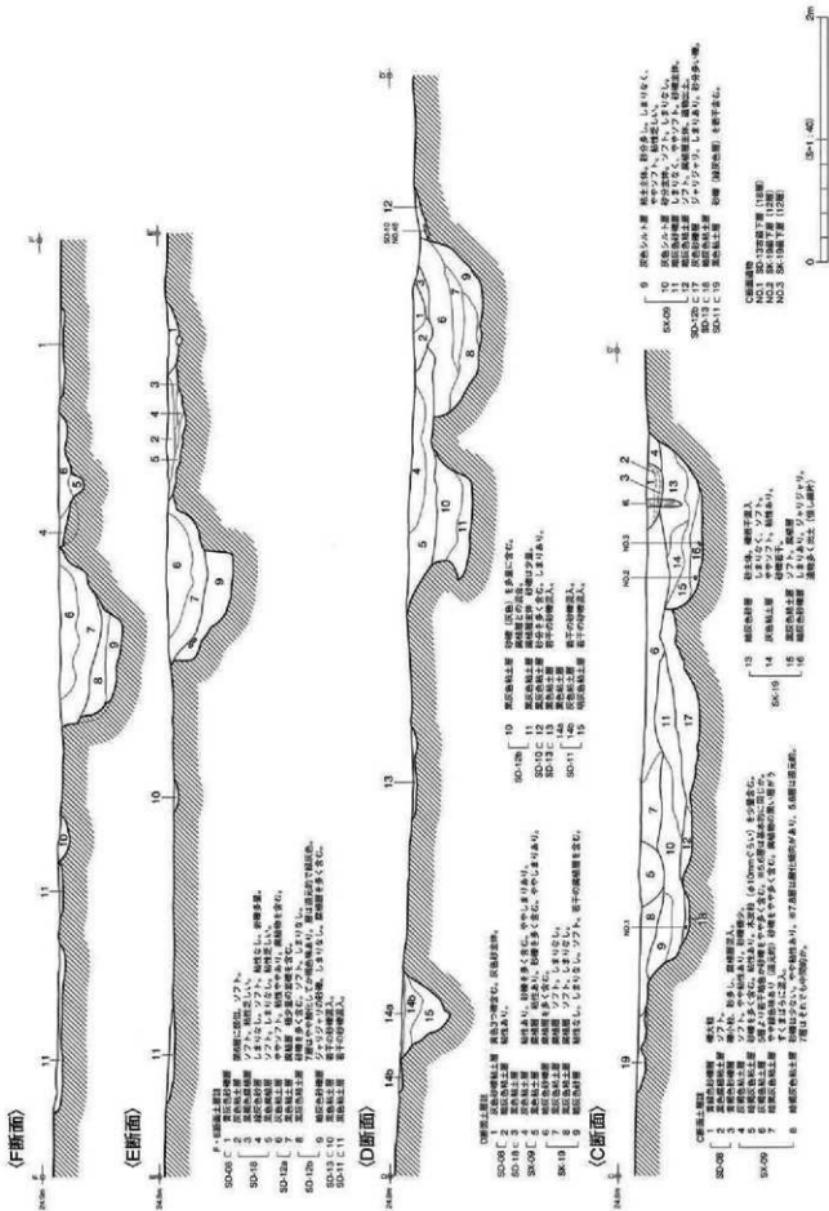
音無瀬遺跡 分割図 2



図版6

音無瀬遺跡 基本層序断面図



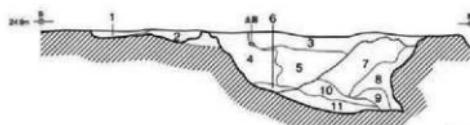


図版8

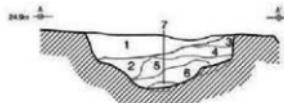
音無瀬遺跡 溝群断面図 2・遺構個別図

(SD-01溝土層断面)

B断面(東ペルト)



A断面(西ペルト)



B面図 (東ペルト)

SD-01b

- 1 黑灰色粘土層 粘性、しまりあり。葉状植物土が多く含む。
- 2 黑灰色粘土層 粘性、しまりあり。
- 3 黑灰色粘土層
- 4 黑灰色粘土層
- 5 黑灰色粘土層
- 6 黑灰色粘土層
- 7 黑灰色粘土層
- 8 線維状粘土層
- 9 線維状粘土層
- 10 黑灰色砂層
- 11 黑灰色砂層

急に立ち上がるSD-01bの頭が崩落したもの。

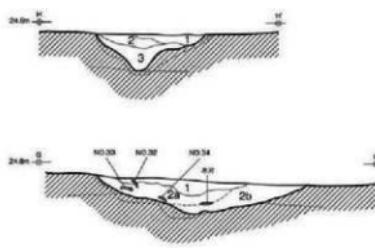
SD-01bが削除されたときにたどり、西ペルトの時に削除。

SD-01bが削除されたときにたどり、西ペルトの時に削除。

SD-01bは水が流れていった時にたどったもの。

B A面図の各層序は整合しない。

(SD-10溝土層断面)



1 黒灰色土層 粘性あり。G面図では土塊が持てて多く含まれるが、横断面では少しく、純土の状態。

2 地盤色砂礫層 固くしまる。地盤、黒灰色の砂と細い砂で構成。G面図では中央にカスカムの白い壁がある。

3 黑灰色土層

SD-10b

1 黒灰色土層 粘性、しまりあり。

2 黑灰色土層 粘性、しまりあり。葉状植物土層が混じる。

3 黑灰色土層 粘性、しまりあり。葉状植物土層が混じる。

4 黑灰色土層

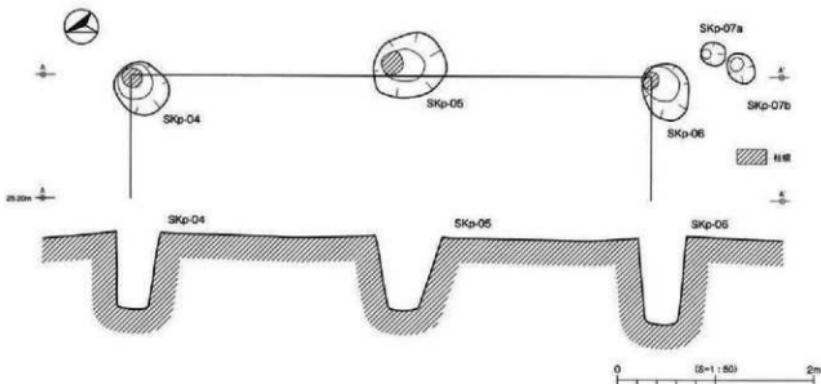
SD-10c

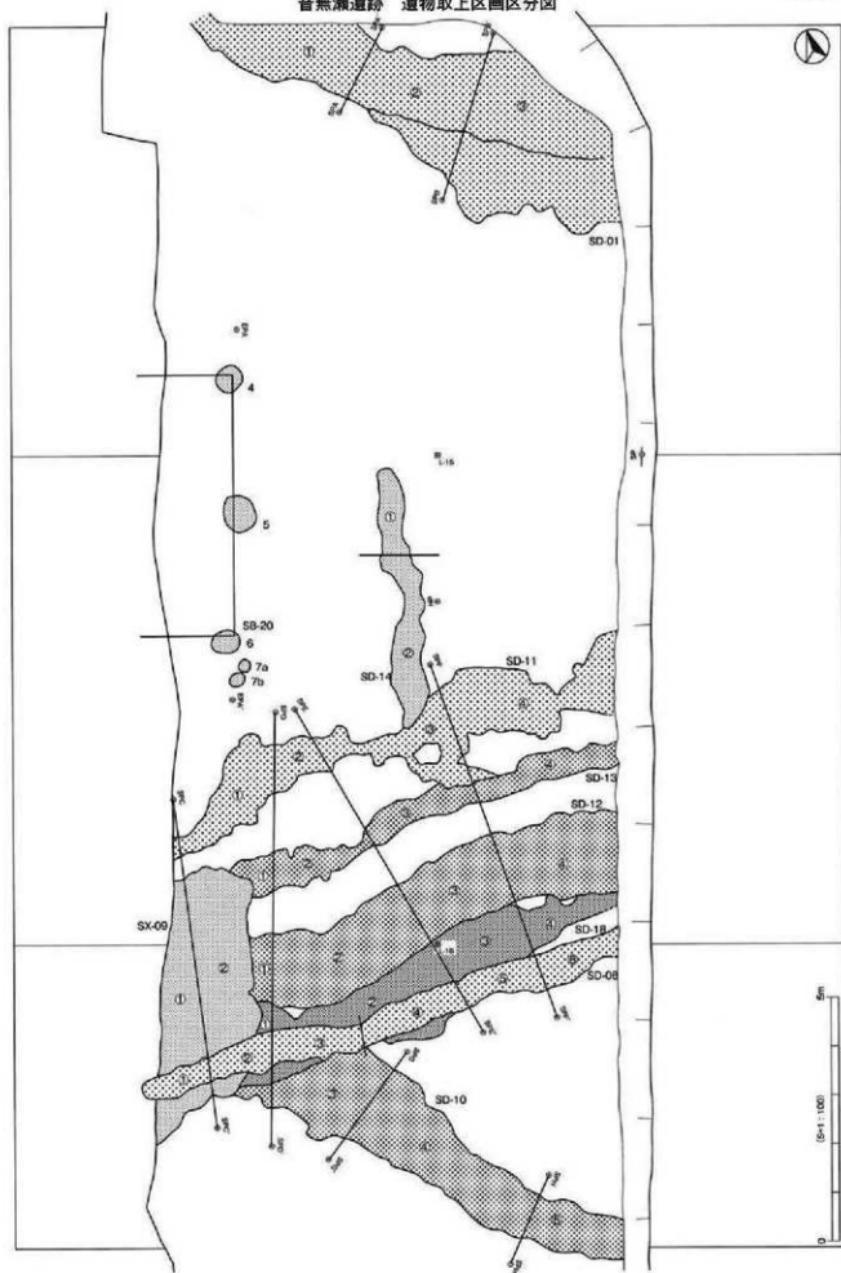
1 黒灰色土層 粘性、しまりあり。葉状植物土層が混じる。

2 黑灰色土層

0 2m (S=1:40)

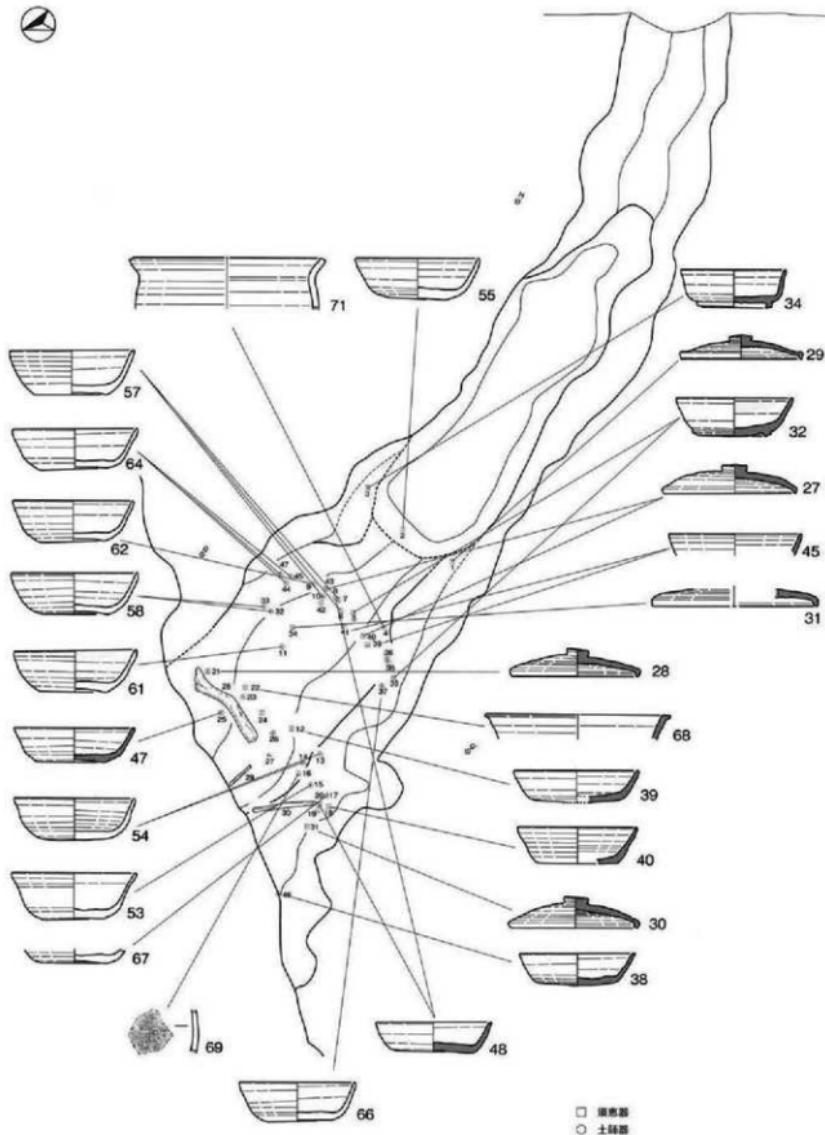
(SB-20建物跡)





図版10

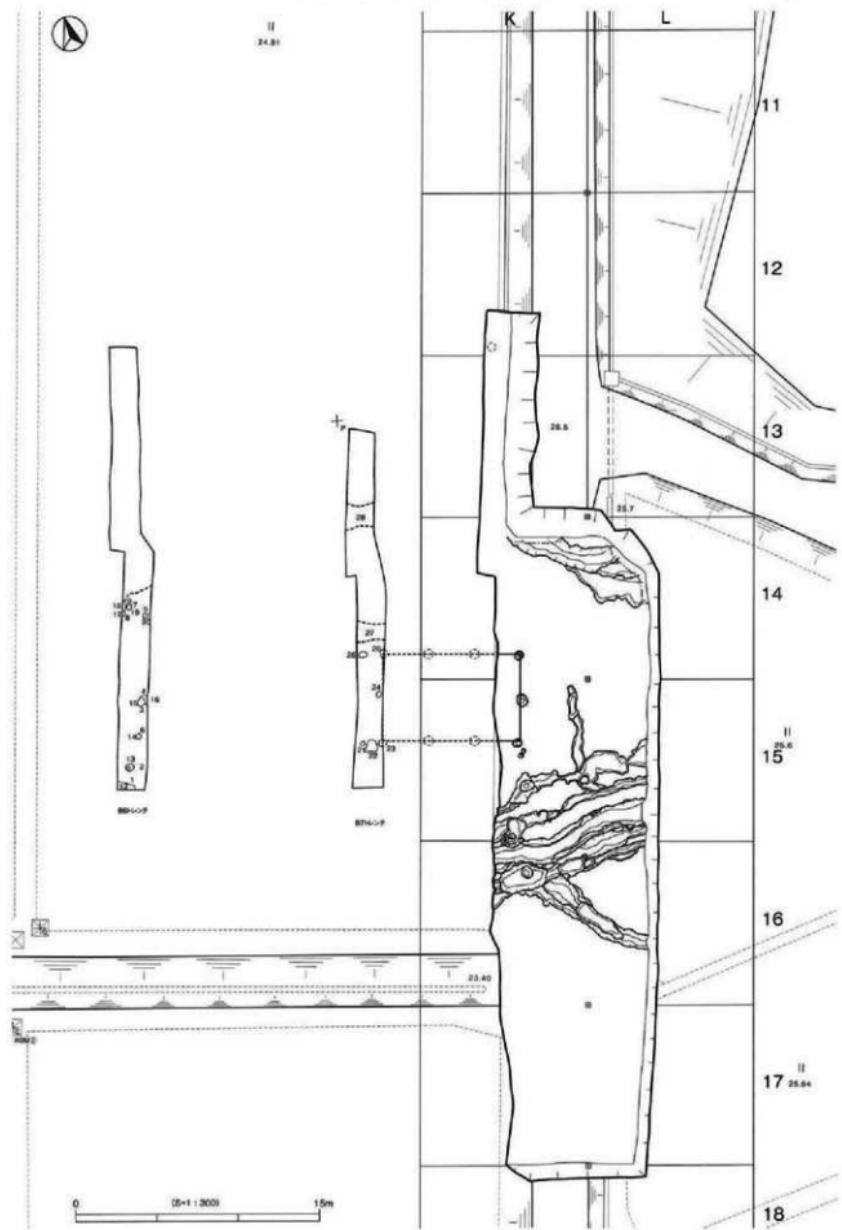
音無瀬遺跡 SD-10溝跡遺物分布図



0 (1:40) 2m

図版11

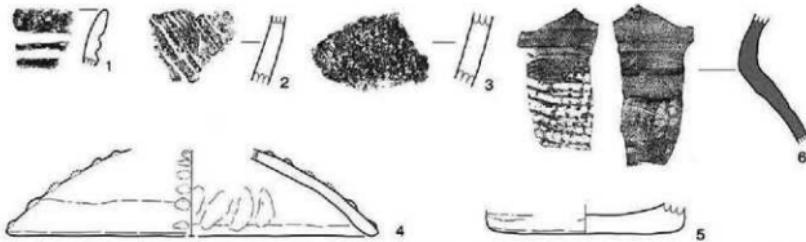
音無瀬遺跡 主要部遺構配置図



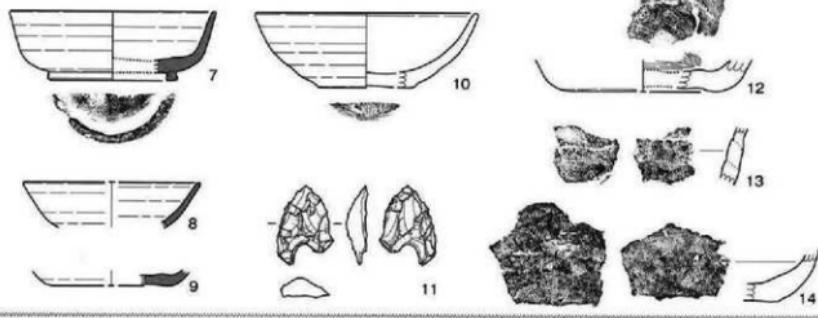
図版12

音無瀬遺跡 出土遺物 1

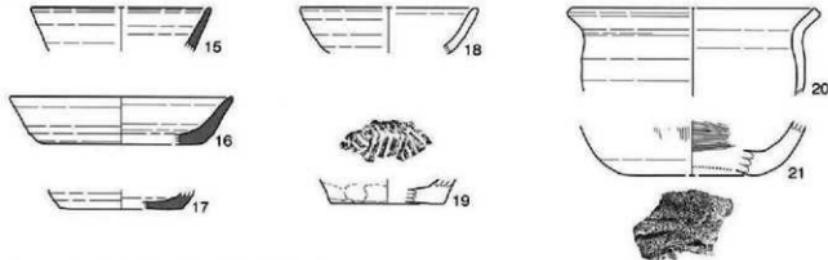
SD-01



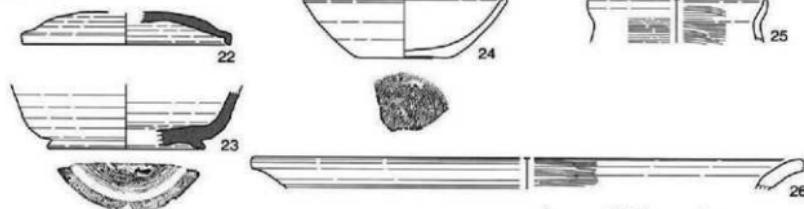
SD-12



SD-13



SD-12・13

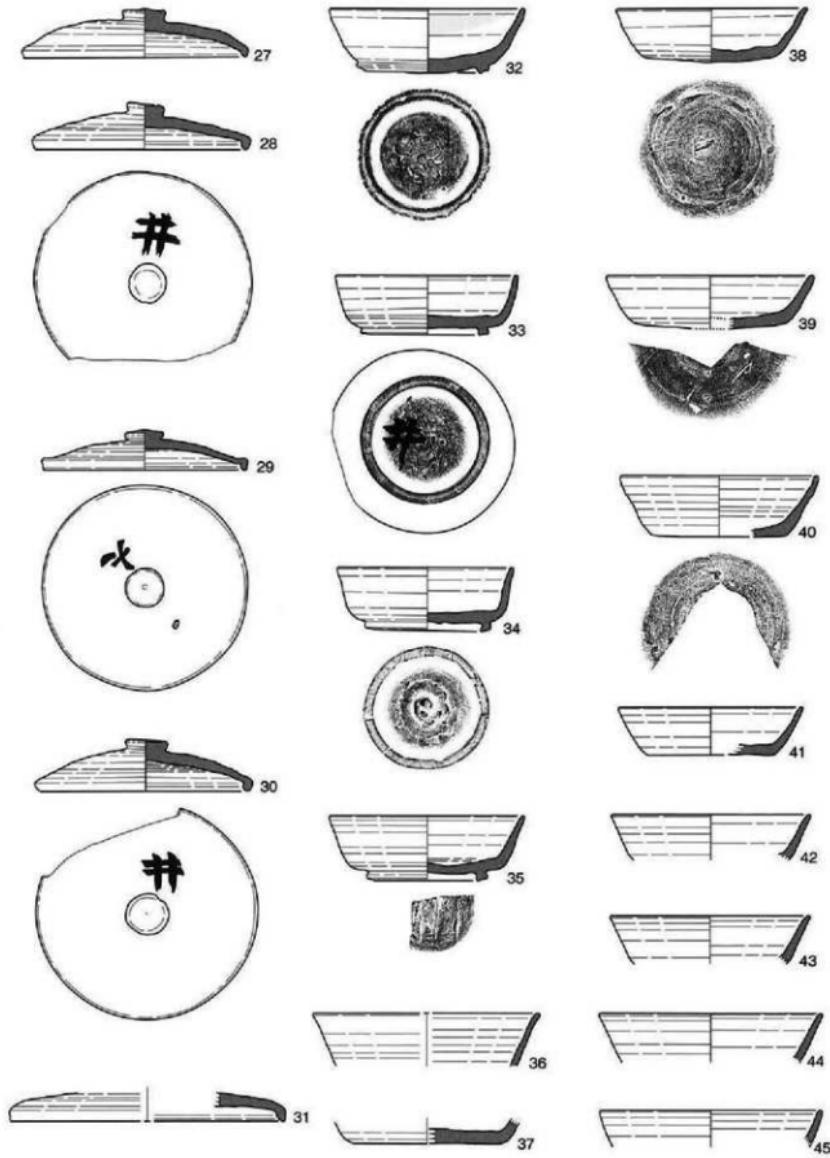


1-5: 磨文土器 6~9・15~17・22~23: 索器
10・12・18~21・24~26: 土器器 13~14: 製塩土器 11: 石鎚未製品

0 (5×2:3) 5cm (11)
0 (5×1:3) 15cm

音無瀬遺跡 出土遺物 2

SD-10



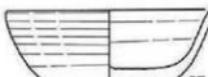
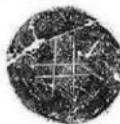
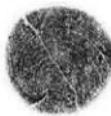
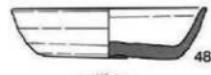
27~45:須恵器

0 (S=1:3) 15cm

図版14

音無瀬遺跡 出土遺物 3

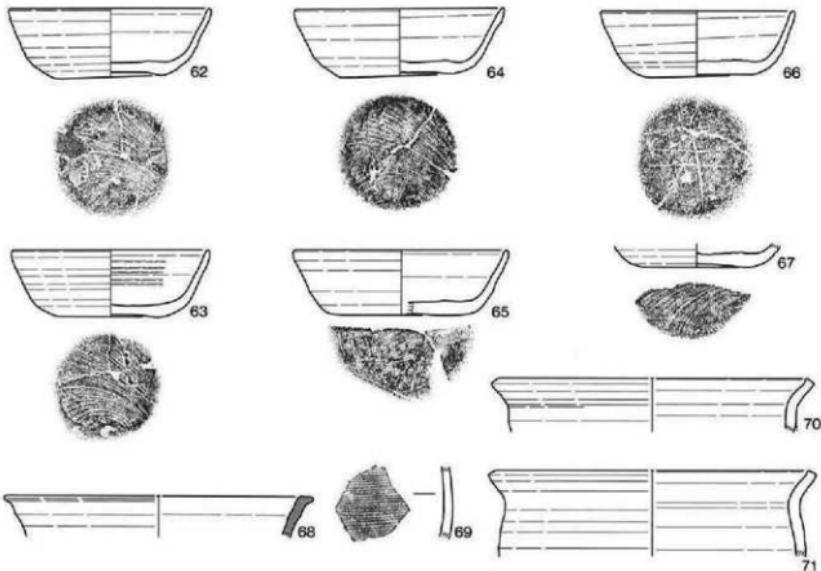
SD-10



46~48:須恵器 49~61:土師器

0 (S=1:3) 15cm

SD-10



SD-11

SD-18

SD-08

包含層 (古代)

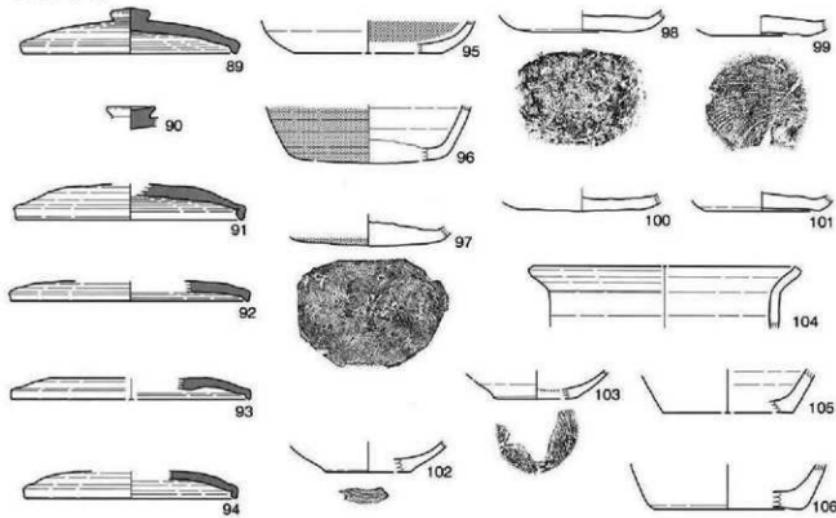
62~67・69~71・74~75・77・81: 土器
76・88: 須恵器 (生焼け)
68・72・73・78・82~87: 須恵器
79: 黒色土器
80: 緑釉陶器



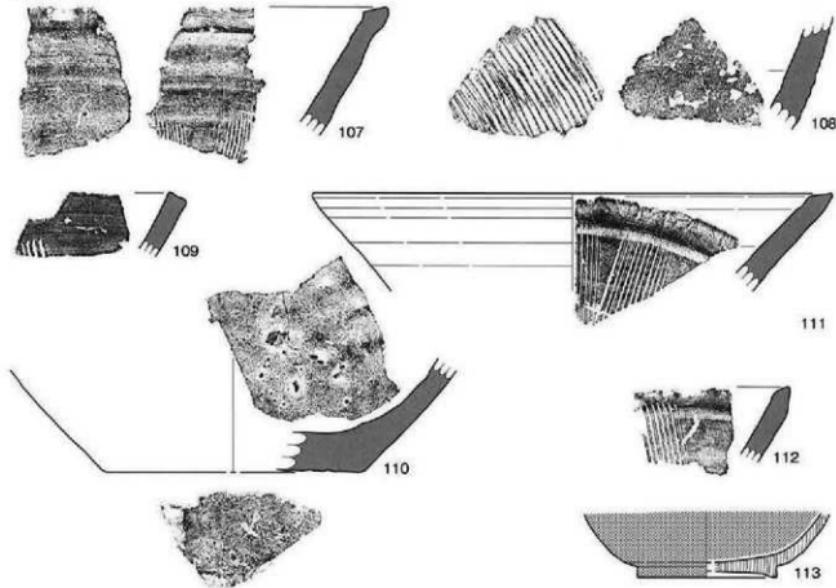
図版16

音無瀬遺跡 出土遺物 5

包含層(古代)



包含層(中世)



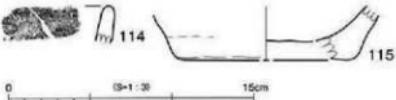
89~94:須恵器
107~109:珠洲

95:黒色土器
96~106:土師器
110~112:越前
113:漆器

0 (3-1 : 3) 15cm

音無瀬遺跡 出土遺物 6

包含層（縄文時代）

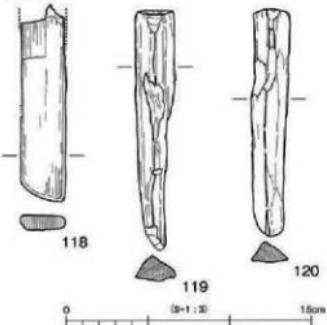


包含層（近世）



木製品

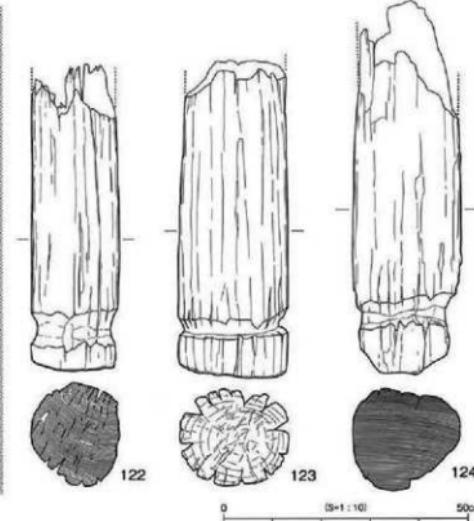
SD-12



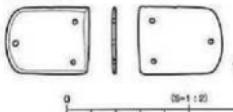
SKp-04

SKp-05

SKp-06

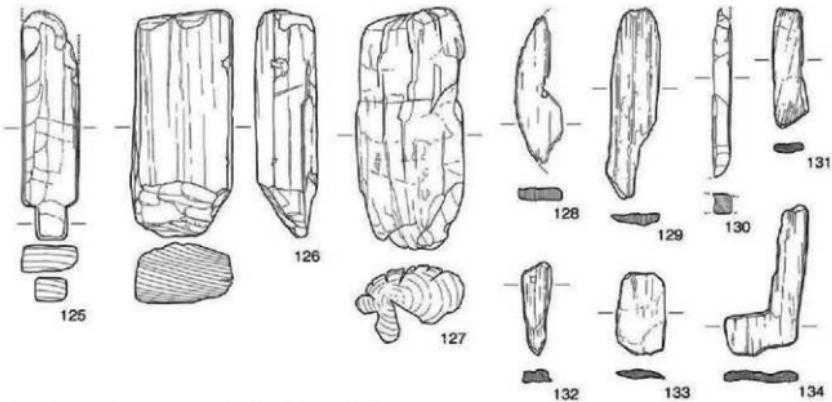


金属製品



SKp-07

SD-14

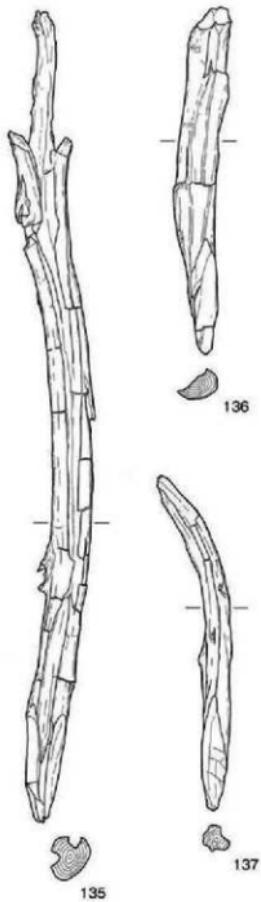


114・115：縄文土器 116：肥前系磁器 117：陶器
121：金属製品（帶金具） 118～120・122～134：木製品

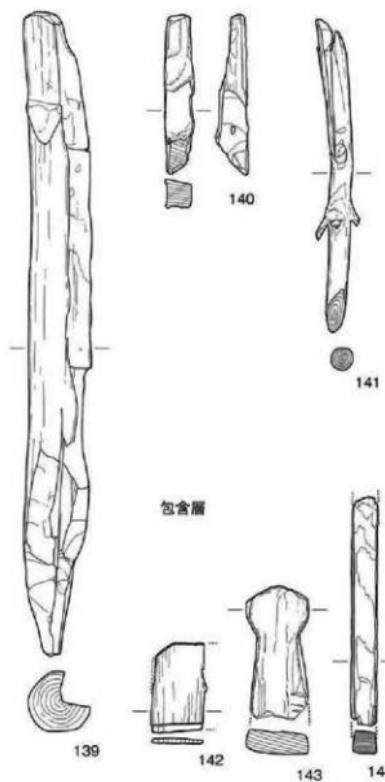
図版18

音無瀬遺跡 出土遺物 7

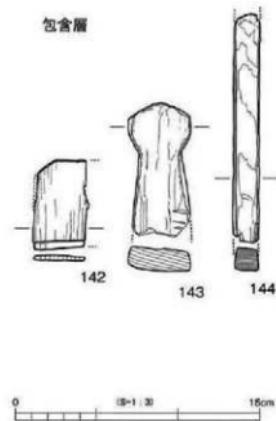
SD-08



SD-10



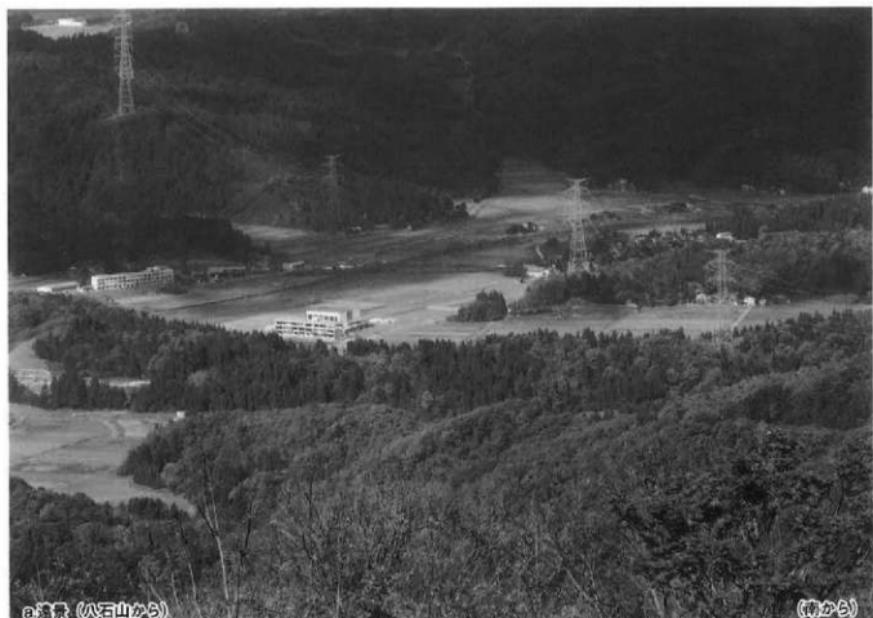
包含層



0 (3=1 : 30) 16cm

134~143木製品

音無瀬遺跡 1



a.遠景(ハ石山から)

(西から)



b.調査区全景

(西から)



a調査前現況

(北東から)



b調査前現況と八石山

(北東から)

調査1



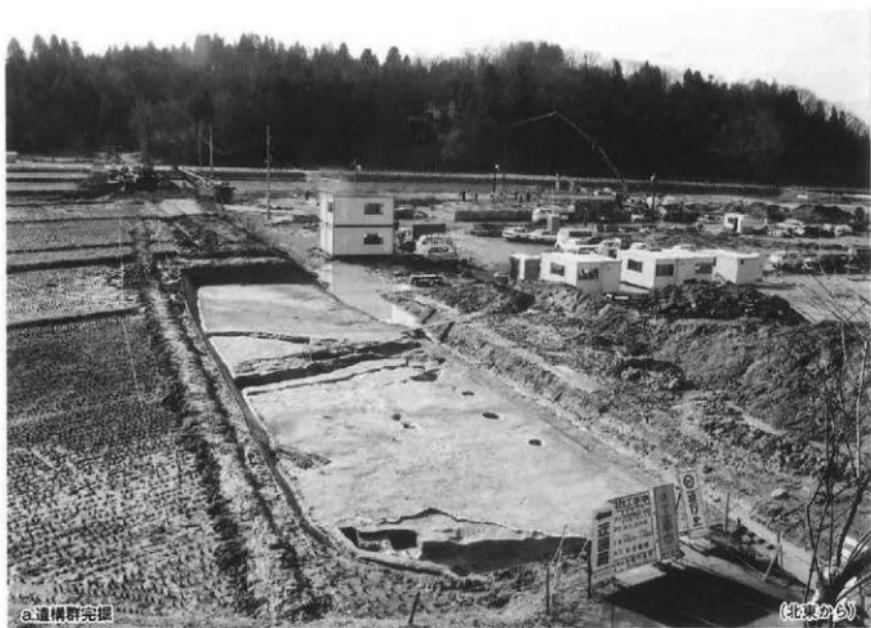


層序





遺構2



a.遺構群完掘

(北東から)



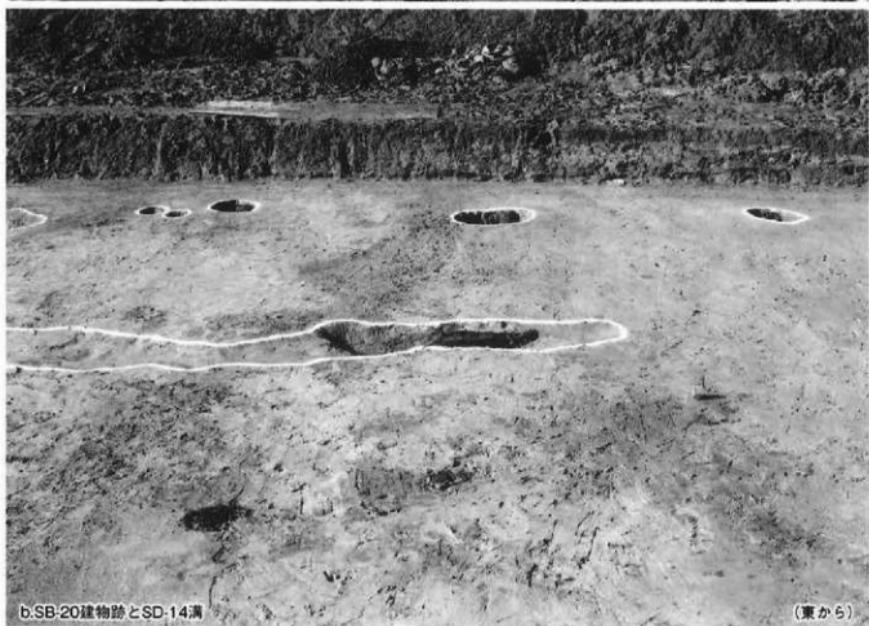
b.遺構群完掘

(北東から)



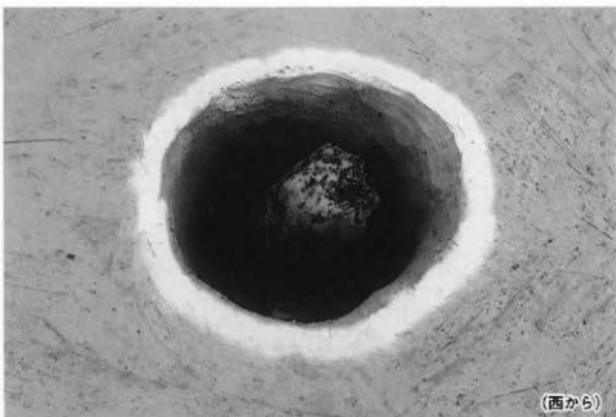
遺構4





遺構6

a.SB-20建物跡
SKp-04柱穴



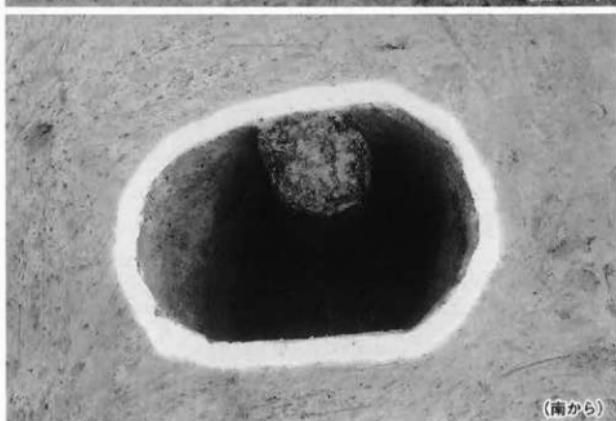
(西から)

b.SB-20建物跡
SKp-05柱穴



(南西から)

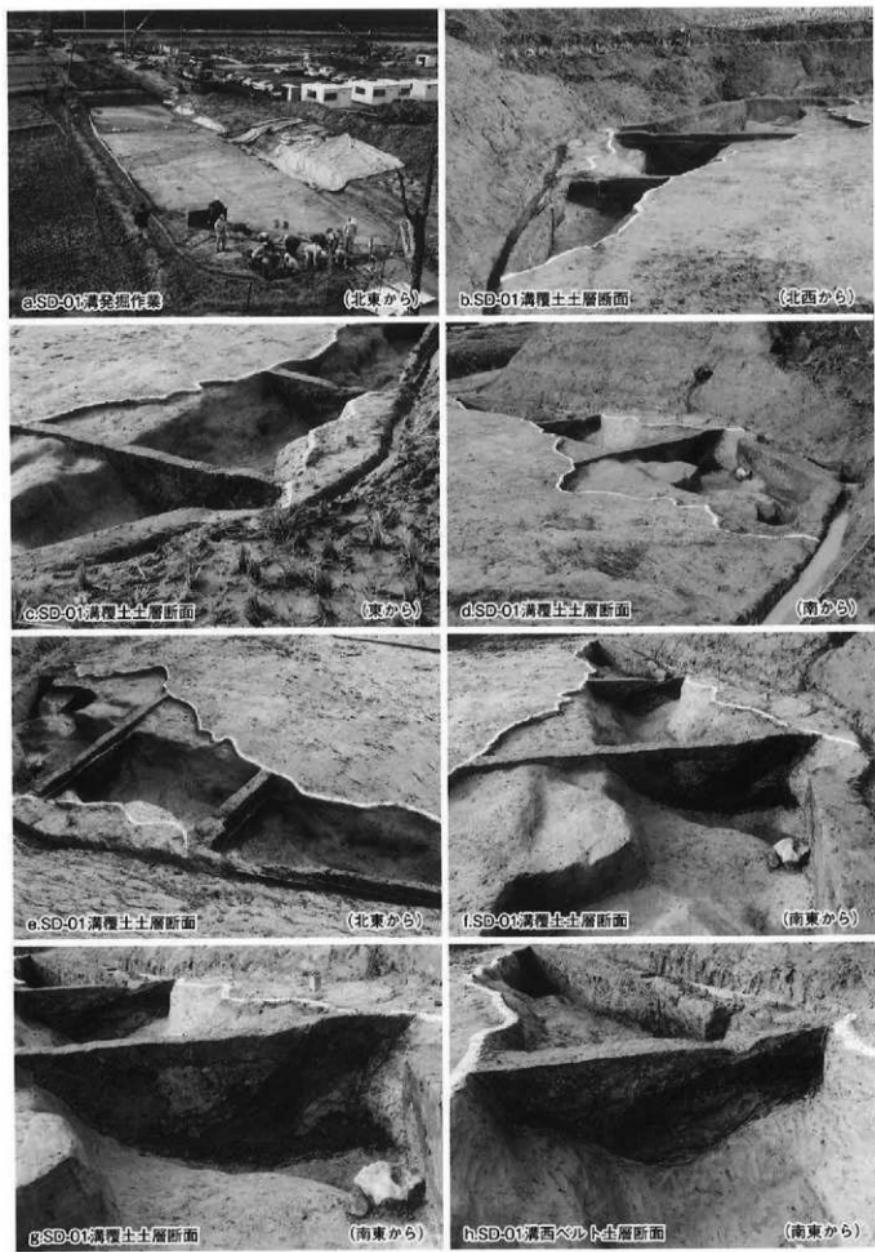
c.SB-20建物跡
SKp-06柱穴



(南から)



遺構8





遺構10



a 中央部溝群覆土層断面全景

(北西から)



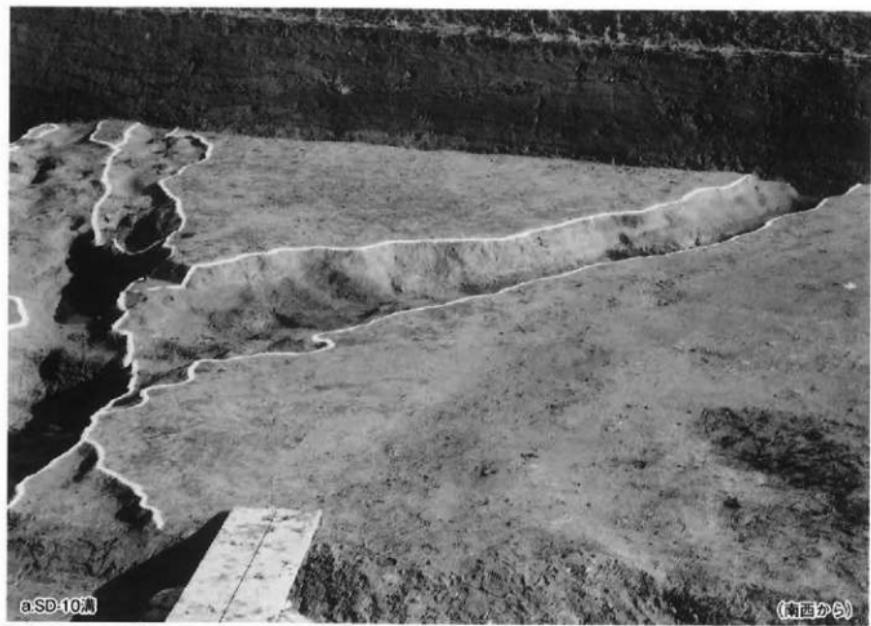
b 中央部溝群覆土層断面

(北西から)

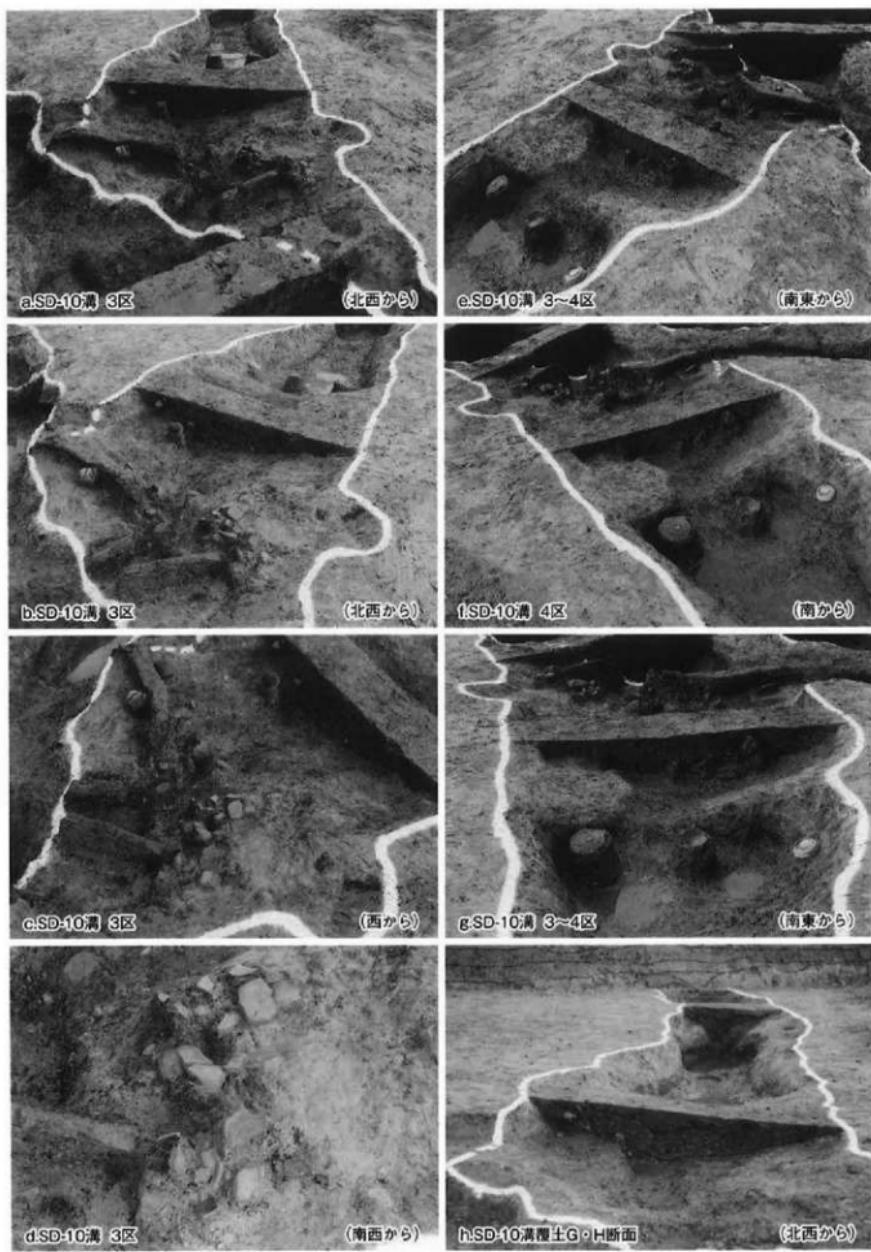


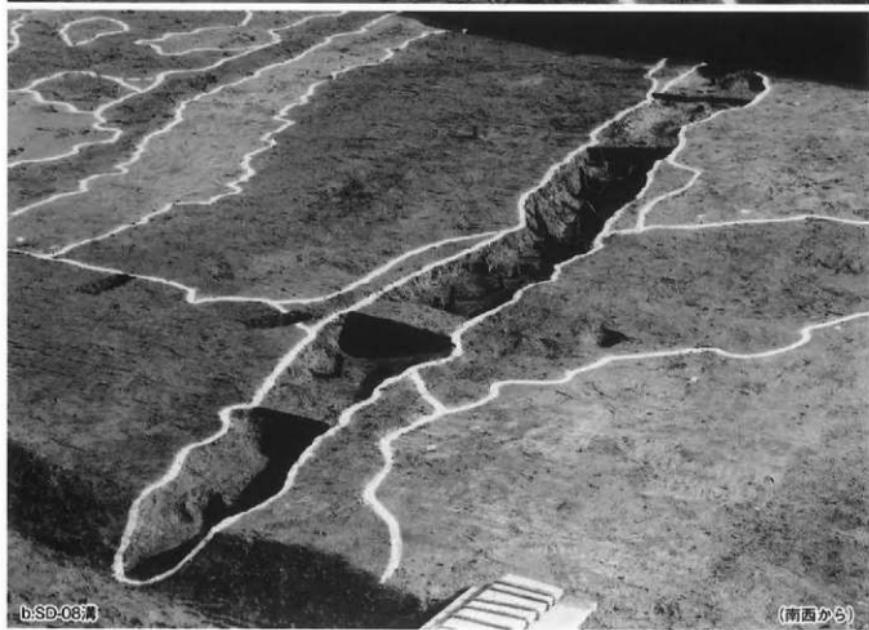
遺構12



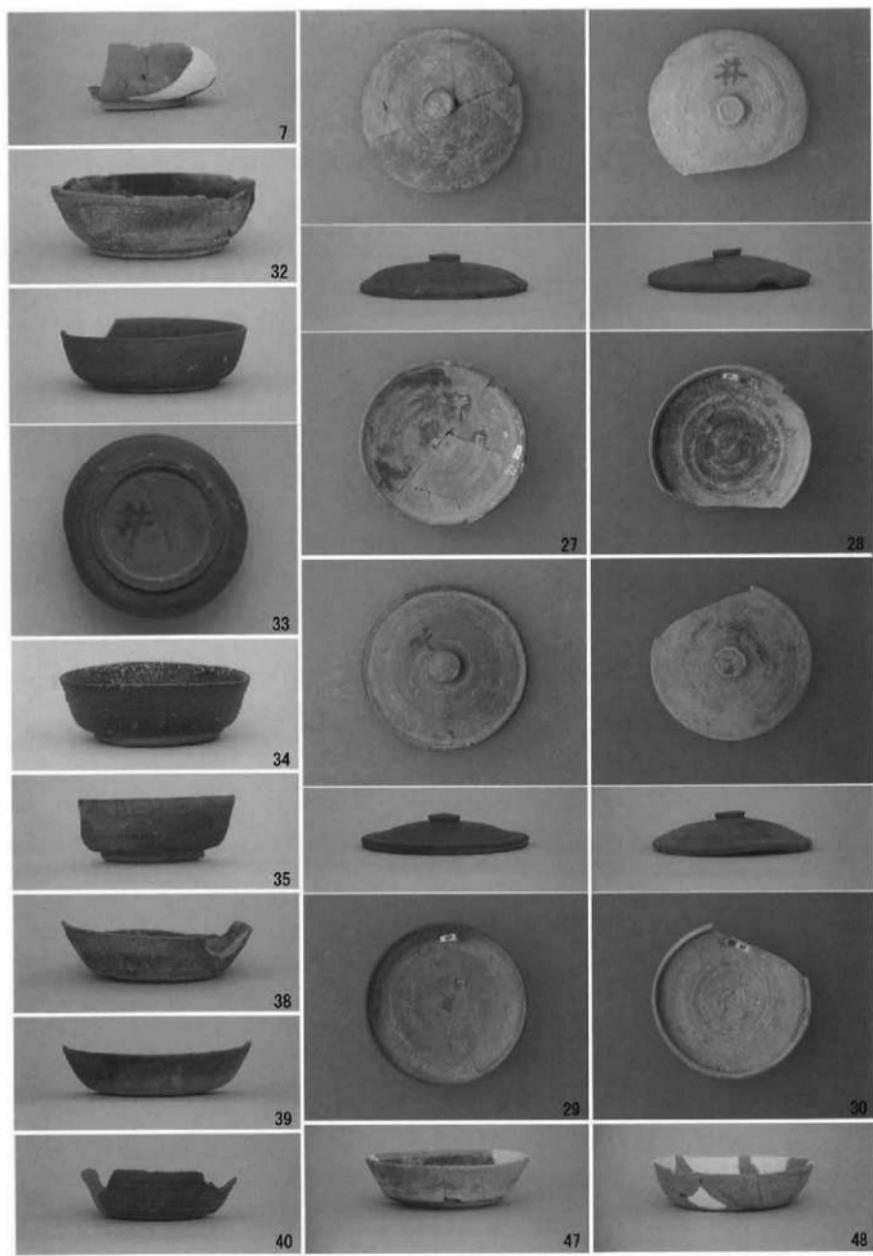


遺構14

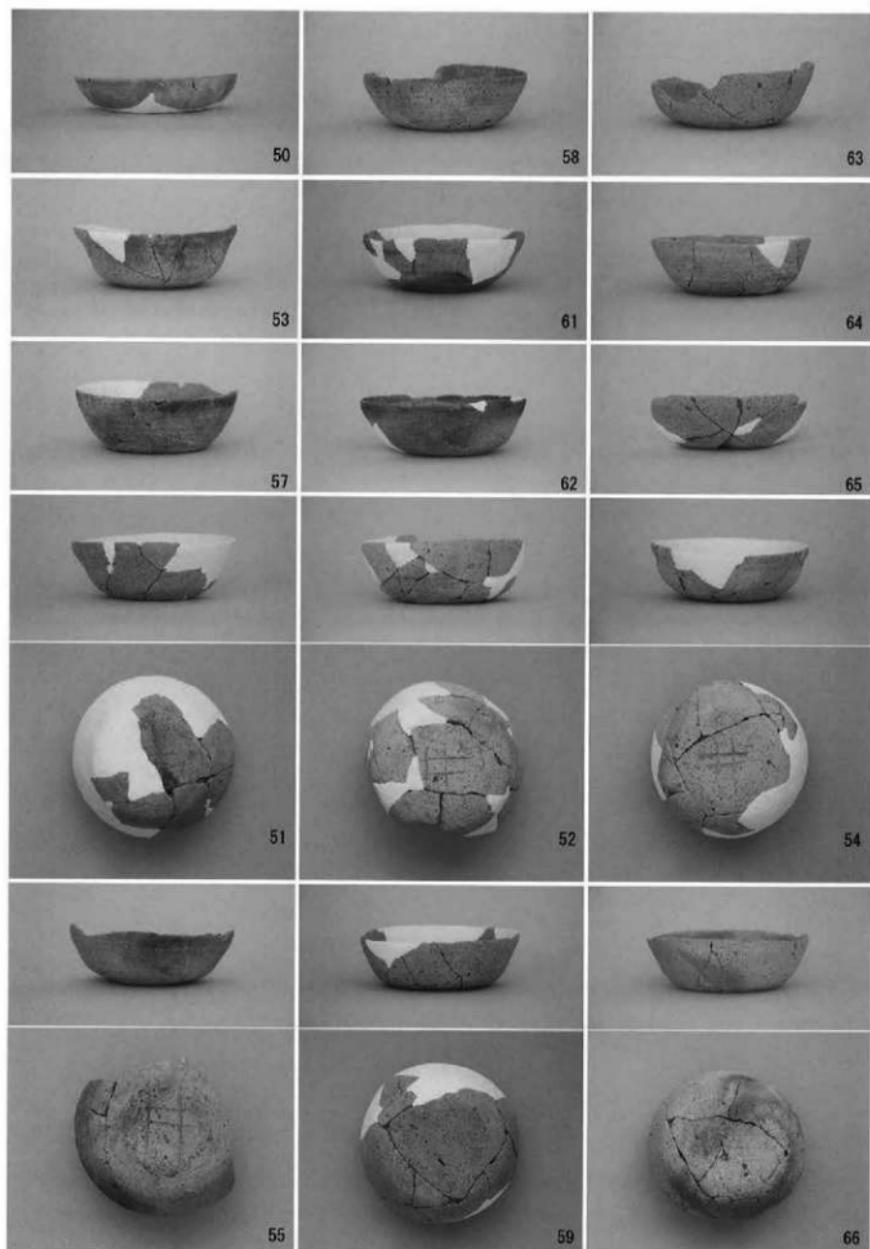




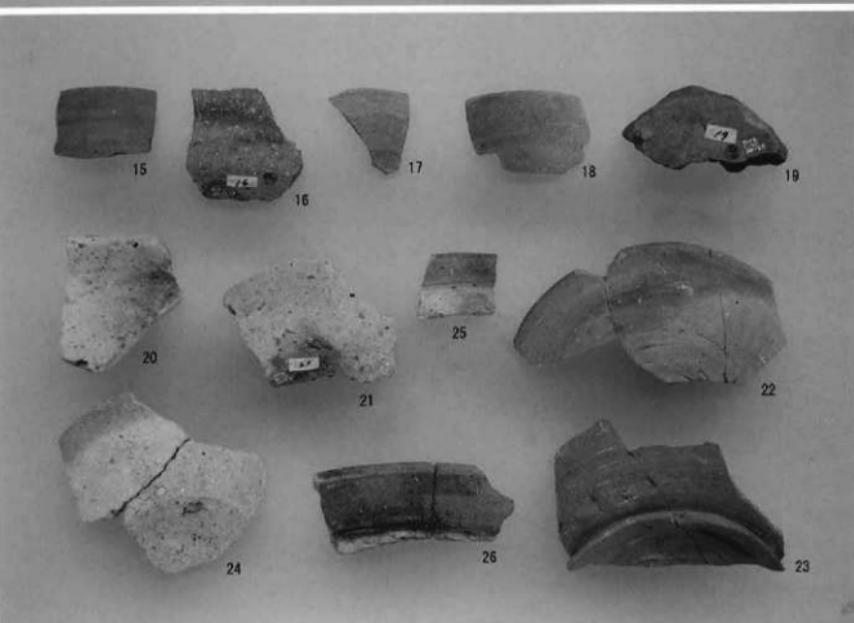
遺物1



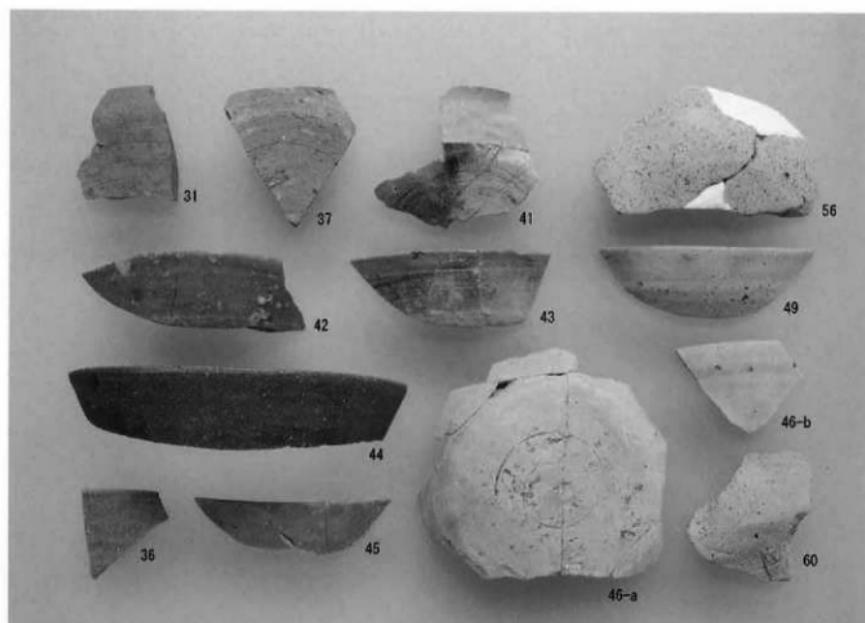
SD-10満・SD-12満



遺物3



SD-01: 1~6
SD-12: 8~10・12~14
SD-13: 15~21
SD-12・13: 22~26

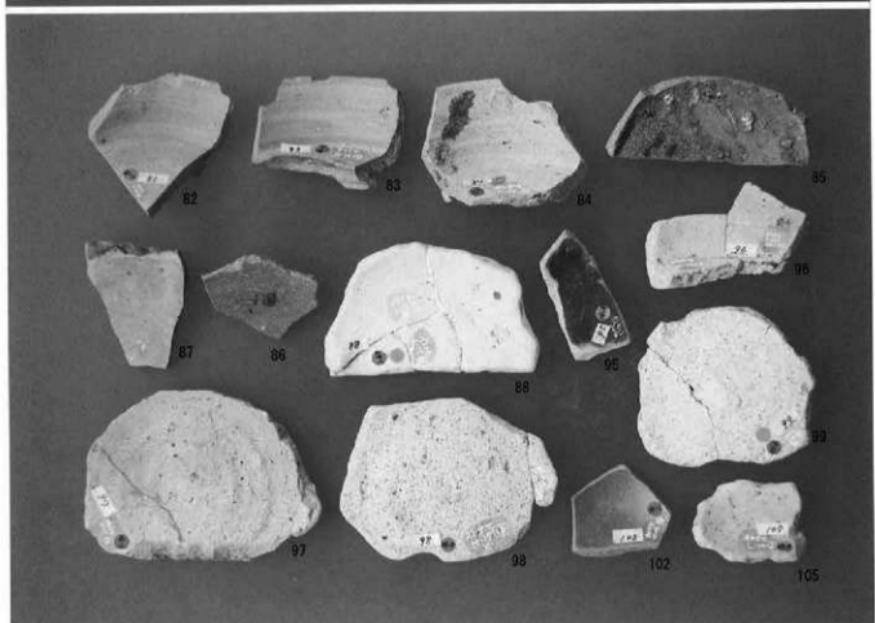
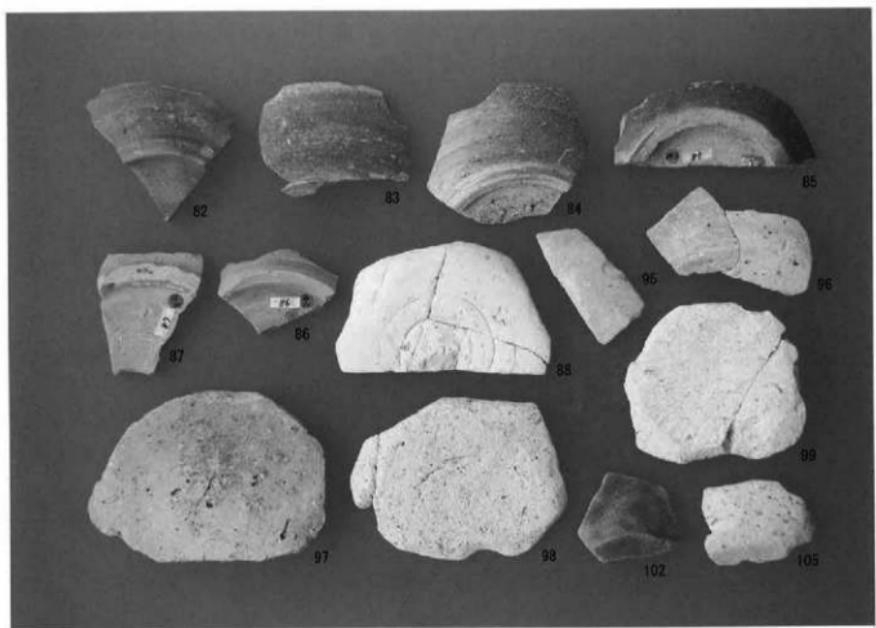


SD-10 : 31・36~37・41~46・49・56・60・67~71

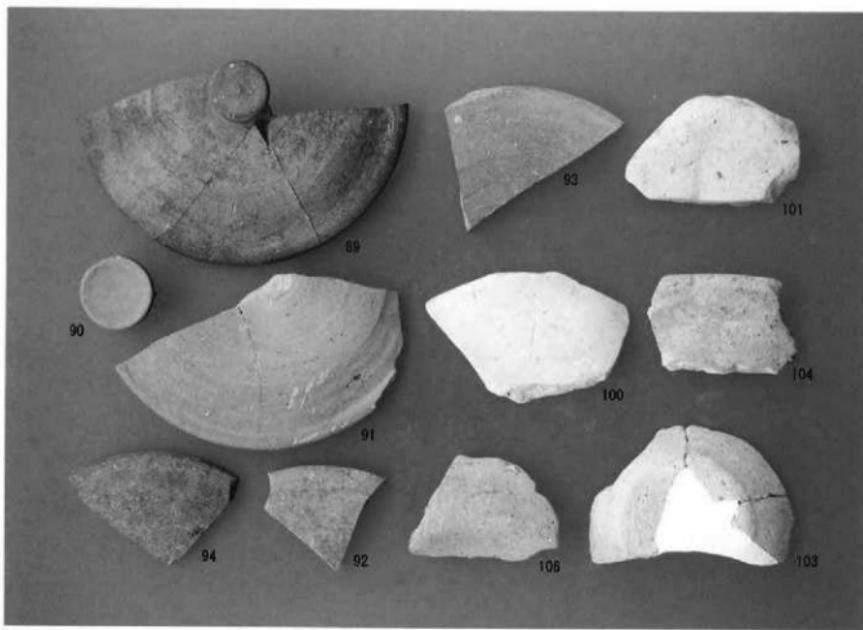
SD-11 : 72~76

SD-18 : 77~81

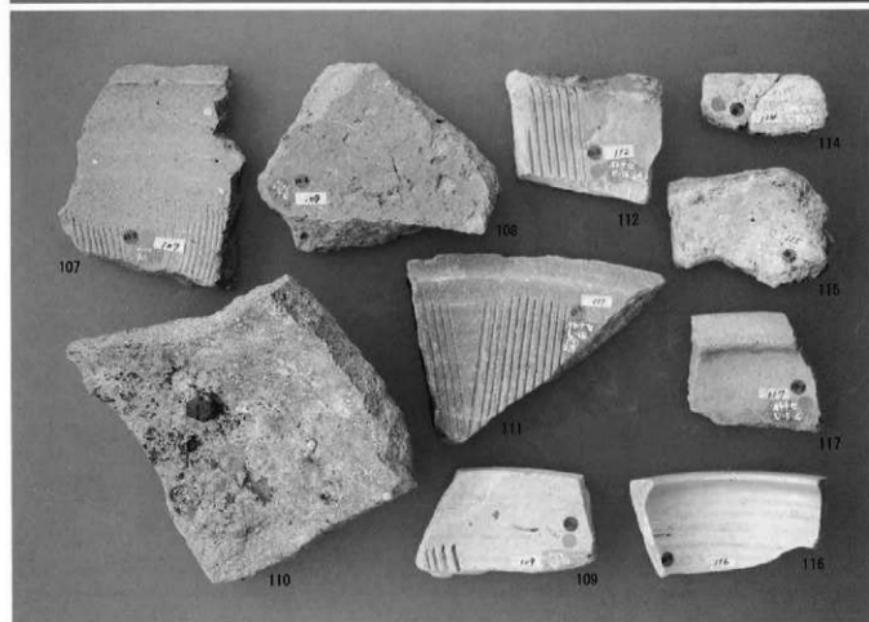
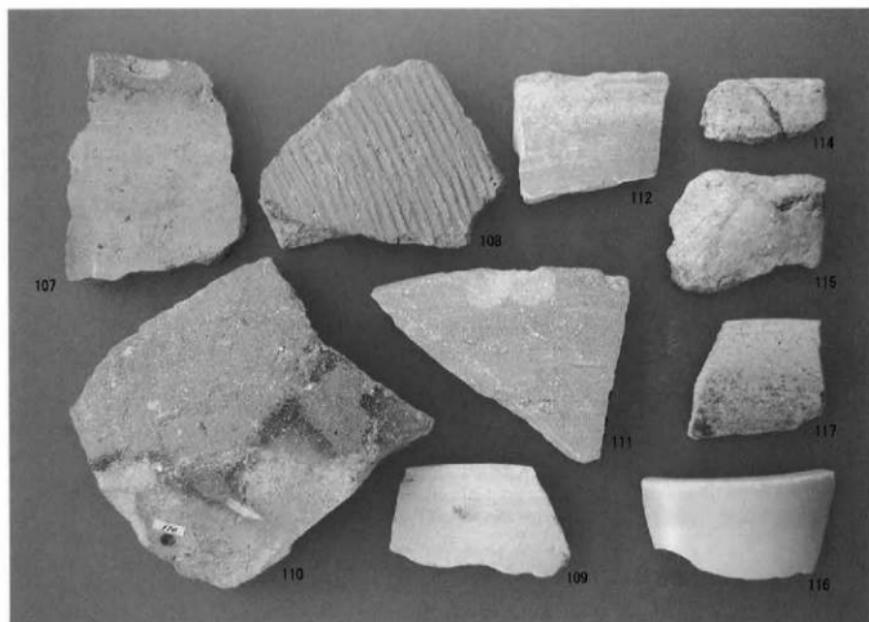
遺物5



包含層（古代）：82～88・95～99・102・105

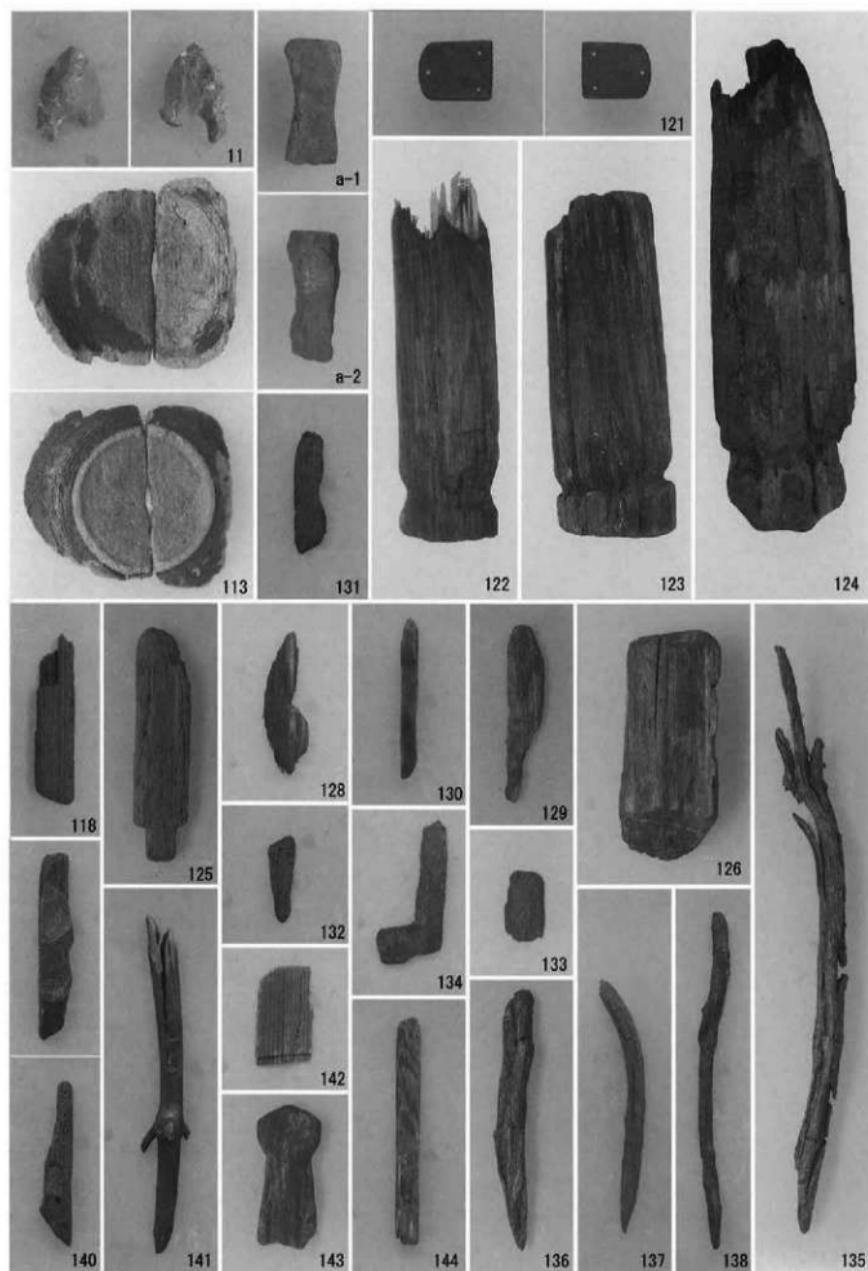


包含層（古代）：89～94・100・101・103・104・106



笠盒層（中世）：107～112

包含層（縄文時代・近世）：114～117



報告書抄録

ふりがな	おとなせ							
書名	音無瀬 I							
副書名	新潟県柏崎市・音無瀬跡発掘調査報告書 I							
卷次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第68集							
編著者名	品田高志							
編集機関	柏崎市教育委員会 教育総務課 遺跡考古館（柏崎市遺跡考古館）							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	郵945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2012年7月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間 西暦年月日	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おとなせいせき 音無瀬跡	新潟県柏崎市 大字北条 字音無瀬	15205	678	37度 20分 34秒	138度 38分 41秒	19961106 ～ 19961218	545	市道改良工事に伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
音無瀬跡	集落水路	奈良時代末～平安時代中期	建物跡1棟 溝10条 土坑・落ち込み1基	縄文土器 土師器・須恵器 綠釉陶器・製埴土器 ・珠洲・越前 近世陶器・漆器 帶金具・石造 木製品・柱材	古代・中世・近世の用水路跡 『白川風土記』に記された「オトナセ川」との関連が注目される。 土器を用いた儀礼の跡。 墨書・刻書土器が多く出土した。特に「井」という文字・記号が多い。			

※ 緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第68集

音無瀬 I

—新潟県柏崎市 音無瀬遺跡発掘調査報告書 I —

平成24年7月25日 印刷

平成24年7月31日 発行

発 行 柏崎市教育委員会 新潟県柏崎市中央町5-50

編 集 柏崎市遺跡考古館 新潟県柏崎市小倉町7-18

印 刷 株式会社 小田 新潟県柏崎市安田4153-1
